

輩がちらりと現れて、予の來れるを他の僧に注意しある様に見えたりしが、程もなく十八九歳の肉附よき青年僧侶來りて予に來意を聞く。予徐ろに「御開山拜登並に拜宿宜しう」と願ひ入れると、彼は「しばらく」と云ひすて、庫裡の内に消え去りしが、再び出で來りて「足を洗つてお上り下さい」と云ふ。予は云はるゝまゝに洗足して牀に上れば、彼は手をとある一室に案内せり。室は床附きの八疊にて、達摩の形相凄まじき一軸の前には、芙蓉の花ダリヤの花など造作もなくいけたるあり。予靜かに北面して面壁打座せり。幾分か心頭の落ちいりたる時、到着以來半俗半僧投宿帳の運び事など、此等不審の解結に務めて工夫せり。聽て又時ならぬに鼓鳴り鐘なるも、讀經の報告に來るもの更になし。予の不審は一層加れり。予は此の讀經の如何にか、わらず、案内なくどしどし祖堂に上れり。誦經は三十分も要せざりき、衆は散れり。予も後へに従ひて御階を下らんとするとき、ふと先刻の半僧が書き餘しの山水に目を注ぎあるを見ゆ。此の時初めて予は彼が食客畫工たりしを悟れり。

再び室に歸りて座すること暫し、客行（客持てなし役）入り來りて予に投宿帳を記すべきを告ぐ。予丁寧を押頂きて「京都府加佐郡……」と記し、今の讀經の如何なるものかを訊問せり。彼は其の讀經の住持の私の讀經なりしより予を案内せざりし理由を述べて去れり。此に到りて予は到着以來の總ての疑問を全く解結するを得たり。彼は又入り來りて予を食堂に導き、夜は茶菓の饗應に、當僧堂の模様天橋の昨今など思ふまゝに語りて、予の旅のつれづれを慰めたり。予は當時の接客振りの親切丁寧なるを感謝しつゝ、九時少し前佛の御名と共に安眠しぬ。

二十二日。振鈴の音に目を覺したるは午前二時か、はた三時か、勝手不明瞭なる洗面所を探し尋ねて漸く洗面し、威儀を具して選佛場（座禪堂）に入る。衆の同じく座するもの七八名、場中黙々として山の風なきに眠るが如く海の波なきに横はるが如し。僅に聞ゆるは曉鐘無常の音と我が鼻息の微かに通ずるのみ、正面の一炷香ゆるやかに立ちのぼりて夢幻空華の理りを示す。此の時此の刹、住

持は一喝大聲「發心正しからざれば萬行空しく施す」の祖句を引きて、自縛の衆生に佛祖の過體を鼓吹せり。予此の時諸夢自ら去りて萬法一如たり。後は日課諷經にうつり、小食（朝食）の供養に眞の禪味を謝し、御開山拜登を了へて係り員に昨夕以來の厚意を謝し、寺を辭して愈橋立の眞景を窺はんとせり。されど予は且て先に模範中學の稱ありし、府立第四中學を見學せんとて、道を反にとる。校は町を距る事二三町、田園中にありてその地域は石屏もて圍まれたり。即ち行きて門衛に案内を乞ふ。彼は頗る横柄なる態度にて、「外部のみなれば勝手に見るべし」と云ひすつ。予は不満を抑へて講堂其の他二三の教室を覗く。校舍古くして所々破損し、清潔亦致らず。グラウンドは校舍の右方にありて、その間を石屏にて割りたり。その廣きはよく我が校を凌ぐも、雜草茫茫と追ひ繁りて平原の一部に過ぎざる殺風景は只啞然たるを得ず予此に長く足を止むるを厭い早く天橋の眞景に浴せんとして道を急ぐ。

宮津町より切戸に到る、左手は山と田にして右

手は直ちに海波にのぞむ。町を離れて二三町、清水の岩間より渾々と流れ出づるを見る。表札あり「一杯水」と名づく。和泉式部小式部内侍を産み落したる節此の水を掬ひたりと傳ふ。故に又一に和泉式部産湯の瀧とも云ふ。地藏尊ありてこの水を守る。たまたま順禮親子此の水を汲みて去る。しばし行きけるほどに道を隔て、一小丘に古松十有株ありて一小祠あり。「鶏塚」と稱す。丹後守公基朝臣和泉式部の眞跡を埋めたる所なりと、予この故事を記して進む。ほどなく二頭曳の馬車予を追ひ越す。左手の山は順次に遠ざかりて茶屋の一二代りて來る。海の入り込みたる處大蛸輪の海中に入らんとするが如き巨岩横はる。「涙が磯身投石」と云ふなる、小松内大臣重盛公の五男丹後守侍從忠房に仕へたる花松と云ふ白拍子、平家没落の際公子を敵に渡すを厭ひて抱きてこの淵に投ず、時人憐みて皆涙を流したるよりこの名ありと。老松今も尚波岸に臨みて當時の悲壯なる歴史を物語るあり。之を過ぐれば文殊の山門松の翠など從ひて來る。門頭の兩側には店頭市をなして客呼ぶ聲

喧し、予此等に目もくれず先づ進みて文殊尊前に額づく。や、ありて山内一覽門頭の二重の塔を見る、多寶塔と云ふ、特別保護建造物に屬し府中城主延水修理之進の施主にかゝると。明應九年庚申七月十九日立柱、十月十九日立心柱、既得四百十有餘年を得たりと。

予文殊を下りて名にし追ふ切戸の渡し場に出づ。舟は十程程にて天の橋なる一端に達せり。白き砂地に幾萬本とも分さまへぬ程の松が背比べして雲を突ける、其の廣きは十五六間より狭きは七八間に到る松原が海中一里も突き出したる、三景の一と稱せらるゝも真に無理からぬことにや。天氣が曇り來つて雨模様なるより松の梢がゆらゆら雲に達しある様なり。さくさく歩み行くやまもなく石の鳥居ありて板扉もて圍める社殿あり、橋立明神なり。その傍らに四本柱の小屋根葺きの井あり、昔岩見重太郎の仇を報いしと云ふ舊跡なれば、若もこの井にて仇敵の首を洗ひしものにあらざるか。「磯清水」と記せるあり。

橋立や松の下なる磯清水

の波と能く調和せるなり。煙の如き風波上を渡りて、天氣は一層ぼんやりとなれり。

橋立や松は月日のこほれ種 蕪村

予は成相に登り傘松よりの景を欲せば、雨のふらざるうちと思ひて、急ぎて松原を通り抜けたり。此處にては成相詣での老人小供をのせし釣籠の山より降り來れるに會せり。予も亦成相山麓の某寺に荷物を預け置きて、愈成相十六町に差しかゝる。松方侯も此の地に杖を引きしか、

静かなる波間にてらす月かげを

みるもたのしき天の橋立

の一首第一町目の立札に書せられたり。二町目には谷鐵心居士の詩

萬籟松邊路 日斜四望遙

峯頭霞散綺 片々落天橋

愈上れば愈此の詩趣味はる。黒川真頼氏の

與謝の海のけしきのよさもあかなくに

すゝむるもちも天の橋立

の暢氣な句も杖引く人の慰みならん。四町目五町目と次第に上れば、

都なりせば君も汲まじ

其を廻れば一軒の出張り店ありて、繪葉書や貝細工を商へり。其の前を通りて松原中にうち入れば、外観よりも一段立派なるものにて、三かゝへもある古木幾十本相競ひて十丈以上に高く聳えたちたる、その壯快なる趣は如何なる形容も爲す能はじ。根上りの松も庭の植木や盆栽の不自然なるものは極めて厭味勝なもの乍ら、風が砂を吹きさらいて自然に根上りとなせるは頗る趣きを有するものなり。巨大や幹や繁りにしげれる枝や葉をしつかり支へ持ちたる根張りの力が十分その形に顯れたり、實に見る目も心地よし。この高大にして且つ壯快なる趣は到底須磨明石などの及ぶべくもなし。や、行けば海に面して皇太子殿下の御便殿あり、其の近くに御手植の大王松が伸びに伸びて繁りたるが云ふばかりなくめでたし。其れを拜して波打際の下れば、奥丹後の山々は薄墨を引けるが如し。のたりのたりと波のよする潮水は透明にて、底の砂利さへ美しく見ゆ。沖の方より二艘の小舟ゆたゆたと櫓を押し來る。のたりのたり

嬉しくもけふこを見つれかねてわが

心にかけてし天の橋立

とある。「ヤレ〜次は傘松」など落書せられたるが益嬉し。ほどなく股のぞきの名所傘松に到着したれど、先づ成相觀音に賽して後と思ひ立ちよりに行く。

道は進むにつれてなるく、山は廻りめぐりて海などは少くも見えず、只小經の邊りに女郎花の咲き出で、鬱蒼たる雜木林に鶯の後れがほに鳴くなど、せめての心やりなり。辿りたどりて老杉枝を交わ畫尙暗き仁王門に達すれば、鐘樓の一角本堂の棟など漸く現れ一町餘にして此の靈地につく。塵打ち拂ひて大慈大悲の御影を拜す。御詠歌は、

波の音松のひびきも成相の

風ふき渡る天の橋立

本尊は聖觀世音にして西國二十八番の札所なることは人の知るところ、まことに幽邃寂寥の絶境高潔清淨の靈地なり。予暫くの後御前を退きて道を返しぬ。途に會ふ人毎に「もう幾等ほどありますか」と尋ぬあへげない様子に、「もう直ぐですよ」

と方便の嘘を云ひ乍ら面白可笑しく傘松につきぬ
茶店の床几に腰打ちかけて憩ふほどに、この店の
老婆すかさず茶を汲み来りて「御疲れさま」と愛嬌
ふる。これには流石何か購はずには過されまじ、

二度と行くまい丹後の宮津

縞の財布が空になる

の俗語はこの邊りに存在するものならんか。予
扇子二三本を求めて心臓の静まるを待ち、立ちて
股のぞきの滑稽を演じんとす。圓了道人賦して曰
く、

丹山園海海如盤

一字松林劃碧瀾

人若欲窺其活畫

宜開兩股倒頭看

と、予は天橋の三景の一なる所以は傘松により
て活くと思ふの外、筆も言葉もその用をなさざる
を知りて、烏丸光廣卿の

君とは見すは知らしと答まし

言の葉もなき天の橋立

の一句が芭蕉翁の

嗚呼 松島や まつしまや

の句と相雙びて其の眞を寫すに充分なるものと

思ふ。

嗚呼橋立の景を探らんとして此處に登るを厭ふ
ものは、眞に橋立が三景の一なる謂を知らざる人
々なり。予は只心も魂も奪はれてしばし恍惚たる
も、時間の都合もあれば盡させぬ眺めをふり捨て
山を下りぬ。先づ宮津行きの舟をやとひ、波静
かなる與謝の浦曲を漕ぎ出でぬ。舟の近づくにつ
れて鶉鳴など、ばたばたと飛び立ちて橋立の松の
小枝に止り、又下りて水に浮ぶ様何となく風雅な
り。波はいたつて静か、船人は「幾らひどい波で
もこの浦曲には入らぬ」といふ。今や舟は切戸を
過ぎて松影樓對橋樓などの水書を千々に碎きつ、
零時前難なく波止場近くに着きぬ。思へば午後一
時四十五分の汽船こそ、我が天橋行脚最後の思ひ
出なりけれ。

史蹟を尋ねて

四乙 森 純 三

湖東近江の戦國時代に於て、群鶴を抜き出で、
名も高き賢君たる淺井長政の居城たりし、小谷山

は實に一として昔を物語らざるなし。余は此の地
を探るべく、小谷村出身の中島氏と、外同村の二名
孰れも長濱アンモン卒業生の案内によりて、大正
十年一月三日の吉日を卜して、余等の一行は小谷
城跡に向ふ。時に嚴寒なれども、北國の地にさへ
本年は割合に暖く、雪を見ざりしは誠に遺憾なり
き。我等は元より、雪中行軍とは心得居たりし
に、雪のなかりしは残念千萬なりき。然れども、
寒き北風は顔面に吹きつけ雪中行軍よりも、尙寒
中に於ての最上の運動とはなれり。さても、一行
は集合地たる、小谷小學校を發して行くこと數里
にして、山僻の一寒村に達し、尙進むに偶々一個
の池あり、池甚だ大ならずと雖も、水極めて碧く
濃か試に一船浮べ手をもて探らんか、手も亦水と
共に青く一塊の石一叢の藻歴々として數ふべく、
雲天たりし此の日も玲瓏透徹とや、かくの如きを
云ふなるべし。水の源は何處とも知れず、想ふに
風雨一たび到らんか、このあたりは鳴門の怪女の
栖處とや思われん。池岸の老樹杉松鬱蒼として物
凄くその上水の透徹とは、一種神に入る心地す。

附近に一村落あり。「池の奥」と稱し、名も亦我を
して尊嚴を覺えしむ。「池の奥」嗚呼懐かしき一村
に、別れを惜しみつゝ、山路を辿りて登れば、坂
急にして(約四十五度位の傾斜)流るゝ汗は、淋漓
として肌を沾しぬ。冬にすらかくの如し。夏の山
路も思はれぬ。その中に、その上急斜なる、峻阪
(約六十度)ありて、よく一町を行くに向數時間を
費し、巉巖を履み、蒙茸を抜き、虎貌に踞りて、
互に手を引きつゝ、漸くにして、山腰に達したり。
稍平き所に、密杉畫尙暗き迄、鬱茂して中には、
驚くべき大岩あり。よくその大なるを知る能わず
岩は皆苔むすび、怪岩の如し。この岩には又驚く
べき石灰洞あり。この洞穴は地方に於て有名なる
ものにして、今諸君の耳に入れんとす。あゝ大なる
哉。石灰洞は地人の傳説ありて又面白し。傳説
に「遠き昔、その昔、紀元一千二百年頃初めて百
濟王より佛像を献じたれば、欽明天皇之を祭るこ
との可否を群臣に問ひ給ふに、蘇我稻目は之を祭
るべしと答へ物部尾與は反對し兩家大いに争あり
しが、稻目の子馬子尾與の子守屋又各々の父の志

をつぎ相争ひ馬子は遂に守屋を攻滅したり」とは正史にあれど、この傳説は事實を反し、守屋は滅されず。長く佛教の反對をなし居りしに、聖徳太子と不和を生じ、太子に追はれて、此の小谷山腰のこの石灰洞に逃げ三年の間この洞窟に隠れ居りしに聖徳太子大いに怒らせ給ひ、弓を守屋が逃ぐる時に射られて當らず、三年の間その矢は、空中に飛行し三年経て守屋は、岩洞より出づれば矢は守屋の頭上にうなりを生じて落ち來り、終に守屋死せり」との話なり。その時落ち來りし、矢は神に祭られ居ると聞き余等は一時神氣に打たれ、神々しきを感じたり。暫くにして、一行はこの洞窟を探らんとて、中に入らんと試み、先づ用意し來りし蠟燭(直徑二寸)に火を點じ、上衣をぬぎ入らんとす。然るに入口は狭くして(巾一尺又八寸位)太りたる人は入る事の出來得ざる位なり。この狭き間は約三間の長きに渡り、小膽なる同輩は入るを恐れ止れ。と云へば余等も一種の恐意を生じたれども、多年練はれたる金龜赤鬼の一分子なるぞ、と勇氣は天を衝けども、心の鍛練十分ならず。殘

念乍らも一行は一時洞を出で、作戰計劃に頭を凝し、如何にせば心は戦かざるか、考へ居りし時一人の友は「よし然らば我等は背水の陣もて手拭を以て「はちまさ」をなし、皆ナイフを出し、而して入るべしと、もし敵御參ならば、日頃の劍道に浮ぶ瀬もあれと突きこむべし」。おと用意萬端十二分になし、入らんとせしに、又先頭の一人小膽中途にして意を屈し、更に進まず。恐怖心はその上に増す世の習。遺憾ながらも亦もや退却したれば、次は僕の先頭に選ばれ、沈着にして且大事に臨みて趨起せざる。我輩は莞爾としてこの撰を迎へ直徑三寸の蠟燭を片手に、右手にナイフを日頃練へたる膽力と腕力を任せ、柔道は鼻に掛けて漸く三間恐はく進む程に、後ろの友はふるふる振ふを見て目を閉じて尙進む。之實に探險家が一大冒險を敢へてするに似たり。巾一尺許りの洞窟に身を横にして、無理無体に押せば、突然自分の足は三四尺許落下せし思ひして南無三、余は怪物に足引かれし心地して、あゝと言を發せしのみにして、心は無きもの、如く、氣は絶せるもの、如き感

覺えぬ。その時友も驚き、自分を助ける様子もなし余は絶体絶命、聲もあらん限りに、天地に轟く聲にてお助!!!と叫べり。然る友は急に持ちし石油綿に火を付けたれば、さも暗き闇洞も晝を欺く如し氣を取り直し、前の地を見れば地は三尺餘り落下し、余の足も共に落下して怪物に引かれし心地せしなりと思ひ、やつと安心し胸の騒ぎも静まりぬ。尙火を頼りに進むれば、この落下せし所よりは一層廣く又高し(巾五尺高約二間)よくよく足下を照らし、行く事五間の長さは、實に目的地にして三年の間守屋の住家たりし所なり。前の恐れは失せて勇氣はいやが上に増し萬歳三唱せし時の嬉しきは鬼の首を得たる程に思はれぬ。數多の冒險を排して龍登門に達せる心地にて、昇天の概ありき。約三十分の間洞窟を研究し、材料を集め他日の參考にせんものと持ち歸れり。學校に於て學びし鐘乳石數多あれど取るべき道具も持たず。苦心をなし二三の小片を得たり。地人の話しに蝙蝠數多居るとの話しなりしに、一匹の「かうもり」も居らざりき。念の爲め名を岩に留め置き、出でんとせしに、

一人の友は思ひ出したる如く、一個の大なる岩片を起さんと試み居たり。余は直ちに察しおと、その岩の奥にも一大新國現るべし、よりに余等四人は共に岩に手をかけ力戦勉めたれども、武陵桃源は得ず、擊柝の聲さへも聞えず。誠に遺憾なりき。小説の如き感は、空想から實事にならんやと、思われて面白し。風流なる友のSは我もし天下に富を得ば、餘世を我妻と共に、この洞窟に暮さん、と初めの恐怖心は失せて、今は諧謔交りの言と變り、面白きにさたなし。話しは盡きて洞の外に出づる事となりぬ。出するにも大いに困難を極め遂に虎口を出でたる時に十一時半。遂にこの冒險も達せられ出でたる時には僕等の服は泥まみれ、加ふるに蠟燭の蠟は余等の服、頭の差別なく雨の如くに落ち、爲めに頭髮はちりれ取るにも取れず。この時のスタイルは、實に諸君の眼前に見せたき程なりき。暫しの間この洞窟に別を惜しみつつ、道を頂きにとれば、雲の空は遂に雪と變り、雪の中をこの怪しき一行の通れる景色は、實に壯觀を極め、雪の爲に一行は勇を鼓舞しつゝ、頂上に到れ

ば、城の趾とも見るべき、數多の大石と云はず、小石といわず、算を亂して苦むすを見ては、轉た英雄の昔時の城の壯觀は實に名狀すべからざりし物ならん。然るに今はたゞ荒廢寂寞の極に達し涙禁ず能わす。

そもそも、淺井長政の家系を案するに、「長政はその元祖新井新三郎政重、三條大納言公綱卿の子孫にして、其の姓藤原なり。長政の子に四子あり。嫡男は萬福丸として、長政に先立て早世し、餘三子は皆女子にして一子は京極の宰相高次の室常高院と稱し、一人はその名も高き豊臣秀吉公の室淀殿と號し、右大臣秀頼公の御母に當り、一女は征夷大將軍秀忠の御台所にて、崇源殿と稱し、征夷大將軍家光公和子國母女院の御母。これ等三女は小谷城に生れ城落つるに及び、木下藤吉郎のもとに降參せしむべく、長政の命せし事にて後世に命を残ししものなり。如何に淀君がこの城に生れたるか、一大女傑が如何に養育せられしかと、思へば到底筆舌のよくする所にあらず。

淺井日記に「長政三女の降服するに及び莞爾と

下藤吉郎の如き勇將多く、淺井の勢には越前の淺倉を初めとし、その數織田より多く、如何に兩軍激戦に奮戦を重ねしかば、破竹の勢の信長も一時虎視して敢て手も出さざりしを見ても察するに餘あり。名高き木之下藤吉郎もこの戦には一時敗を取りしは、歴史に明るく、よく地の利を長政が應用せしかを知るべし。あゝかくの如き激戦ありし地を今僕がこの頂上に遊びて俯仰懷古の情に禁せざるも、亦故なきにあらず。長へに戦史をひもとき此の地に遊ぶ者をして涙襟に滿たしむる地なり。大正六年湖東の大演習の一日も、姉川附近にて行はれたる由を聞きて、地勢の重要な所なるかは戦術を知らざる我等にも要害なる所と感せしむるも故あり。敦賀聯隊の此地に来るや、必ず一戦交はしむるも亦故なきにあらず。余小谷山より此の地を望み、天下の要害地と叫ばざるを得ざりき。更に東を望めば、さやかに雪を帯ぶる伊吹の峯白皚々として白雲中に聳えて秀麗たり。そもそも伊吹の姿は東淺井郡より眺めたる形が一番よろし。殊に小谷山より望まんか、富士が二の舞を演じたる

して、火を城に放ち自殺せしは、行年廿九歳忠子孫に貽し名を萬代の鏡に懸ぐ。本朝忠臣多しと雖も、天下武家の手に移りし以來、惟、楠正成、淺井長政の二人のみ萬人の鏡みにして、武士の骨たり。云々而じか」とあり。一たび陣を四方に放たんか、實に滋賀の平野は脚下に展開し、地勢も亦極めて要害たり。彼の陣を按せんか、かの仲達祁山、渭水の空營を按じて「天下の奇才なり」と叫びたり。若し我をして仲達たらしめんか、余は長政の陣營を指して「天下の大奇才なり」と叫びて、その適當なるを知らず。試みに西方を眺めよ。青碧たる湖は一個の油の如く見えて、飯みたき心地す。緑したる許りの竹生島、宛然たる池に浮べる鶺鴒の如く、懐かしき金龜の地は漠々として微かに見ゆ。更に陣を轉すれば、伊吹の山麓より流るる姉川は黒蛇の蜿蜒として流るる如く、彼の名も高き姉川古戦場の地形は、手に取る如く見ゆ。憶ふれば此の古戦場の合戦は實に淺井家の盛衰の分れ、一時の英雄この姉川を狹んで、出陣せし昔、織田勢に於ては徳川家康を初めとし、部將に木之

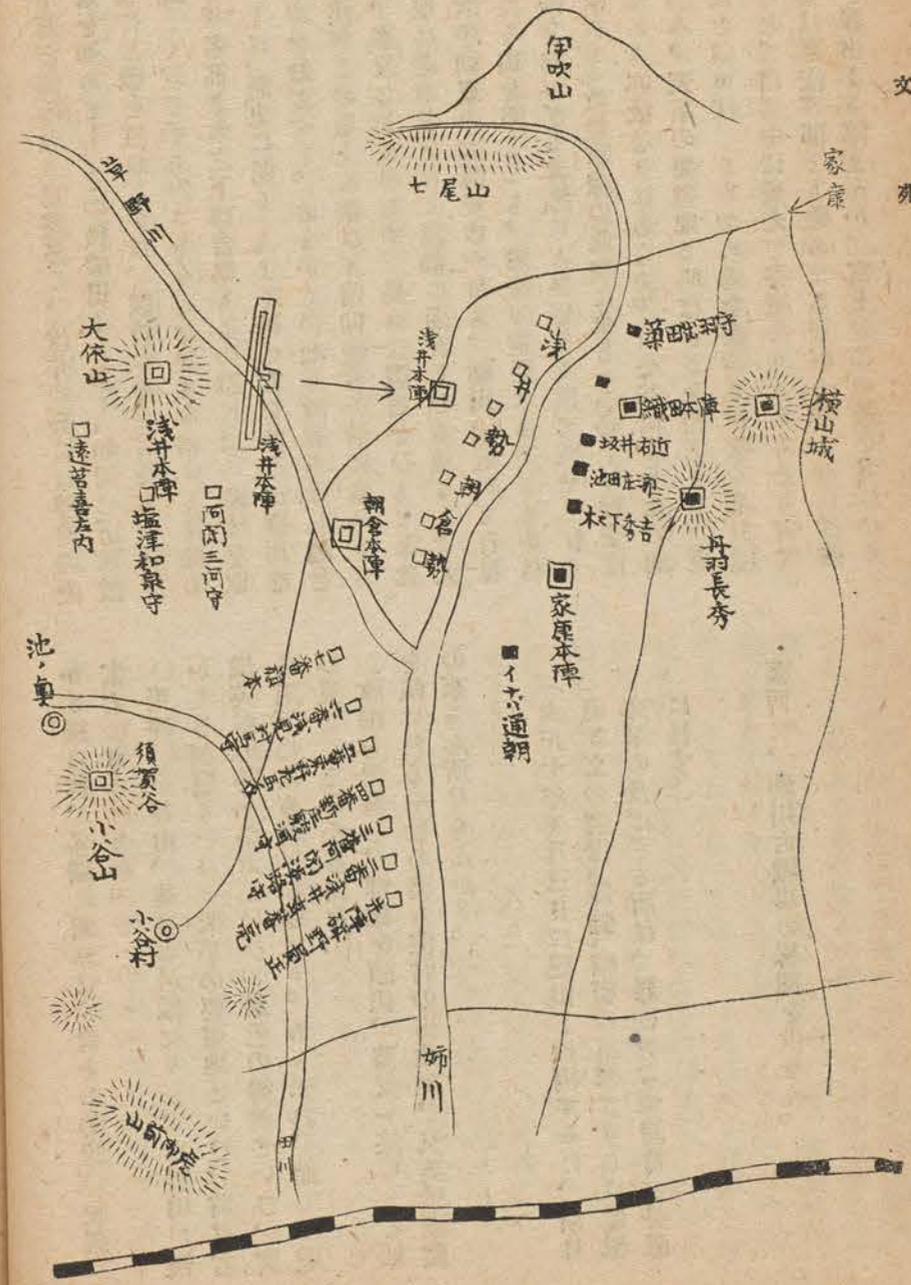
かと疑はれ、冬期に到れば、尙その美麗、皎潔、富士に劣るべきや。

嗚呼、小谷山、英雄の居城たりし、小谷山に懐かしき洞窟といひ、天下の要害地といひ、將又古城英雄の跡を忍ぶといひ、景色の秀美といひ、實に天下に求め得ざる地なり。あゝ來れ、而して遊び見よ、この小谷山を!!

政權を把握し、群雄を頤使、將又一笑にして城を傾けたる絶世の美人淀君の出生地、又英雄豪傑の來らん所ならんか?

(大正十年一月三日に登山し投稿するに、期日過ぎ文の選擇、飾裝、細密に出來ざりしは遺憾文筆の及ばざる所は、悪しからず諸君の英慮に任す。)

裏面に、姉川古戦場の畧圖を供せん。



夢

四丙 松下義夫

◎夢とは、煩さい現實の浮世から離れた、美しい結構な理想境である。此の別天地は非常に具合よく出来て居るので、十二月にも櫻花咲き、七月頃でも雪が降る。彦根から東京へでも一瞬時に行ける。飲み次第、食ひ次第、聞き次第。どんな事でも譯なく出来る。

◎軒下に眠る乞食でもお菰を巻いて眼をつぶれば金鞍白馬に跨つた昔の光景を見る事が出来る。失敗に失敗を重ねた研究者も、天晴れ大発見の榮譽をになふ事が出来る。

◎乳の香かほる息づかひ、優しう微笑みながら寝附いて居る赤兒の夢は、どんなに清く氣高いのか多分神様の膝に凭れて、お伽話でも聞いて居るのだらう。

◎兒童の夢は、大抵食物である。彼等が盛んなる食慾は如何なる時でも附いて廻るので、睡つた間にも種々なる食品となつて執念くも顯れる。

自分にも屢々經驗があるが、餘所の伯父さんから梨や密柑を澤山に戴いて、ニコ／＼もので床の間の手文庫にしまつて置く。夜が明けてから見ると悲しいかな、何も無い。開けて口惜しい玉手箱でなく、醒めて口惜しい密柑箱である。

◎少年の夢は、遊戯や喧嘩である。學校で殴られた、仇を夢で打ち返す事もある。

◎壯年の夢は、金錢上の事である。昔それがしの人が大黒天のお告げを蒙つて、桑の木の本を掘つて見ると、金の茶釜でも出て來ると思ひの外、蛆のわいた犬の死骸が露れたと言ふ珍話もある。

◎夢の本體や頗る朦朧たるもの露の如きもので、針のやうな身に薄紫の袍を着た、眼も鼻もない小さい足で人の臉などをチヨコチヨコ歩く極可愛い妖精であらう。翻へつて考へるに此の人生と言ふものは、大きい夢ではあるまいか。此の夢が死といふ警鐘で破られる時そこに新しい實有の世の門が開かれるのではあるまいか。即ち死といふ關所を通つて夢幻の現世から實在の來世に入る事が出来るのではあるまいか。佛法にも人生の事物は一

自分にも屢々經驗があるが、餘所の伯父さんから梨や密柑を澤山に戴いて、ニコ／＼もので床の間の手文庫にしまつて置く。夜が明けてから見ると悲しいかな、何も無い。開けて口惜しい玉手箱でなく、醒めて口惜しい密柑箱である。

◎少年の夢は、遊戯や喧嘩である。學校で殴られた、仇を夢で打ち返す事もある。

◎壯年の夢は、金錢上の事である。昔それがしの人が大黒天のお告げを蒙つて、桑の木の本を掘つて見ると、金の茶釜でも出て來ると思ひの外、蛆のわいた犬の死骸が露れたと言ふ珍話もある。

◎夢の本體や頗る朦朧たるもの露の如きもので、針のやうな身に薄紫の袍を着た、眼も鼻もない小さい足で人の臉などをチヨコチヨコ歩く極可愛い妖精であらう。翻へつて考へるに此の人生と言ふものは、大きい夢ではあるまいか。此の夢が死といふ警鐘で破られる時そこに新しい實有の世の門が開かれるのではあるまいか。即ち死といふ關所を通つて夢幻の現世から實在の來世に入る事が出来るのではあるまいか。佛法にも人生の事物は一

切空なりとある。
一切空寂なる現世を去つて、一切實有なる天國に安住することが吾人の急務ではなからうか。それでは死は吾人の爲に福音ではあるまいか。神は人生の一大夢幻なることを暗示すべく、毎夜小さい夢を撒いて行くのではなからうか。斯かる疑問は夢あつて以來人間の心に興へられたる神の敬示であらう。(終り)

吾等の最もうれしきもの

一丙 宮田徳太郎

日曜大祭祝日夏と冬の休暇は言はずもがな、一年一度修學旅行は、いと待ち遠く來年は先づ京阪地方か否な北陸か一日千秋の思ひぞする、日頃むつかしく思しき數學の問題がふと容易く解せられたる。圖書習字の何時もより一際優れて出來たると、あす運動會と言ふ日に雨しどりに降りしきりやむ様もなきに、明る日目覺め起つて窓を開けば空ははげもて拭ひたらむと思ふ程晴れ渡りやがて旭の今や高嶺に出でんとするを見るなど、我

ならではないか、これらの悦びはしらるべき、他の學校との野球ボートレース等にて我が學校の勝利と聞かば、それにたすきはらぬものさへ喜しき心地ぞする。試験成績のよきと、年中無病なる、良き先生を得たる等うれしきものになん。雨の降る日等に訪する友もなく、又ものうくて自らの訪すれん心も出でず獨り机によりて徒然と故郷の垂乳ねは恙がなきや、はらからは健かなるかと思やる折から、郵便と言ふ一聲に驚かされ出で取りて見れば、弟よりの手紙、うれしく封切るやおそしと讀み行けば未だ尋常四年のあどけなき文なれば餘程考へざれば讀み難き所もあり、又腹をかゝえて笑はしむる所もありなつかしきふるさとの有様のしらるゝも、うれしきものなり。

春ごわが世

四甲 樋上亮一

(一)
若き力の蘇るべき春はわが世に來りて天地は美しく彩られたり。

麗かなる光と和きたる霞とはわが世に來りて、空に、海に、野に、山に漲りて、見よ——死の影と老ひの姿なるべき冬の世、花もなく人目も草も枯れ果てし寂靜なる天地の墳墓は——今や影もなへに拂れ了はんぬ。

春の光の照す所草は萌へ花咲きて——空を向ひて湧き立つ泉——希望を浮べて寄せ來れる潮——囁きく流るゝ河——あゝわが世は何處か。愛の光、希の影、活動の姿、歡喜の色の溢れざるべきそ。徒に青年老ひ易く、流水去つて歸らざるを説く勿れ、「伊昔紅顏美少年」と嘆するを休めよ、今やわが世は復活せり。人よろしく花の如く、泉の如く、歌ひ勇みて、望の人たるべきなり。

(二)

秋は星の世界なり天と語るべく、春は花の領なり地と融合せんとす。秋夜涼水の時出で、満天の星を仰げば、清淨潔白遠く人寰を離れて夫席の龍顔に咫尺するの感あらん。若し夫れ「亡我」の刹那ありとすれば、そは恍惚として星を仰げるそのモメントにはあらざるか。而も又春風滑かに肌を

文苑

沁るところ美はしき花を眺むる時吾が魂は飄然として花と融合し無念無想一個無意味に呼吸する物体と異ならざることあらん、あゝ若し自然の大なる御手と握手する機會あらばこそは遅々たる春日悠然として花に接せし刹那にはあらざるか詩人晚翠は歌ふて曰く、

「同じ自然の御母の、御手に育ちし姉妹

御空の花を星といひ我世の星を花と云ふ」
これある哉。これある哉。春は正に酣なり。いざ人々よ、水邊花影、空想の翼を借りて春の心を迎らばや。春の天地をめぐらばや。

(三)

春は曙、東天のほのぼのと白み行く頃こそいとも心ゆく極みなり、試みに高きにのぼりて曙の春の姿を見よ。茅屋三四點花に抱かれて人の子の魂は未だ聖きその夢路より還らず風も無く聲もなし。幾億萬の星の子は父なる晝の光に怖ぢて母なる夜の懐にかくれて何處へか落ちゆきし、天も地も我に歸す、こゝに夢の如き春は生れにし。
春風は萬物に生氣を吹き付けり。草も醒めぬ花

も醒めぬ。
 何處にもなく神韻縹渺たる叫の聽ゆるは模糊たる霞の底に流る、春水なり。
 彼方金染の菜畑の裾に白き扇を開きし見ゆる春の海を見よ。聽け、遠く響ける海の歌を、今ぞ新しき春の潮は光と雲の競ひ走りて、今日の天地の新しき生命の福音を齎しつ、曙の夢を醒さんとする如し。かくして人の子は夢より蘇り長閑なる春の日に生るゝなり。

あ、春の美!!そはまことに情と生命と、詩歌の神の如かりけん。
 今吾れその温かき光に觸れつ、溢るゝ微笑の甘さに酔ひて、過去を恐れ未來を忘れ、將來を忘れて我心たゞ春とともにあり。
 あ、翼がもな、翼もがな、願はくはこの爛々たる春風を斜にうけて、遠く東溟を越え飛び行きたし。

(四)
 更に眼を放ちて霞の姿を見すや、その大なる翼は薄紫の一色に海を罩め草を罩めて香として際限なく萬有の生靈を融合す、あゝ霞は神秘の無盡藏にあらずや、誰が青冥を上帝の玉座といふ、余は獨り春の神はこの深き霞の奥にこそを在まし給ふと

信するなれ。悲しい哉、人の子!!神秘の扉を開くべき鎖鑰を持たぬ身の、せめてその裾に覆はれて平等無差別無念無想の境に入りつゝ、宇宙の冥趣と同化し天地精靈に相應せんか。
 かく想ひつゝ、余は若草の上に横りしが、やがて血液の循環のゆるぐなるを感じつゝ、遂に我を支へず空骸を残して魂は雲雀と共に霞の上にや澄みのぼる如し。

(五)
 「菜の花や月は東に日は西に」あゝ、誰か春宵の一刻を千金に値打ちせしぞ、寧ろ春の黄昏に於て更に詩趣深きを思へ。
 雲は琥珀の大袖を虚空に翻して夕日を包みたれど、さすがに緋の打紐より眩き一道の光は洩れて黄金の波打てる菜の花の上に煥發し更に緑の野邊に閃き小丘の紅に燃えつ金色の光旗の如く漂ひて天地を流れぬ。あゝ、そは夕陽の美、誰かその美に酔わざるものぞ。
 想ふに春は光なり、そは永遠との融なり。さはればや春は行かんとするを、花よ蝶よ、夕べの雲よ、せめて余の憧れの翼の伸べて光を辿り宇宙の大我と通せしめよ。(一九二〇、五、一七)



紀行

大正九年度第五學年旅行記

- 辻 忠三郎
 山崎 愛三
 齋藤 和雄
 藤田 義藏

【第一日】 彦根―國府津

十月六日 曇
 午後四時半彦根驛前集合、一行約七十名。一行中には旅行中に開かるゝ第一高等學校ボート大會に参加する水上部の選手も加つた。我が水上部は五月に神戸沖に、八月には石場濱に、惜くも破れた悲憤の程の猛練習に、今や腕の力のためすべき時は來たのだ。

戦はん哉!時機來る 戦はんときあゝ來る
 意氣の腕に權持てば 天地の精も聲あげん
 熱誠な赤鬼分子の見送りに大庭舵手は「死んでも勝つてきます」との悲壯な盟の謝辭に一同必死の覺悟を緊張の胸にひめた。

この時我々は氣と血の結晶である一高や三高の應援を聯想せざる事を得なかつた。
 汽笛一聲「彦根中學校水上部萬歳」の聲の裡に汽車は彦根をあとに東へ東へと進んだ。
 醒ヶ井柏原邊で夜の扉は全く閉ざれて親しい故郷の空も遙かの彼方に消え午後八時頃に名古屋に着いた。丁度この時雨は車輛を流さんばかりに降り出し加ふるに夥しい旅客は一層車中の混雑を助けた。

汽車は箱根へへと進むが夜中のことだから窓外は何も見えない、車中の慰安にと謄寫版刷の旅行ボンチが數回發行された。
 十一時濱名湖を踰え昔
 箱根八里は馬でも越すが
 越すに越されぬ大井川

とまでうたはれた東海道の難所大井川も鐵橋で
數分の後に過ぎてしまふた。

併し如何に文明の世と云ふても難所はやはり難
所で大井川の鐵橋は最近復線になつた許りである
汽車は裾野へ〜と進んでいつたが夜中にて富士
山も見えない唯富士〜の話の中に午前五時前國
府津についた。

嬉しい旅行の初日でか汽車に不馴の爲か昨夜は
眠つたものは少ないらしく疲勞の色が〜と
顔に見えた。

【第二日】 國府津―箱根

國府津についたが心ない雨は肅々と降つて居る
直ちに電車で小田原提燈小田原評定等長いと云ふ
點で有名な小田原のフンドシ町をすぐ。繁榮は北
條氏の時にその極點達したが今は人口二萬三千を
有するに過ぎない。電車はガタ〜と揺れながら
酒匂の荒河を渡る。二宮尊徳翁の故事を憶ひつゝ
左に小田原征伐の時太閤が本陣を布いた石垣山の
巖然たるを、右には蘆の湖の火口瀬早川の急流を
ながめつゝやう〜湯本に着く。

湯本から徒歩、その風光を愛でつゝ宮の下に着
く。

箱根は自然の大偉物である風光の美に加ふるに
設備の完はこの大廓をして一大公園たらしめて居
る。吾等は勿論、古今の大文豪大畫家でもこの天
然の大景を記し、或は畫くことは不可能であろう
又たとへした所で、所謂「鴨を畫いて成らずんば
反つて鷺に類す」の類に列しはすまいか。箱根は
一見に如かずして、筆墨言語で稱すべからざるも
のである。實に箱根は天下の絶勝で「箱根を見ず
して日本の山水を云々せな」と云ふも蓋し過言で
はなからう。

宮の下に宿をとり荷物をあづけて當日第一の目
的地たる海拔三千五百尺大湧谷に向つて進む。底
倉の案内者にもなはれて木賀から宮城野を経て
一里あまり行くと仙石原と云ふ所がある。箱根山
中最奥の村である。頗る景勝詩趣に富んでゐる。
こゝの温泉は大湧谷から引いたものださうだ。次
で乙女峠、好い天氣ならばこの絶頂からは八面玲
瓏たる富士の全姿が見られるのだつたが折悪しく

細雨の空でその秀麗莊嚴に接する事は出来なかつ
た。道はいよ〜頂上に近づいた、硫黄の香がブ
ン〜やつて来る。頂上に達して見れば多數の硫
氣孔があつて轟々たる音をたてつゝ水蒸氣と硫化
水素の悪臭の混合氣體を何丈も垂直に上げて居る
片方の凹地には沸騰しきつた溶液がグラ〜と煮
わくり返つて居る。あゝ奈落だ。地獄だ。さすがの
赤鬼も思はず身震した。こゝは箱根山中凄絶第一
の地である。銀時計其他の銀製品などは皆化學變
化を起して黒くなつてしまつた。轉じて四方を見
れば南には神山の支峰冠嶽が衝き立ち、西南には
臺ヶ岳、西には紅葉の小塚山が聳え、山上の大觀
も亦格別だ。其處から裏へ雜木原の細道を二十四
町下るを姥子といふ温泉場がある。又神山坂道を
下つて蘆湖畔に出る。長さ三里横一里周圍六里の
かはゆらしい静かな湖が鏡のやうに箱根の山系を
映してゐる。湖畔に浴ふて箱根權現を拜し關所跡
を訪ひ歸途傍の茶店にますいウドンを唯一の御
馳走とする。

今日も休もか時の茶屋で

茶屋にや冷たい水が湧く

風が涼しい娘が御座る娘十六名はお花

につと笑ふて愛想を添えて
可愛や娘餅を賣る。

これは峠を越ゆる旅人の心持を歌ふた舊作であ
る。山を越ゆるには必ず峠がある、従て東海道を
旅する者はこの乙女峠を越えなければならぬ。旅
行した者は誰でも必ず峠の清水の快味を知つてゐ
るのであろう。茶屋の力餅の滋味を知つてゐるであ
らう。清水も餅も平地で食へば何の味もない、普
通の味だ。併之を山上で食つて天下無類の快味滋
味を感じるは崎嶇たる山路を攀ちて體を勞し汗を
流して大いに苦しんだからである。

東照宮徳川家康の遺訓に「人の一生は重荷を負
ひて遠き路を行くが如し」と最も適切に人生を道
破してゐる。遠き旅行の中には山もあり川もあり
大海もある。同じく大成功への旅行にも艱難があ
る山登りは苦しいものである。人生も苦しいもの
である。今は乙女峠には自動車が通じてやすやす
上る事が出来る。

しかし人生の山路には萬古永遠自働車は通じないのである。殊に今後の人生には苦痛を増すとも決して減じないであらう。

この苦痛にたゆる者は勝利を得、たえ得ない者は滅亡するのである。吾人はこの峠上に立つて思はず快哉を叫ぶと共に自然の教訓にうなだれた。小憩の後覺束ない足に元氣をつけながら宿につく時に六時すぎ、本日の行程山路約十一里。

【第三日】箱根―鎌倉

五時頃からもうぼつ／＼起き出して来る六時頃朝飯を済まして七時に登山電車で下山した。途中の事は重複を避けて記さない。かくする内に小田原を過ぎ國府津に到着し、直に汽車に投じて東へ／＼と走つた。富士は雲間に隠れて見えない、間もなく藤澤驛に着いた。又もや急いで江之島行の電車にて青松白砂の海岸を走つた、片瀬に着いたのは十一時であつた。それから日蓮法難の故地である龍口寺に詣で袂の浦海岸に出で、眞砂が足を没する浪打際から貝細工とさゞえの壺焼の店の並んだ道を登つて木の宮に参つた。箱根天城の山山

の點を加へたのだそらな。世に此を萬貫點と稱して萬貫の價があると言つて居る。兎に角く滑稽な事だ。日はとつぷり暮れた。

【第四日】鎌倉―東京

五時半起床洗面の後身を清め各自に明日のボートレースの優勝を祈るため鶴ヶ岡八幡宮に参詣した七時宿を出で神境を東に小川に沿ふて進む。此の附近一帯は頼朝卿の館址である。歩むと數町北側に小山がある大倉山と云ふ。山の南方から石階をふんで中腹にある頼朝卿の墓に参拜した。苦むし葛かづら這ひまぢりいと憐な墓である。

一世の大英雄も斯くして眠れるかと思へば、そゞろに涙に咽ばざるを得なかつた。右の方の細い坂を登つて一二町行けば岩窟内に建てたる二つの墓がある。大江廣元、島津忠久の墓である。

此處を下りて東に進むと官幣中社鎌倉宮に到る御醍醐天皇の第三皇大塔宮護良親王を祭り奉る。親王の御事蹟は世人のよく知る如く、父帝を輔け奉りて中興の大事を成就せられたのである。

社後に土牢がある。社務所に請ひ案内を求あ

大磯小田原熱海の長汀浦指願の間に在る。中に富嶽は獨り超然として千秋の雪を戴き、此全景を睥睨して居る様繪の如くである。併しどうしても江之島の觀物は彼の大洞穴である。この穴は島の裏手の浪汀際に在る。入口は滅法に大きいが入りに従つて段々狭く、従つて段々暗く、燈火を便りに三四十間も進んで漸々最奥の辨天様に達した。之れで江之島探勝を終へた譯である。片瀬から又電車で左に七里ヶ濱稻村ヶ崎の史跡を見、後に芙蓉の頭角を脊負ひ乍ら間もなく長谷に着いた。直ちに長谷の觀音に参拜し方向を轉じて鎌倉大佛に來た。觀音様は今から千二百年前の作、大佛様は約六百七十年前の作でいづれも國寶である。平凡な鎌倉の町を過ぎ鶴ヶ岡八幡宮に詣る。此の宮は石段に天を摩すばかりの一本の大銀杏がある。これこそ別當公曉が隠れた歴史の跡である。時間に餘裕があつたので建長寺に参拜した。此處の門には朝鮮の竹山が書いた

巨福山なる額が掲つてある。巨は勿論巨であるが彼が後の巨は寂しいと言つて前の巨の如く一つ

て参拜す。口は狭く内廣く而も下の方が開いて居る。廣さ十三疊、深さ一丈の土窟である。暗膽として陰風顔を襲ひ往時を追懷して暗涙に咽び低徊去る能はざる想がした。建武中興後親王は足利尊氏の讒によりこの所に幽閉され給ひ、北條高時の遺子時行が鎌倉を犯した時、足利直義の命令で淵邊義請の毒手に斃れ給ひしなり。嗟!!惜哉親王若し長壽し給はゞ國体の擁護、南朝の興復のため盡され給はれたであらう。噫!!宮の東南に寶物を藏したる一殿がある。親王の御親筆其他數品の寶物及び近頃出來た親王の御乗馬の木像等がある。神境には櫻樹枝を交へ、春には爛熳として親王の事蹟を飾る事であらう。次いで鎌倉幕府の役人青砥藤綱が松火をとぼしてまでも空あき錢をひらつたと云ふ滑川を渡り、高時の墓に到る。

高時は勿論不忠の臣である。併し彼が鎌倉幕府の滅亡に殉じた壯烈の精神は、鎌倉武士否日本武士の典型として一搖同情の涙なきを得ないであらう。

鎌倉を出發し十一時頃憧れの帝都についた。先

輩方の出迎をうけ、驛前の海上ビルディングの雄大な建築物に驚かされながら一行は二重橋前に来た。老松鬱蒼として四圍を圍み、云ひも云はれぬ莊嚴な感にうたれ、我には思はず襟を正し宮城に向ふて恭しく最敬禮し、聖壽の無窮を祈つた。前に楠正成の銅像がある。馬上豊かに手綱をかいぐり永遠に宮城を守護せらる様である。右折して南方に歩むと櫻田門にいたる。水戸浪士か白刃の下井伊大老の首飛んで鮮血春の雪をそめた、一大悲劇は我々彦根住人のよく知る所である。先輩の案内で日比谷公園を見物し、銀座をまはつて二時頃神田の宿についた。宿は廣島屋といふ。それから各自、自由で東京見物と洒落込む。

【第五日】東京

愈々隅田に覇を快する日が来た。旗やメカホンの用意で東京見物などは更に念頭にない。昨日先輩諸兄から贈られた地圖を頼りに選手を後に各自、自由に靖國神社に集るべく宿を出た。東京名物の一たる神田の古本屋の長い通りを通つて靖國神社の大廣場にやつて来た。雲を摩する大

村益次郎の銅像の下を通つて拜殿に至り、默座祈念する事習し、懐古の情今日の夕方の戦を思つて感慨無量頭も上げ得なかつた。

漸くそこを立つて遊就館を見る。無数の戦利品紀念品等到底云ひ盡せない。然し特筆すべきは乃木大將及夫人自刃の際の衣服だ、皆思はず静かに敬意を表した。集合の時間も間がないので大急ぎでそこを立去つて集合、直に整列して井伊伯爵家へと向つた。靖國神社を去る數町故郷を偲ばせる堂々たる大名屋敷、之ぞ伯爵邸である。先輩諸氏の案内で大廣間に至り先づ井伊伯爵と對面式を行ふ。それから茶菓の饗應、先輩たる文學士帝大史料編纂官中村勝麿氏の櫻田門外の手取る如き説明や、その時の刀、繪圖を拜見して晝食の御馳走になつた。新築の能舞臺を見せて戴き伯爵邸を去りいよいよ墨堤にと向つた。時に午後二時前、隅田川の會場にと集つたのは三時頃だつた。唯今日の必勝を祈り乍ら應援旗を抱へて墨堤を進んだ。五時頃だ、我が選手は急霰の様な拍手に迎へられ入場。應てポートに乗つた。陸には一生懸命に

なつてゐる全生徒、河には彦中必勝の旗を吹き流す先輩のポート、應援の聲は静かな夕方の隅田川の流れを騒がせた。敵は愛知一中(赤)に、慶普(白)だ。薄暮の内を三艘のポートは大責任をのせて引かれてゆく。嗚呼この時の選手の胸中や如何!!。

應援團の熱狂、選手の努力はそれから後五分。吾が彦中見事七艇身の差で優勝した迄夢中の内に終つた。胸が躍る手が揮ふ。あの有様は到底筆紙べ盡せるものではない。嬉し涙に萬歳を高唱して飛び廻るはね廻る。他から見たら狂人の群としか見えなかつたらふ。一高の人々の拍手喝采に迎へられてあの今日迄の努力の結晶たる優勝旗を手に入れて大庭舵手の挨拶のあつた時、嬉し涙は止め度もなく流れた。一高生諸氏の稱讚、拍手、吾が狂喜の叫び、實に物凄いはかりだつた。それからも尙夢中紫に銀の柏葉をつけた優勝旗を中心に上野停車場に着く迄歌ひ續けた。先輩諸氏からも親切に引き留められたが、豫定通りに東京を立つ事になつた。停車場でも亦寄ると障ると今日の話でもち切り再び嬉し泣きが始つた。どうしても忘

れられぬ今日の勝利、いかに嬉しい旅行が續けられる事だらふと云ふ思のみが、せはしい賑かな夜の東京市中を歩いてゐる間にも起つた。

【第六日】上野—松本

征旗ハ高ク天ヲ摩シ 金鼓勝利ヲツグル時
月ノ桂ノ香ニムセビ 今宵健兒ノ夢如何ニ
大正九年十月十日の夜の上野驛は我が彦中の應援團の歡呼で唸つてゐる。これ程悲壯な又これはご愉快な事が又と在らうか。

午後十時一同上野驛を發し、汽車は鳥羽玉の關東平野を北へ北へと慕進する。然し今日の熱誠な應援の疲れでか皆グーグー寝てゐる。午前一時一分所か一秒も異はず高崎に着いた。これから電車で長野群馬の境界山岳疊々たる確水の險を突破するのだ。トンネル又トンネル、二十餘のトンネルをくぐつたのだぞうだが夜中のことであるから皆氣がつかなかつたらしい。

輕井澤から再び汽車で平地と言ふても既に三千フートもある長野平野をひた走りに走り、六時四十九分長野に着いた。

長野は矢張り山間の僻陬であるから町などは非常
に悪い、又寂しい故郷の彦根の方が矢張り餘程
開けてゐる様に思はれる。然し流石佛都といはれ
るだけあつて善光寺だけは堂々たるものであるこ
の寺の右の坂を七町ばかり行くと、石童丸親子の
往生寺がある。この山上俯瞰の大観はまた格別で
第一眼下に有名な川中島が見える。

こゝを島と呼んでゐるのは、千曲川と犀川との
間にあるからである。頃は永祿四年八月上杉謙信
は兵を信濃にとゞのえ犀川を越え赤坂山の東に陣
をとり、武田信玄は甲府から兵を進めて謙信の軍
を塵にしやうと計つたのである。

謙信もこれこそ一生の大事と死を期して時の至
るを待つて居た。折しもあれ秋の日隈なく冴えて
霜に輝く兩軍の武器白う見えて、戦備は全く調う
た。然るに夜が更けて俄に大雨降り出し咫尺も辨
せぬやうになつてしまつた。理に敏い謙信は「幸
機至る」と叫んで千曲川を渡つて迫つて來た。信
玄は之とは知らない、夜明けて見るといつのまに
か敵軍は車攻の陣に布き、かへつて信玄を狭撃に

あるが、山水秀靈の氣偉人を産む、それ真なる哉
今はこの邊一帶は林檎畑、葡萄畑となつて、林檎
葡萄が名産になつて居る。

午後四時長野を出發。約二時間の後松本に到着
榮ある優勝旗を先頭に應援歌高らかに唱ひながら
一時間餘の後浅間温泉についた。こゝを浅間温泉
と云ふのは浅間山に近いからではなく浅間村とい
ふ村なので、浅間山までは約二十里ある。

附近の山麓から炭酸が出るので、炭酸温泉と云
ふて胃腸に効があるさうである。體が殆どへと
どになつたが、宿屋の行きどゞいた設備に疲勞を
なほし、旅行中最後の一夜を愉快にしたのしんだ。

【第七信】 浅間温泉—彦根

修學旅行の最終日、よろこびの最終の日は到來
した。充分な宿屋の設備に酔ふて六時の起床鈴を
も知らずに七時と云ふ頃、漸く洗面場は賑ひ初め
へ、早速大急ぎで腹や服装の用意萬端洩れなく整
場へと進んだ。

九時卅分發列車に乗る。觀月を忍び乍ら姨捨山

せんと計劃である。信玄は驚き騒いで急に士卒
を勵まし戦はしめ、兩軍入りみだれての接戦は、
殺傷算ふるにいとまなく、川の水は時ならぬ花の
流を現した。朝霧未だどちどちめた曉の中に蹄の音
高く眞一文字に馳寄る武者がある。白布で頭をつ
ゝみ大太刀を振りまはし信玄の前に立ち塞り、あ
はや信玄の体眞二つと思つたが、彼もさるもの軍
扇を打ちあげ二三合立ち合ひつゝあつたが、その
危険な事は蟻螂の斧にあたるが如きものであつた。
又その早業の妙なる事に間一髪も容れなかつた。
信玄の臣原大隅は我主を打せまいと謙信を刺した
が、あやまつて馬の尻をついたので馬は驚いて逃
げ失せ謙信の好機は去られた。この日の死傷千餘
人接戦十六合、十一戦は謙信勝ち、六戦は信玄の
勝となつた。兩軍は激しく戦うた後、逸早く謙信
の軍勢は西条山の西に近江守殿をうけたまはつて
容易に引き揚げた。

あゝ兩雄、この地を去つて早や四百年。そゝろ
にいにしへのしはれて愁然として黙立した。其他
この地の偉人としては眞田幸村、佐久間象山等が
を遙か右の方に眺めて西へ西へ進む。

更科や姨捨山の高嶺より

嵐をわけて出づる月哉

桔梗ヶ原の葡萄畑に先づ垂涎し、林檎畑の多い
のに再び驚き乍ら、すん／＼と汽車は走り續けた
鹽尻驛で葡萄の賣子の聲を聞いた頃から、雪州の
晝の様な美しい木曾川が線路へ訪れて來た。晝食
も車中で終つた。

五色錯雜の山々、清流岩に碎けて雪と飛ぶ激流
は、益々列車の兩側に迫つて、その度毎に思ひ出
した様に稱讚の叫びを擧げる。義仲旗擧げの故地
は氣のつかぬ中に去り、天を摩する御嶽、駒ヶ嶽
は依然頭角を表はして居る。絶勝に次ぐに絶勝を
以てする沼線の美は、どれを選んでよいか分らな
かつたが、その中でも最も心を動かされたのは矢
張り音に聞く寢醒の床だつた。中には大急ぎで寫
真を撮る者も有つた。唯もう互ひに肩をつかみ合
つて惚々ど覗き込んで聲さへこないで見えなくな
る迄見つめて居る。暫く汽車を止めて置きたい氣
がした。然し無威の汽車は尙すん／＼進んだ。

中津川を過ぎると電燈がつけられた。隧道だ、無数の隧道だ。紅葉山人の「佛に逢へば佛を殺し祖に逢へば祖を殺す」とは全くだ。實際凡人の我々にもさう感じた。然もその無数の隧道の内に無数に豪快な山水の景色、絢爛な配色の美で包まれた山々が走馬燈の様に引き續いて吾々の見参に入る。この景色は吾々の云ひ盡す事の出来るものではない。隧道は盡き時計はいつの間にか五時を指して居る。汽車は凄じい勢で名古屋驛に突進した。考へて見ると故郷は汽車で僅か二時間の彼方に控へて居るのだ。日は全く暮れ果て、無数の電燈は驛前の通りをイルミネーションの様に飾つた。六時十四分再び乗車。一遮千里、西へ西へと六日前のその夜と同じ暗黒の中を走り續けた。岐阜大垣、關ヶ原、さては柏原、醒ヶ井、列車は米原驛へ突入した。そこには懐しい赤鬼分子の一群が萬歳を以て迎へて呉れた。大洞の電燈も未だ見ないのに大低の者は下りる用意も終つて仕舞つた。

雷の様な潮の様な歡呼の聲、萬歳の叫に意氣揚

々迎へられ校歌を高唱して驛前に集合した迄皆夢中だった。大庭舵手の感喜に満ちた謝辭は再び嬉し涙に咽ばせた。この喜びは溢れて歡呼となり、熱狂と變つて凱旋將軍の様子否心持で、一週間振りの彦根の町を練り歩いた。土橋を最廣として廻れる右し熱誠なる町の人々の萬歳に凱歌を擧げて校門をくゞつて、再び大歡呼の内に解散した。時に城山の十時の鐘は歡喜に溢れた一同の胸にいと静かに消えて行つた。

噫!!吾等が五年生否中學時代、最後の修學はかくも愉快に、かくも痛快に、有意味に終りを告げたのだ。凄絶を極めた箱根山、偉大秀麗だった江ノ島の富嶽、嬉しかったポルト優勝は皆この喜びの中に終りを告げた。

終りに望み、此旅行中多大のお世話をなし下された先輩諸兄に謹んで感謝してやまない次第であります。(終)

x
x
x
x
x
x
x
x



詩壇

恭奉賦社頭杉

清堂 川島 丈内

社頭催曙色、
一境太森然、
白紗双成堆、
縹緲罩祥烟、
元旦書喜
履端佳氣滿、
椒酒闔家先、
月瀨觀梅十律

天地入新年、
祠殿清而肅、
青松翠竹鮮、
跪拜神澄徹、

摩穹琪樹聳、
標繩張注連、
茅茨古風儼、
懸思鴻蒙前、

松竹門門清、
慈親二豎乍回春、

玲瓏十里玉乾坤、
春日晴午放暄、
煙疎疎處酒旗飄、
清氣襲衣偏斷魂、

其一

遠隔塵寰別作區、
連迎不辨路南北、
侍客岸頭舟子立、
此間情致描難得、

開遍梅花千萬枝、
竹籬茅舍固非俗、
映水菴光非歷、
詩人欲賦天工妙、

兩山突兀一溪長、
十有五村花綴玉、
興酣先憶剡谿地、
今日初償平日志、

石徑羊腸次第幽、
欹斜澗勢岷姿妙、
花意拘人忘返路、
賞看不盡離輕去、

由來勝景在窮陬、
窈窕雲光嵐氣浮、
鳥聲呼客促登舟、
立杖巖頭更少留、

其二

東風細細透香宜、
赭石蒼岩分外奇、
倚甍苔樹影參差、
空把吟毫立幾時、

其四

溪巒樹石互縈紆、
彷彿却疑花有無、
彷彿却疑花有無、
佳境真成勝畫圖、

其五

脚底○深淵○有聲○
香依○風力○斷續○
環玉○便知○姑射○
漁郎○若解○箇中○
趣麗○

梅花○簇處○夕陽○明○
影墜○水心○斜以○橫○
冰霜○孰與○伯夷○清○
不向○武陵○仙洞○行○

其六

覓詩○日暮○步陔○陀○
薄霧○霏霏○罩山○麓○
樓微○見處○蕭聲○洩○
馥郁○香風○透衣○袖○

一鳥○何來○掠帽○過○
寒流○幾何○齒岩○阿○
花大○開邊○月影○多○
化身○千億○奈吾○何○

其七

繞山○長瀨○暮迢○迢○
古石○磴邊○苔漠○漠○
暗香○疎影○身疑○化○
最好○輕風○吹有○致○

時見○歸樵○過斷○橋○
萬梅○花外○簫竹○蕭○
微月○澹雲○魂欲○銷○
落蕊○片片○向流○飄○

其八

疎影○重重○與竹○連○
風來○銀海○欲生○浪○
吟咏○何人○追水○部○
嫩寒○著意○醉消○處○

繁○花○簇○酒○樓○前○
月○出○玉○山○微○帶○烟○
棲○遲○此○境○想○連○仙○
驀○地○詩○成○染○尺○牋○

其九

天下○初掃○蕩○
文質○致彬○々○
開○功○偉○哉○

一匡○蘇○萬○民○
昇○平○三○百○歲○
古○今○第○一○人○

建○囊○獎○儒○術○
僻○陬○仰○其○仁○

傷○心○欲○問○古○窟○關○
我○豈○尋○常○賞○花○客○

憶○到○當○年○涕○泗○潛○
牽○徒○私○日○入○芳○山○

松○杉○蒼○蔚○水○之○涓○
開○說○名○臣○咸○配○祀○

廟○宇○儼○然○前○帝○祠○
英○靈○只○合○有○含○怡○

吉野宮

錦○衣○割○腹○節○尤○堅○
一○笏○殘○碑○小○邱○上○

便○使○皇○儲○得○保○全○
低○徊○不○覺○淚○成○漣○

村上義光墓

奇○巒○崔○嵬○水○潺○淙○
絕○代○豪○遊○址○何○處○

花○落○仍○知○造○化○工○
臨○風○空○憶○古○英○雄○

關屋樓

恨○殺○豺○狼○當○路○橫○
翠○華○一○駐○遂○無○返○

中○興○偉○業○倏○頽○傾○
如○此○山○脈○為○帝○京○

金輪王寺址

落○魄○英○雄○與○美○人○
晚○秋○無○客○尋○遺○迹○

提○携○踏○雪○暫○藏○身○
落○葉○紛○々○感○慨○頻○

吉水院

清○淺○橫○斜○不○用○探○
疎○林○亂○石○花○如○雪○
幽○龍○從○伊○雖○可○掬○
他○年○若○有○仙○緣○熟○

孤○山○勝○概○眼○前○參○
斷○岸○危○橋○水○似○藍○
真○個○清○愁○奈○難○堪○
栖○隱○應○來○結○一○庵○

其十

榴原神宮
滿○苑○壁○砂○白○
殿○閣○極○崇○隆○
天○潢○流○不○盡○

老○松○摩○碧○穹○
德○比○華○嵩○大○
一○派○仰○無○窮○

廟○廊○頗○鉅○麗○
功○原○舜○禹○空○

奉拜明治神宮
明○治○天○皇○德○似○天○
維○新○盛○業○原○無○比○
我○武○茲○揚○駕○歐○米○
崇○祠○正○是○國○之○鎮○

廟○成○輪○奐○自○巍○然○
復○古○鴻○猷○永○可○傳○
其○仁○竟○及○化○臺○鮮○
默○禱○金○甌○千○萬○年○

謁晃廟
山○樹○蒼○鬱○々○
秀○麗○氣○自○因○
門○樓○連○飛○塔○
廟○貌○結○構○真○

澗○水○清○漱○々○
整○道○土○花○滑○
金○碧○輝○穹○晏○
緬○憶○慶○長○昔○

神○靈○之○所○宅○
清○肅○境○絕○塵○
翠○榻○與○丹○楹○
公○威○四○海○振○

悲○歌○一○首○鏃○留○痕○
忠○孝○兩○全○小○楠○子○
萬○櫻○葉○墜○樹○空○殘○
憑○吊○不○禁○悲○憤○淚○

古○寺○門○扉○今○尚○存○
芳○名○萬○古○礪○乾○坤○
松○柏○一○邱○高○石○壇○
秋○風○落○日○御○陵○寒○

如意輪堂
塔尾御陵

春日偶成 二首

天○晴○一○杖○去○尋○梅○
花○氣○氤○氳○香○世○界○

野○外○水○邊○春○色○催○
白○雲○片○々○鎖○樓○臺○

蝶○眠○紅○散○月○朦○朧○
休○道○愁○雲○添○客○恨○

也○恨○無○情○一○夜○風○
人○生○五○十○夢○中○通○

梅 雨
濛○々○細○雨○畫○蕭○然○
只○開○微○風○梅○子○落○

苔○砌○幽○閑○獨○醉○眠○
柴○門○無○客○有○誰○憐○

初夏偶成
千○山○萬○岳○綠○陰○時○
快○霽○今○宵○連○日○雨○

堂○後○堂○前○楊○柳○垂○
一○輪○圓○月○浮○清○池○

午 醉

揮扇書窓入午眠 炎風千里火雲天
 忽然驟雨驅蒸熱 幽夢醒來聽暮蟬
 除 夜
 臘盡星回又一年 今宵餽歲座燈前
 千慮萬感茅堂裡 待且闔家共不眠

心のいたて

白田紀六

なさけには深き心のいたてたに
 癒えてうれしき世の春なれや
 家思ひ山川偲ひ人戀ひて
 ほほゑみ多し夏休近うして
 静かなる夏の夜は早く更け過ぎて
 そゝる戀しき人のおもかけ
 隣なる琴の音色に聞きいりて
 たたわけもなく人なつかしむ
 この涼風この櫻實この室に
 なれどあらはと遠くなかめつ

みつ海のほとりに立ち夕曉の
 雲見つゝをれば君なつかしき
 涼風や夾竹桃によりそへば
 雲ひんかしす思ひもゆかな
 このころは夜な夜な通ふ夢にさへ
 君の聲音の聞えつるかな
 いにしへの神の定めし掟こそ
 今も守りの道にはありけれ
 神路山神の御橋に霜白う
 鶏鳴きつれてほのしらみゆく
 星のかけうすれて千木に霜白う
 代々木の宮居今明けむとす
 神やしる照る日の御子の影さして
 拍手の音も静けかりけり
 君か代の千代に八千代を祈るかな
 曉きよき神の御前に
 初詣とする神の司人
 初鶉鳴きて木ふかき奥の院
 明けや初むるみあかしうするも

葉 柘 榴

五乙八木 法雲

弓張の月影清き窓によれた
 月 ほろりこぼるゝ萩の葉のつゆ
 若竹のしげれる庭にさす月は
 葉毎く／＼にうすかげうつす
 夕月夜遠方にふく笛の音に
 何故となく我胸かなし
 虫の聲
 遺瀟なき聲しほりつゝ秋虫は
 月と共にや夜を過すらむ
 灯
 野路行けば遠き山邊の灯は
 月夜ながらにほのかにぞ見ゆ
 白百合
 露含み星の光をいたゞきて
 ゆかしく咲ける溪の白百合
 一すぢの清き流れに白百合は
 その美しきおもかげうつす

詩 壇

露

夜もすがら啼きあかしたる秋虫の
 涙なるらん萩の葉のつゆ

心の嘯き

四乙樋口亮一

わか艸
 春の野に麗しく咲く花すみれ
 手折りて行かむ袖はぬるとも
 牧童は草かり鎌をなげすてゝ
 調べもひくき草笛のこえ
 しぐれ
 濃染なる蛇の目の傘の中にそゝぐ
 絹絲の如き細き雨かな
 日記かく筆なげすてゝ吐息つく
 春雨のする須磨の宿にて
 秋 風
 君よりの便り遅しとまち佗びて
 出づれば渡る初雁のむれ

青 柳

春風に髪くしけづる青柳の
 はづかし氣なる水鏡かな
 敦賀旅行を追想して
 松原に暮れ行くけむり氣比の浦
 若狭の山に夕ばえのてる

京の里

加茂川の流れも清くてる月に
 行いては還る三條の橋
 かざり火の色淡うして夕榮の
 花にたそがる京の里かな

(一九一九、九—一九二〇、七)

暗室にて

五甲 下村喜一

人氣なき
 眞暗き部屋に
 かすかに照る
 赤き窓硝子

皿に浸せるフィルム
 緩く搖ぎて
 赤く照す光り
 うれしき像ち
 薄黒い
 茫々と浮び出て
 指の靜かに動く
 紅の……光り……
 たざちつと
 フィルムに照るのみ

たのしき選手 (春)

風もなく
 長閑けき春の光りよ
 霞める碧空に
 白き球の飛ぶ
 小鳥囀り
 櫻咲く小蔭に
 美しく勇ましく

悲しき追憶

黄ばみし葉は皆落ちて
 淋しき夕霧こめ渡る
 短かき日の
 日影西に傾く……
 何日なりしや決戦の日
 悲しかりしを
 健闘の日よあゝ
 いつなりし……
 殺氣の沃雲立單めて
 戦ひ遂に止みけるに……
 いと凄絶の我庭に
 残り居りし人ぞ
 何に故なりし……
 刀折れ鼓衰へ
 力は盡きて……
 遂に降りき
 あゝ無念なりし!

純白のユニフォーム輝く
 麗らかな
 春の陽を浴びて……
 スバイクの跡心地よく
 小鳥の如く飛び交ふナイン
 勇ましく
 力注いで打ちし白球
 憂い憂いど
 心地よきバットのひびき
 唸りつゝ
 地を這ふ熱球……
 鮮やかに收めて……
 斜に投げし姿のよき
 たのしき選手ら
 仲よくつどひて
 景色よきグラウンドに
 壯のプレーに耽るよ

嗟……
 悲しかりしよ
 オ、その晴れの庭に……
 遂に降りて泣然と
 泣きしその夕べ……
 美しき
 愛校心の燃ゆるまゝに
 斃るゝまでと諸共に
 戦ひたりしかよ
 城下の健兒六百
 悲壯なる團長の一言
 啜り泣く涙の中に……
 骨に徹し
 耳朶に強く泌みて……
 隣れや
 切なき敗軍の士が胸よ
 堪え切れずてか
 しばし
 無我の境に迷ひし

夏の日も膽を嘗め
 冬の日も
 薪に臥すの思ひをなして
 つとめ磨きし
 此の腕の冴えを
 あゝ天無情……
 その冴えも空しく
 無念の泪を流されて
 消え果てゝけるか
 おゝ敗辱の日！
 凄壯なりし……
 あゝ敗惨の日よ！
 いかで忘れ得るものぞ
 五つの秋の
 深き印象を
 獨り胸に秘めて……
 荒涼の我庭に居り立てば
 哀れ

鐘のひびきの
 グラウンドに這ひて……
 やるせなく
 つきもやらぬ
 無量の悲哀よ
 我が胸深く
 しみじみと泌みにけり。(終)

思ひ 艸

五乙 八木編法 雲

一、千草にすたく虫の聲
 聞きつゝたどる野路の末、
 招く尾花にさそはれて
 来るや七つの草の野邊。
 二、心すみゆく月の空
 訪ひ來し風もかるくして、
 野邊にはさけるどりぐりの
 花のながめのおもしろや。

三、眞秋の花はさゝ川の
 水のほとりに露ふくみ、
 こもれる愁かくしつゝ、
 笑める姿ぞゆかしさよ。
 四、寂しさをさるかるかやの
 袖をふり出す鈴虫は、
 昔を戀ふる聲なるか
 露にもなやむきりぐす。
 五、こき紫に咲きにはふ
 桔梗の花のうるはしき、
 玉なすつゆにぬれそぼち
 誰に身をよす女郎花。
 六、何をかこちてうらみする
 我は愛づるよくすの花、
 静けき虫のやどれるは
 野邊をにははす藤袴。
 七、織り成す錦秋の野の
 七草花をてらせ月、

虫よ花野を知らしめよ
そのくしびなすうたをもて。

○弔敦盛公

一、深山おろしの風あらぶ
海邊の松はさわざして
岸に一基の墓石には
平家一門の花たりし
青葉の笛にたくみなる
敦盛君の御靈あり。

二、時し壽永の初つ方

さしも勢つよかりし
平の家のさだめ今
西にかたむく福原と
都をおちて去るにつけ
源白旗時利あり。

三、壽永三年二月の初

君は粧いさましく
金覆輪のくらおきし
駿馬をさつと海に入れ

唯一言をたまふなり。

七、あとにはつゞく數千騎

今せん方もなくくりに
さらばゆるせどしるし上げ
名乗をあげて示しけり
あとにはそよぐ夕あらし
波もあはれをよせにけり。

八、花の姿の御君は

つれなきあらしと諸共に
去りて苦むす墓の下
うらみと共におはすらん
さはれ雄々しき其のみ名は
萬世までも傳ふべし。

九、景色名高き須磨の浦

濱の波音は御たまを
松ふく風と弔らはん
旅の衣のながめにも
舟こぐあまの歸るにも
手折る花もてなぐさめむ。

(丁)

(一八二〇、一〇、一三)

赤旗きらめく大舟に
乗らんと向ひ給ひしよ。

四、時しもあれやあらはれし

老武者扇取り出して
關東一の剛のもの
熊谷なるぞよき將よ
かへし給ひてためせよと
招き／＼てよせにけり。

五、けなげに君は馬首をかへ

汀によりて組み合て
共に戦ひ給ひけり
老武者力まさりけん
君がみくしを打ちしきて
甲を押して面みれば。

六、我が子に同じ年頃の

花のすがたの御君よ
早く去れよと謀れども
雄々しき君は早く取れ
わが名は人に問ひてよと

秋 の 歌

四丙 高山四郎作

一 秋よ、さびしく暗き秋、

しのびやかに我れをおどつれ、
水の如く我が胸に流れ入る秋、
秋よ、汝のために我れ、
いまだ歌はれざりし歌をうたはん。
いな、つひに歌はれざる歌をうたはん。
これは我が歌なり、秋の子供の我が歌なり。

二

秋はさびしき心のうちに、
さびしき歌を夜すがら歌ふ、
軒をめぐる雨だれの音、
戸におどつる風のさゝやき、
秋はさびしき我が生に、
夜もすがら守唄うたふ、
やさしき母のごとくに、
よりそひて我が搖籃に、

秋はいく度かへり来て、またかへり来て、
世にひとりなるみなし兒を眠りに誘ふ。

三

音もなく落つる秋の木の葉、
音もなくふるふおとろへし蛾の翼、
音もなく出づる我が嘆息、
あゝ、このすべてに、いかにあゝ死はかくれたる！

四

こぼれ落つる秋の木の葉に、
天地の秘密も、
人間の運命も、
我が生の深き意味も、
すべてがこもり、すべてが讀まる。

五

水の如く巷を流れ、
我が上をすぐる秋風、
むかしの夢のきれぐれを、
落葉とともに吹きつくるとき、
さびしくも世をばさまよふ、
我が胸に、いかなる嘆き。

あゝ、つねにあらたなる此の悲みの、
落葉の如く我を追ふとき、また秋風は、
廣き街路の上にして、

はからずも我に吹きたり、

秋風よ、このさびしきものをよりさびしげに、
汝が見たる時暗き都會のさすらひ人は、

死せりとばかり思ひてし人に肩たゝかれて、
色かへし人の如くに――。

(二九二〇年秋)

(終り)

雛 鳥

四丙 松下義夫

圓い小鳥の巢が出来た

十日経たぬに雛鳥が出た

『まあ可愛らしい小鳥だね』

次郎がいへば三郎は

『僕の弟にしてやるの』

(一一)

真白い花の柿の木

下に小鳥がどまつてる

何が怖いかかなしいか

眼は空ばかり見上げてる

若しも私が鳥ならば

そつと拾つて巢に入れて

胸毛のぬくみで温めて

立派に育てゝやらうもの

藻 の 屑

四乙 樋上亮一

――荒屋の秋――

軒もまがきもやれ果てゝ

ながめいぶせき足引きの

片山かげの草の庵

いかなる人の住家かも

峯よりおろす木枯に

木々の梢はふきあれて

訪ふ人もなき庭の面

いつの昔のあとならん

――川邊に立ちて――

紫にはふ花すみれ

黄金どまがふ菜の花や

たんぼぼあまた咲き亂れ

エデンの園どまがふなる

花咲く朝を只一人

美しき野邊をうねくくと

縫ひて流るゝ笹川の

水際に立ち涼げに

(二九一九、七、二五)

水鳥浮きぬみそらゆく
雲もうつりて麗しく
彌生の花に似たりけり
岸の小草におく露の
ルビーの如く輝きて
さゝやく水の音さけば
血氣盛んの青年の
もゆる思を歌ふ如
これぞ希望の響なり

——初 霜——

嗽口の水の齒にしみて
釣瓶に白き霜ばしら
しめやかに又しめやかに
曉衣やゝさむし
裏の菜畑柿ばやし
まがきにたよる白菊や
おかしや籠の中の鳥
あはれホジロもすみけり
父上見ませ母見ませ

(一九一九、五、三)

茶の花壇に昨夜わが
手入れし藁のおほじより
こぼるゝ花の色の香を
飛石小石そのまゝに
今朝は箒をあてざらん
すこしおちたる栗の實は
拾ひてやらん妹に
今朝は日曜さらに又
心にかゝる業もなし
朝餉の前にゆる／＼と
獨りたどらん我が庭を
垣の下道行きめぐり
我が犬呼べば犬も來ぬ
しばし庭に佇めば
いつしか朝日輝きぬ

(一九一九、一〇、一〇)

——夕暮の川岸にて——
銀色に夕日をあびて蜘蛛の糸
疾れきつた土蔵のかべに
紅く薄れ行く夕日の悲しさ

橋渡る足音の遺瀨なご
仕事かへりの男の足に
夕闇の香が忍び寄る
煮物の香漂ふ厨から
薄紫の夜がひろがり
繪をながめる少年の
筒袖にまつわる
岐阜提燈の青きなげかい
涼臺の華かな笑ひ聲
豆を煎るやうな花火の音
川岸走り猫の目は
金色に輝き夜は更けぬ

偶 感

四丙 木下長保

(一) 馬鹿者奴
「君は本當に馬鹿だね」とよく言はれる
僕は何とも思はない
僕に馬鹿と云ふ其の人は

第三者が僕に奴は馬鹿だと云ふ
其の第三者が亦他の者より馬鹿だと云はれてゐる
すると世の中の人は大抵馬鹿だ
主人人々は自分の爲に
他人を馬鹿と云ふのだ
それを知らずに腹をたてると
それが本當の大馬鹿者だ
(二) 弱者
先天的弱者も
後天的弱者も
如何なる弱者にても
愛す、我は、
然し弱者に
弱を楯にする奴がある
ごんな奴は
大嫌だ
(三) 新しい流と、舊い流れ
舊い流は底力強い
底の方の水だ
新しい流は輕つばい

表面の方の水だ
自分は舊い流が好きだ
波立つ物は
表面の水だ
そして理由なく
我をさらはんとする
恐しきことだ

(完)

王 國

四丙 木下長保

俺は一人だ
考へるのも
悲しむのも
悩むのも
何をするにも
俺は一人だ
味方は俺一人だ
敵も俺一人だ
すべての争ひ、呪ひ、悩み、が俺一人の體で

起り、俺一人の體で、調和して居る
俺は俺に向つて感謝し
俺自身を悪む

俺は俺一人の爲に、修養し、努力し、苦悶する

俺は一人だ

たつた一人だ

大なる王國を背におつてゐる

この王國には

論語も、聖書も、神話もいらぬ

宗教も、道徳も、法律も

あらゆる學科も

釋迦も、孔子も、キリストも

トルストヒも、セザリンヌも

全て俺には不必要だ

俺は一人だ

これでたくさん

(完)

秋 ば れ

四丙 木下長保

新葉の、匂も嬉し
秋晴の
空一ぱいに百舌鳥の囀る
さしはさむ、木の間を洩れて
秋の陽の
冷き土に、泌みてゆくかな
來ぬ人を、待ち詫ぶ心
逝く雲を
木の間がくれに、いらだちて見る (完)

秋 の 暮

四丙 松下義夫

秋の半も過ぎて
木々の梢のうら枯れつ
早や日も西の山の端に
沈めば寒さ催しぬ

秋の夕の色淡く
ねぐらに急ぐ鳥鳴き
やがて暮色はおそひ來て
古城山のいたゞきに
弓張月の上る時
清く聞ゆる笛の音に
庭の紅葉のハラ／＼と
散るを見るこそ淋しけれ (終り)

嗚呼 尼 港

三甲 藤田正雄

嗚呼ニコリスクニコリスク、
聞くも恐ろしき虐殺に
吹く風寒くなまぐさし
流るゝ河に血潮あり
屍はつんで山をなし、
手は切り取られ足も無き。
斯くも無慘にバルチザン
あゝバルチザン、鬼なるか。

丈夫如何に思ひしか、
一死固より軍人の
本分なれど、あゝ無念
虎狼の毒手にたはるとは。

嗚呼「五月二十四日の
午前十二時忘るな」と
悲痛の一語、嗚呼然り
古今未曾有の國辱ぞ。

あゝ憎きバルチザンよ
よくも同胞我國民を
七百餘名も殺せしな
如何ではらさん、國辱を。

あゝ現代の青年よ、
この憤をば忘るゝな
國辱雪ぐ責任は
汝が雙の肩にあり。

雜 吟

白 田 紀 六

淡雪の消え残る山夢に立つ

大江に影をひたして 雁渡る
日は落ちて雁が音遠し 荒野原
新月うすう湖をすぢかひに雁の棹
宿いそぐ巡禮の笠に雁落つる
芋の葉に蠅よわり居て戦ぎけり
芋の出来背戸の馬屋は日もささず
山家十戸いよ／＼せまし芋の山
高原のはてにやせたり冬の山
荒煙絶えて水白う四圍の山眠る
根分けして水仙の出来を隣かな
藏並ぶ 陰に小さき 水仙花
蟄居して 水仙の花 白う咲く
猪追へる一隊の獵師山荒るる
虎狩の日暮れて遠く高吼ゆる
大猪を射し公達のほがひかな
里戸毎餅搗く日とはなりにけり
餅搗や隣は客齋の 庄屋にて
餅搗の音ねてきくや 老措大
寒月天心人なき街を通りけり
寒月や わが影長し 橋の上

吾が泣かんにあまりに明し春の月
春雨と 昔語りや 夢さめて
春雨や飲泣く音のわれに似て
春さびし母なき稚兒の頬に涙
萬歳や雪晴るる夕をむつましく
萬歳を泊めて一村の集ひかな
萬歳や 大紋に夕日 赫とさす
萬歳が交々門松をめでたやな
萬歳を 病む兒に母の 涙かな
天地静か星かげうけり 井華水
紫の 空汲み入れぬ 井華水
若水を 汲む手に拜む 初日哉
行く秋や 力なき蠅縁に這ふ
時の鏡 木の間流るや 暮の秋
银杏散る山寺さびて秋暮るる
秋行衛雲ちぎれ飛ぶ 廣野かな
淺間にかかる雲秋雨となりてけり
秋雨や 板扉に乞丐もの食へり
秋雨や 千年の古寺 暮の鐘
諫忌宿老閉ちたる門や秋の雨

乞丐をも 忙しき數や 師走暮
行商の 主人迎ふる 師走哉
山の宿 人立騒ぐ 吹雪かな
吹雪して 山家二十戸 隣なき
渡し守の 脊に拳に 吹雪かな
霜白う代々木の宮居明かむとす
杉木立千木古りて今ほの明くる
千年の神杉やほの明け初むる
千木白う霜に明けゆく宮居かな
明けきらぬ霞を新聞賣子かな
霞みゆく 夫の妻よふ 堤かな
來光をのせて下界の 霞かな
霞む灯を狂ふ身やさきの 郷秀才
春の海 大河を容れて 遠濁る
春の海 白帆動かす 松並ぶ
煙高う船去りしあどや春の海
春の海 渚は白き 砂つゞき
廓船 河岸の灯ゆりて 春寒し
宿直して餘寒身にしむ 舍人哉
餘寒訪ふ郷里の老母より 眞綿かな

出代りのお鍋に逃ぐる末子かな
 出代の厨どとのへるまことかな
 出代の 松やの妹 お竹かな
 故郷出で、十有餘年 雁歸る
 雁かへる去年ぞ今宵よ亡妻詠みし
 細雨しとど花なき里に歸る雁
 書に倦みて黙す椿の落つる音
 椿散る 里を小町の 狂ひけり
 椿咲く 山路に會ひぬ 白叟翁
 演習の 憩ひ見出でぬ 落の臺
 崖下にのびほけたり 落の臺
 妻と句を詠めば 富貴や落の臺
 豆撒きの 聲病床に聞く身かな
 豆拾ふ 家の廣さや 鬼やらひ
 豆撒いて 鬼等年かこつ笑かな
 初追儼 小きき夫の 聲笑ひけり
 逃ぐる 舍人局にまごふとよみ哉

白 集

五甲 北村 由藏

泣かの蟬捕へて暫し無言かな
 白蓮に 寂しき寺の 眞晝哉

秋

名月の池にうつらう雲も無き
 秋の雨 檻に虎寝る 朝かな
 月の夜に誰を呼ぶやらさきりくす
 燈一つ見あてたりけり虫の山
 蟪蛄や 蕈を戻りし 紹の羽織
 酒倉の つめたき壁やちゝる虫
 熟し柿の 一つ残りし 隣かな
 先生の 家に柿おくる 田舎哉
 びつたりと土に動かす 桐落葉
 秋の風 肩すばみたる 男なり

冬

遠火事を 望む人あり 瓦屋根
 兎狩り山をあらして 歸りけり
 物けする 大工の庭の 吹雪哉
 鳩百羽 羽音に朝の 冴え迫る
 深井戸に 滴の音や 冴え迫る
 寒月やキラリと光る 路傍の痰

春

梅が香や 朝蜘蛛下りし 青疊
 木材に残んの雪の附いて來し
 春寒や 男ばかりの 一家族
 春寒や 口笛を吹く 脊むしの子
 山の端の 一村霞む 朝かな
 春霞 水車の鶏の 鳴きにけり
 朧月 屋根つたふ猫の せな丸し
 燈籠やおぼろ 灯ぬるる 赤鳥居
 墨ぞめの 袖に一片 櫻 哉
 落し差し 網笠に 花吹雪哉

夏

はたかれて 水に落ちたる 螢哉
 水吹けば 杉葉に 生きる 螢哉
 大夕立 松の刈り葉を 流しけり
 釣鐘に 鳩の糞ある 夏日哉
 日盛りや 梅干の香の 村に入る
 離れ泳いで 湖邊の 松を 顧みし
 うつかりと 團扇落すや 橋の上
 蟬逃して だんだら 蜘蛛の 怒り哉

小簞笥に 音の氣配や 冬の夜
 空席を 數ふ 教室の 寒さ哉
 親子二人 男ばかりの 寒さ哉
 影の身も 冬は 日向を 歩みけり

案山子

五甲 北川 佐一郎

蓑笠に 身をやつしたる 案山子かな
 月
 老松や 樓門さむし 秋の月
 山寺の 鐘の音さびし 秋の月
 春月や 梅が香高し 雪の庭
 雪

犬ころの よろこびころ ぶ今朝の雪
 雪たるま 並べて 立てり 雪あかり
 社頭の 曉
 玉垣の色さびに けり 初日の出
 正月
 初荷引く 車の音も 新たり

十七字集

樋上亮一

新年

柴の戸に白梅かほる日向かな
今年こそ日記附けん松の内
猿曳の倒して行けりかごの松
松の内早や過ぎ去りて餅の黴

時雨

雨やみてみどりの中の花柘榴
時雨して小田の蛙の闇夜かな

春風

新調の服かほるかな春のかせ
傷敷や爪あぐ子等のふみし麥
春風や散る花かぞふ僧ひとり

初夏

田舎道俄にせまし茶つみごき
山影を羽にあしろう蜻蛉かな
戸口まで夏は來にけり金魚賣
磯にて

貝拾ふ乙女やいその千鳥なく
家いづこ親はいづこに鳴千鳥
潮しすく真砂にかほるいそ嵐

夏

夕立に奈良の土産を濡しけり
えざらつく鶏もあり日長かな
みね遠し日暮しのなく杉木立

秋

夕暮れのもや淡うして月見草
何をまつ様子や案山子の夕姿
夕風やまねく尾花に出でし月
片われの月かげ清し渡るかり

寒立

湯歸りに買ふ人や除夜の鐘
寒空も襦袢一つの案山子かな

苦學生

月あかりまごに米どぐ苦學生
苦學生ズボンをつぐる秋の風
霜あさにわたらの主や苦學生

(終)

雑景



部報

學藝大會之記

十一月二十二日、大正九年度第二回學藝大會は開かれぬ。午前中二時間授業の豫定を一時間削つて午前九時半より行はるゝ事となれり。以て今回は稍出演者の多かりしを知る可しと雖も、吾人は此の學藝部の益々盛大となり、多々益々可なりと雖も、少くとも一日位は此の爲に費すを惜まざる状態に到らんことを切望する者なり。

開會之辭。急霰の如き拍手と共に登壇せられし藤下先生、野次は之れ野の次なり。野の次は山或は海なり。其の勢巍然として大空に交はり、威嚴

雜景

牢乎動かす可らず。或は洋々横として際涯なく、深且寛、時有つて大いに起ち又静寂其の處す可きを知る。之れ野次の本領なりと。吾人野次の以て銘すべき言ならずや。

一、日 章 旗 二丙 野 瀬 光 三

二、ワシントン(英語) 二甲 秋 山 英 三

三、聖ソクラテスの臨終 五丙 速 水 佐 一 郎

大偉人ソクラテスの生涯をして吾人の眼前に髣髴たらしめぬ。悠然服毒の末期誰か痛惜せざらむ。人生の薄幸を説き青年の覺悟に及ぶ。蓋し凡手に非ず。

四、孝 行 三甲 須 藤 徳 成

稍口調に變な癖がある爲折角人倫の大本を笑聲に迎へられたるは遺憾なり。君の眞摯と沈着の態度に見込あり。唯其の語調に注意せば可ならん。

五、星 の 子 四甲 西 村 和 一

星の子星太郎が一旦下界に降り種々の鍛錬を経て上天し星界の王となるてふ一場のお伽話

六、大風が吹けば桶屋が繁昌する

五丙 辻 忠三郎

奇を以て論じ、論じて奇、論じ了つて平凡野次

演説と化す。蓋し後半其の過激に失せしに依る

七、英語 獨唱

五甲 赤井 幸造

前曲、流麗の一言に表はる。せゝらぎの水音が

落葉を舞はす秋風の聲か。轉々樂天の間に翻揚

するの思ひあり。後曲山上峨々の斷壁より白壁

を轉ばしむるを思ふ。

突！はぬ。かつ！碎く。さらさら真砂の間を下

る。下は何ぞ、吹雪吐く溪流なりき。

八、祖 先 崇 敬

四乙 川 瀬 矩三

辯士の態度慊らす。野次の反感を買ふや甚し。

場内喧騒。

九、趣味に就て

四乙 新井 泰美

聲よくとほり、内容可成豊富なりき。

一〇、楠 露 (謠曲)

四乙 茂森 徳二郎

群新歌中の一古曲、萬綠草中紅一點と云はむか

吾人國粹を尊ぶ。君に謝する所以なり。

二、ステブンソン (英語)

二乙 鈴木 周二

發音もよく、よく解りしも稍聲が小さく満場に

今少し反應説明の工夫を要す。

一七、戦亂前の獨逸

五丙 野口 富藏

歐洲大戰突發の経路、獨帝カイゼルの計畫、一

代の跳梁兒が野心を評論して遺憾なし。比較的

長時間よく傾聴せしめたる、以て君の辯の力を

証するに足らん。

一八、川の上 (英語)

二甲 小川 孝一

放縱より入つて絶大真理に結ぶ。恰も徒然草に

於ける兼好の論法其の儘の感あり。無常の襲來

水火よりも急なりと説き須く肉體を超越せよと

滔々懸河の辯を振ふ。正しく一大傳道師の卵。

二〇、彦根第一中學校

五丙 大庭 唯一

校風の癡退を論じて慷慨涕泣、言や實に赤誠の

權化。氣堂を壓し肅として聲なし。熱魂人に迫

る。偉大なる人格の人よ。余は敢て此の語を呈

せんとす。それ墮眠墮落の輩につぐるに君の言

を假らん。醒めよ、墮弱の眠りより。いざ醒め

よ井底の眠より。榮ある我彦根第一中學校の名

聲を奈何。悔悟の日近きに有らん。

徹底せざりしかと遺憾に思ふ。

二、公 德

二甲 望田 金二郎

君の意氣を愛す。萬事此の元氣あれ。自重せよ。

三、幼稚なお伽噺

三甲 藤田 正雄

鼻の天に達して失敗せるを話し。有頂天なる可

らすとなす。其の引用やよし。

1E. Come where the white eies are grouins.

Nearer my Bos to dhee.

五乙 掛 札 弘

オルガンの美音と君が豊富なる、朗然の音聲と

は遂に吾人の聴覺をチャームせずには置かざり

き。唯満場寂として恍惚陶然たり。忽ち堂を撼

す雷の如き拍手。曲終る。蓋し室に入れるもの

と云ふべし。

一五、朝 三 暮 四

四甲 不破 善次

朝三暮四猿の愚に非ずして其の賢なりとす。猿

は時間を知れりと、之を汁飯に説き、加速度に

説き、勉強に説く。稍長廣舌の觀はありしも論

旨よく一貫せり。

一六、化學反應實驗

五甲 東野 太一郎

三、生の行進曲

五乙 波木 居齊二

三、氣 狂

五甲 東野 太一郎

例によつて君が數行の大呼、あゝ氣狂よ、氣狂

よ、汝は氣狂なるぞと。高山彦九郎橋上の拜跪

自ら彼の氣骨稜々たるに比するか。快男兒の面

目題し得て躍如たり。

三、搔 痕

五甲 三 和一夫

氷河の山より下るや尙搔痕を印す、況んや吾人

の將に死せんとする必ず後に印するべしとな

す。君が熱誠吾人に感せしむるや大なり。願て

我が卑小を思ふ。轉々忘我の境に入らしむ。

二四、獨 唱

Oes Folks at home.

Womans heart.

四甲 西村 和一

二五、シーザーの死

前辭 第一場 豫言者

第二場 議事堂の中

第三場 ブルータスの棺前演説

役割 ジュリヤヌシーザー 波木居齊二
アントニー 齊藤 和雄

ブルータス 掛札 弘
 カシヤス 大庭 唯市
 アーテミドラス 藤田 義藏
 メテラス 上田 猪之助
 従者 速水 佐一郎
 群衆 不破 外數十名

練習不足の憾は有りしもシーザーの死の場等殊によく行きブルータスの棺前演説も上等の出来なりき。

二天、愛の行方(悲歌劇)

第一場 職工の家
 第二場 工場
 第三場 野原

役割 少年職工 野瀬 光三
 職工の父 西村 和一
 職工の重役 川瀬 規矩三
 職工 青木 義雄
 旅人 生浦 晃淨
 車夫 宮尾 源次郎
 女 神 西村 和一

日早朝西京に向ひぬ。吁!!金龜城下の熱血見!!戦雲晴々たる京洛の旭日輝き出す我選手戦捷を祈りつ、強敵を呑みて武徳殿に向ひぬ。

開會式、型等型の如く進みて青春の勃情に燃ゆる青年の鐵腕奮ふ快闘今や開かれぬ。我選手の勝負左の如し。

香川大川中學 谷口 榮五郎
 ○○本 校 辻 正 康
 ○○本 校 藤 井 健
 ○○熊本 農學 藤 井 栖 暉
 ×本 校 辻 正 康
 岡山閑谷中學 辻 正 康
 ○香川大川中學 大 山 一 元
 ○○本 校 幸 島 道 介
 ○○大阪 高商 岩 井 佐 太 郎
 本 校 漢 見 良 英

武徳會出演記(柔道部)

赫々たる炎帝の下に骨も砕けよとばかり投げつ投げられつ血を流し涙を流しての練習に練習。必勝せんとよりは何んの雜念もなし。見ぬ武徳殿を

可成の出来、其の努力を多とす。

二七、兒島高德(唱歌)

一年有志

何か故障の爲お流れとなりぬ。當日唯一の遺憾事なり。

閉會之辭。藤下先生急用あり、野口君代辯さる。時既に薄暮なりき。要するに今回は内容も比較的充實し盛大なりき。たゞ最後の演劇は新しい試みにして且面白しと雖も、其の準備に多大の時間を取り其の間場内喧騒を極めて時間の損失と、講堂の静寂を破壊するとの傾向ありし事は今後此の種の出演につき大いに考ふべき問題たらざるや否や妄評多謝、多謝。

青年演武大會出演之記(劍道部)

八月五六兩日に涉り武徳殿に於て開かるる青年演武大會に出演せんとて三伏の嚴暑に屈撓せず鐵腕を鍛えに鍛えし幸嶋道介、漢見良英、辻正康、藤井健の四選手必勝を夢見つ、氣焰萬丈白虹を吐きて技を練り各々妙技を繪舞臺に發揮せんものと四思ひては兩手を擡げてつたつ先生に全力を擧げて武者振つく。力の盡き果てた體を家に運びし事も幾日ぞ。思へば大正九年八月の六日隆々たる双腕を撫し互に握りしめては士氣を鼓舞し合ひ東天白む六時廿分校友に送られて出發しぬ。胸は高なる腕はなる。甲冑に身を固むる劍道選手我等が入京に顔を輝かす。豪語數談嗚呼銳意は勃々意氣軒昂。明くれば七日武徳會第廿一回青年演武柔道大會當日なり。一行午前七時神に武運を祈りつ、宿舎を出ず。數千の選手眼を光らして控ふ、武徳殿の物凄さ。試合は山梨農業神戸一中の争に初まる數を重ねて四十三回。

×(上宮中學) 中山 佐武郎
 ×(本 校) 小 河 原 脩三

敵は偉大の大男なり小河原敵の胸ぐらを取りて少しもゆるめず「エイヤエイヤ」ともみ合ふばかり遂に雌雄を決する能はずして引分けとなる。

×(德島富岡中學) 岡 本 寅 夫
 ×(本 校) 東 野 太 一 郎

敵屠らんとあせれど東野一步も動かす。東野大呼一聲敵を襲ひしかど敵もさる者死力を盡して防

戦す遂に引分けとなる。

×(香川工藝) 本校 渡邊 弘行 平川 昌利

本校平川缺席の爲め小河原之に代る、敵は天晴なる武者小河原敵に傷を負はず能はず引分けとなる。

〇〇三豊中學 本校 岡見 正秋 白川 甚六

兩雄襟をとるや睨み合ふ事暫し、岡見隙を得て襲ひしも敵の逆手に合ひ敵に一傷をも負はず能はずして倒る。

×(神戸精武) 本校 井上 嘉一 大谷 英一

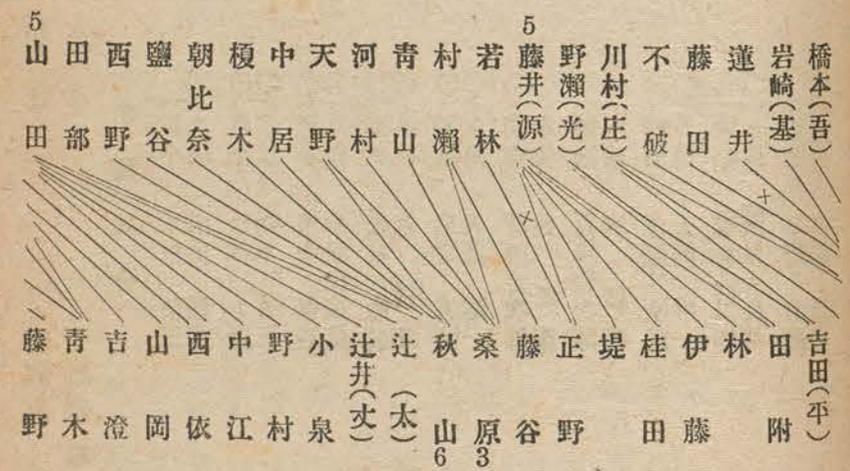
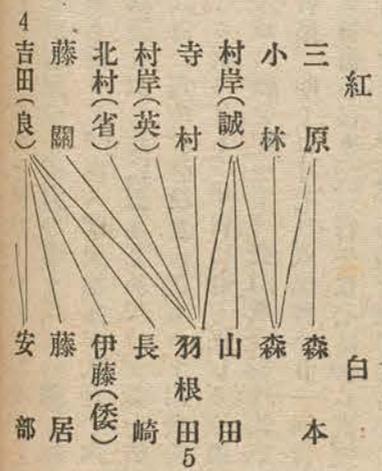
大谷得意のはね腰を以て奮闘す敵危く見ゆる事度々なりしが敵の死力の防戦により引分けとなる。

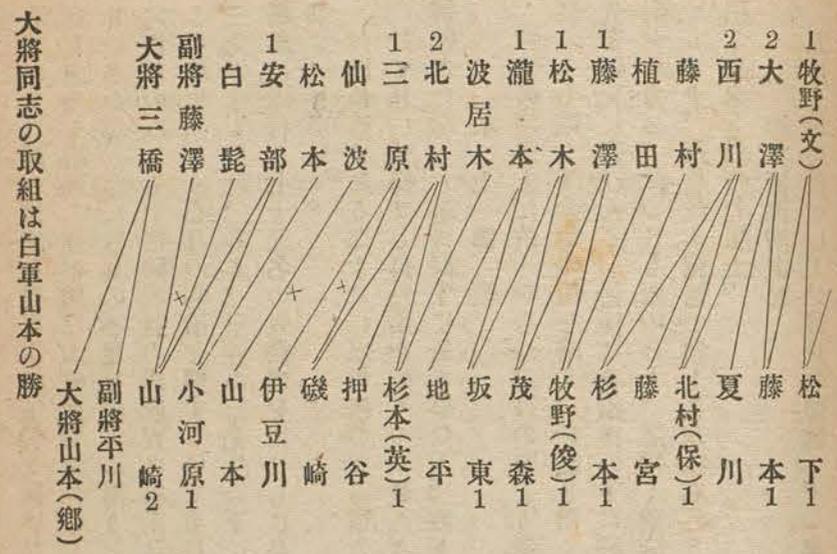
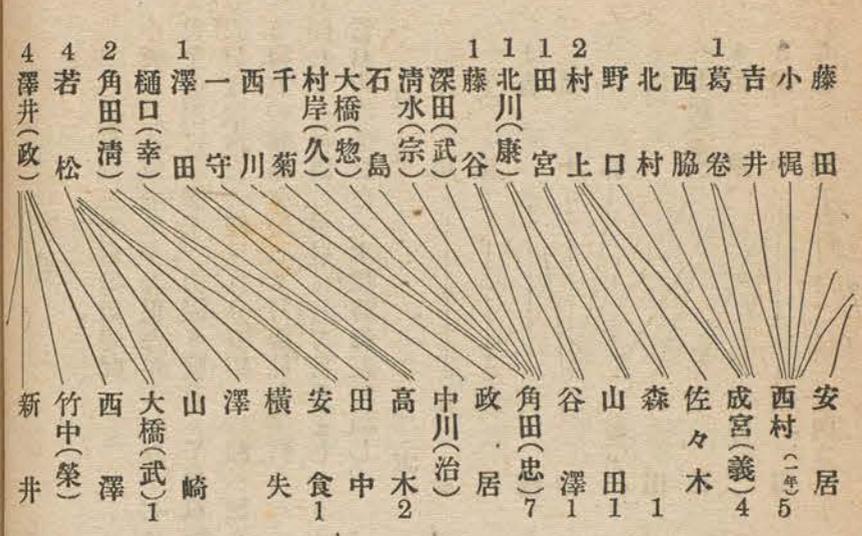
遂に武徳會青年演武大會も此に終を告ぐ必勝を裏切りしを残念がり九日午後九時卅分彦根に歸着せり。(MO生)



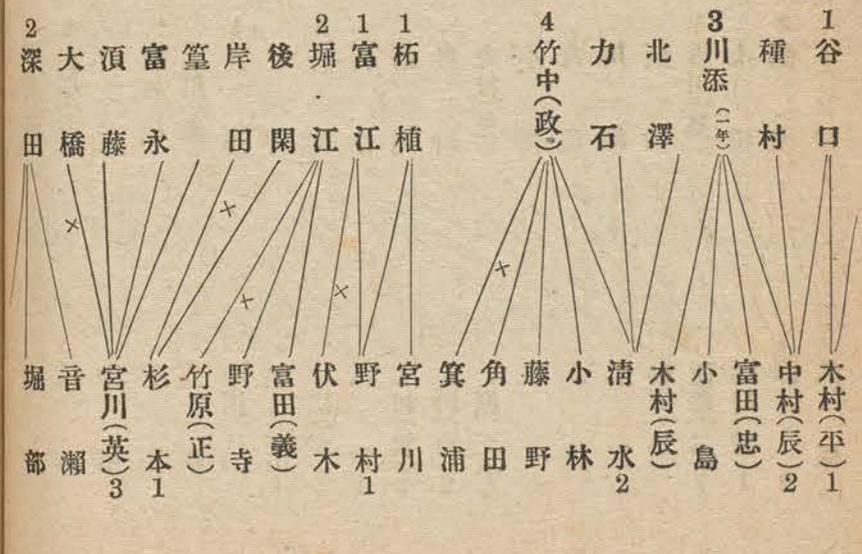
行幸紀念武術大會之記

武術部にては過ぐる年湖東の原野に大演習を行はせられし際長くも大本營行在所を本校に置かせられし當時を紀念せん爲十一月十三日行幸紀念式を行ひ道場に於て紀念演武大會を開催せり、朱鞘の大刀小脇にぶつこみ馳せつくる面々は鐵血溢るゝ金龜城下の赤鬼共一騎當千の荒武者なり。拔山蓋世の勇を揮ひ龍攘虎擊、劍電白雨、凄愴の氣滿ちて暫しさしもの道場も搖がんに許りなりき。因に當日の勝負(紅白)左の如し。





大將同志の取組は白軍山本の勝



更に當日午後行はれし對外試合の成績左の如し

東小 ×青木信太郎	東小 ○淺野清
西小 ×長谷川鋭吉	西小 △長谷川鋭吉
東小 ○北村兼次郎	東小 ○小林作太郎
西小 ○西村榮次郎	東小 ○塚本正五郎
東小 ○辻 孫四郎	岐中 ○伊藤正一
本校 ○森 保三	本校 ○山崎愛三

武道寒稽古記

理 事 記

大正十年一月十日より二十日迄十日間互寒は恰も身に切り迫る時我が道場は寒稽古のため湧き返へされた。毎朝帆布の五時の汽笛が寒夜の寂寞を破つて報じる時早や床を蹴つて身支度した道場に詰めかけ淋しい待ち顔の電燈を慰めた。高鳴りする腕、温い而も高潔な血潮がたぎるにたぎる胸を寒氣凜烈なる道場に十分發揮する快事でもあつたさて火蓋の切らるゝや奮戦酣戦の後東天を仰ぐ時

我等は言ひ難い快感を覺え六時半引き揚げた本年は有志者も増加し近年稀なる盛大で柔剣合して百廿餘名を算し遂に道具の不足を來すに至りしは我武術部のみならず帝國武道の爲慶賀に堪えない。この擧や固より心身の陶冶を期するのであれば擔任先生なる眞野、本多、室谷の三先生の下に最も嚴肅に遂行し七十三名の皆勤者を出せしは是亦特筆すべき事なり。

尙ほ最終日たる二十日には皆擧つて寄宿舎食堂に於て互に獲得せし自慢話を語りつゝせんざいの御馳走に移りし事は記すに足る事なり。終り。

水上部報 (一)

伊吹の残雪まだ消へやらぬ四月の頃より新艇比良にうち乗りて去歲の恨を晴し、新艇を贈られし先輩諸兄に報ひんと、池田部長指揮の下に漕法の研究に力め、風の日も雨の日も、逆捲く怒濤を物ともせず、荒れ狂ふ琵琶の湖上を左往右往と漕ぎ廻る我水上部の七勇士。

堺ヶ濱出漕之記

五月上旬突如として、神戸新聞社より「來る三

十日の第九回關西聯合短艇競漕大會に参加されし」と、我部は直に快諾の報を送れり、此報に接するや我等の元氣百倍しぬ。

我等の先輩に、第二回の本大會に於て全國の荒武者連を、かたつばしからなきたふし、關西の羈王彦根中學の名を全國に轟かしたるなり、以來本年まで出漕せざりしを再び其の名を示さんとす、若し引けを取ることあれば何とする、我等が責任や實に大なり。

これより水鳥と居を同じくし、猛練習を開始しぬ、日も近づけば朝は六時より大洞内湖にオールの響高く、午後は太陽の西山に沈むまで荒浪の間に舵手の叱咤の聲を聞きたり、五月二十九日愈々遠征の日は來りぬ、放課後我等は熱誠なる應援團諸君の萬歳の聲に送られて神戸の戦地へと向ひぬ後に控へる大責任を思はぬにはあらね共膽力すわれる我戦士彼方此方の車窓に寄りて高野古の豪傑にも似てあな頼母しや。京都も過ぎいつしか大阪も過ぎ神戸驛に着きしは午後四時頃なりき、有難くも先輩諸兄の出迎へにて宿に案内され暫く休息

後明日の用艇神戸高商のボートを借受けて練習すボートの型の異ると操法上海と湖とは種々なる點に於て異るとにより海に經驗なき我等は多大の不自由を感じたれど苦心練習約一時間の後には漸く自信生ず、此の夜は一室に頭を並べ作戦計畫に餘念なし、湊川神社に參拜後一同寢につく。

明くれば三十日、早朝より電車にて堺ヶ濱會場さして押しよせたり、白砂青松の海岸は人を以て埋め沖には應援ランチの列を見る、手に手に應援旗を振り赤よ青よと叫ぶ聲、競漕艇に合圖する汽笛の音は波靜かなる瀬戸内海にひびき渡る。

第七回(八百米)コース 着順

彦根 中學	一	一
御影 師範	二	二

敵は名にしをふ御影師範我に取りては年來の怨敵なり、彼の積みし練習の猛烈をかたる其の體格顔色も何ぞ恐れん、いざござんなれ先輩のかたき取つて呉れんと劉曉たる奏樂に送られつゝランチに曳かれてスタートに着きぬ、旗幟は岸に翻り應援實に盛なり、方向を定むるや號砲一發、ソラ漕げ

の聲と共に艇は白沫を蹴つて飛び出しぬ、御影ピツチ早く、スタートに於て我に先んずる事半艇身我に自信あり悠々迫らす三百米に至るや敵のオール稍亂る、機を見たる舵手ミッドルヘビーす絶叫すれば漕手日頃練りし鐵腕折れよとばかり力漕しぬ、見る見る内に二艇身を先んじ五百に至るやラストヘビー、急にピツチを上げて決勝線に入る、其の差約五艇身なりき、赤の煙火は高く上空に舞ひ喝采は四方に起る、休憩所に入りて二回戦の至るを待てり。

第二回戦(八百米)コース 着順

彦根 中學校	一	一
川崎商船學校	二	三
神戸商業學校	三	二

午後一時半第二回戦は開始されたり、彼等兩敵の意氣亦賞すべきものありと雖も到底我彦中の敵にあらずミッドルに至らずして艇速落ち無慘や七艇身の差にて勝は我手に歸しぬ。

優勝戦(千百米)コース	着順
大阪高工	一 三

八幡商業 二 一
彦根中學 三 二

浪稍荒くなりぬ、此一戦こそ實に關ヶ原、浪にもまれ、風に曝されあらゆる辛苦を嘗めて鍛へたる此赤鬼の鐵腕いざ試みん、兩敵共に體格に於ては我に勝り殊に高工は二十五六の髯武者連近年本大會の月桂冠は此奴獨專する所と聞く、八商も其腕中々侮りがたし。然れ共我には彦中魂あり何を彼等に覇を唱へしむべき、三艇はスタートに着きしが浪の爲方向定むるに困難なりき。

あゝ其の瞬間！白煙一發天高く沖せり、三艇は矢を射る如く飛ひ出しぬ、ラストに自信ある我は一本一本オールを合せ高工を敵として進みしに何ぞ計らん四百米に於て八商我に先んずる事一艇身半何を小癩な、いざ今ぞ！ミッドルへビーの聲と諸共に、調子一新忽ち肉薄其の差半艇身となりたれば敵もさるもの、我一漕せば彼も一漕、我ココ十本を叫べば彼の舵手も奮勵叱咤漕手をはげまし實に蛟龍の玉を争ふに似たり、此處に於て我はラストへビーを絶叫し、ピッチを急調に上げて猛進

五月二日端艇競漕大會記

因みに曰く例年のボートレースたる一日は幸ひに夜止み碧空出でたれど準備不行届且練習中舵器を損じ未だ修繕中なりしかば不得止翌日に延期せり

五月二日此の日や天氣晴朗にしてボートレースのあつらへ日和なれば朝より大洞へ指して觀客つめかけ非常なる盛會なりき大洞の會場には我水上部の歴史を飾る二竿の優勝旗飄り突兀たる金龜城は幾百年の目を開いて我等のモーションを觀めてゐる我等は此優勝旗を見る毎に我水上部の昔時の隆盛を思ひ益々彦中のボートを天下に轟かすべきであるかくては九時に至り準備全く終り開會せらる。

番外選手獨漕

舵手 整調 五番 四番 三番 二番 一番
富田 三橋 林 三原 伊夫岐 池田 成宮
五分四六秒

選手たるや毎日或はバツク臺に或はボート猛練習に勉めし賜物本日劈頭にかゝるよきタイムを示せ

し、得意の秘漕數本今に彼を抜かんとするその刹那なりき一發の號砲は審判艇上に響きたり、嗚呼我は敗者か、力彼に劣りしか？練習の不足なりしか？我に幸運なし、高工を數艇身後に見、暫か寸尺の差にて八商の爲に憤死しぬ、その歴史を飾るべく自信に自信を持ちて向ひたる此の神戸遠征も空しく失敗裡に終へたるなり。先輩諸君より身に餘る優遇を受け神戸發七時の列車にて恨を吞みて歸彦せり。諸君我等不肖にして汚名を受けたり、先輩の名譽をきづつたり、諸君の期待に反きたり、然し諸君我等は此一戦に全力を盡せしも運我に降らざりしを諒せられよ。

出漕者氏名

舵手 富田 延壽
整調 三橋 勝彦
五番 林 茂雄
四番 伊夫岐直三
三番 三原寅三郎
二番 池田 暢夫
艇 成宮 秀夫

り尙選手諸君の自重を望む。

第一回普通レース

赤 藤田組 第一着 六分 廿秒
青 横關組

白 上田組 第二着 六分廿三秒_下

號砲漸く響くや三艇第一の榮を握らんとして一齊にスタートを切る初め青撓二本を損し途中にて又損して終に棄權す決勝點に近づくや白赤の伯仲戦となる。

第二回普通レース

赤 鷺塚組 第二着 六分十九秒 三コース
青 漢見組 第一着 六分 三秒 二コース
白 吉村組 一コース

ミッドルにて青最も優勢廻航も綺麗にして見事飛抜けて六分三秒のレコードを作る青や技倆勝りたりしならん。

第三回普通レース

赤 伊夫岐組 第一着 六分十六秒 三コース
青 天方組 二コース
白 岡本組 第二着 六分十九秒 一コース

第四回對部レース

赤 野球部 三コース
 青 庭部 第一着 六分 一コース
 白 武術部 第二着 六分二秒 二コース
 さあラケットかバットかシナとかざれが強い力試
 めしの試合此時各部共應援の聲喧し赤の野球部ボ
 カンとして居残る青オールも揃ひ技倆勝れ本日中
 選手にかけては最良のタイムなりラストも又見事赤
 白は嗚呼終にラケットに叩き潰されぬ何ういふわ
 けか毎年庭球の勝にきまつてゐる。

第五回

赤 池田組 第一着 六分卅秒 一コース
 青 辻組 第二着 六分卅二秒 二コース
 白 鳥居組 三コース

青赤の伯仲の戦なりき

第六回職員レース 直航

赤 川島先生組 第一着 三分四三秒
 青 寺島先生組 第二着

毎年職員のリースは興味を以て迎へらる先生方も中々優勢で青赤殆んど甲乙なし敗けた川島先生僕

赤 岩根組 第二着 六分十五秒 二コース
 青 山崎組 一コース

白 藤田組 第一着 六分一〇秒 三コース

藤田組始めは負けたれど名譽なる特選で勝利を得て大祝。

第十一回 名譽レース

赤 漢見組 第一着 六分五秒 三コース
 青 福永組 一コース

白 成宮組 第二着 六分二〇秒 二コース

本日中の最大の名譽は誰れが手に落つるぞ皆鉢巻しめて奮戦す赤六艇身の差にて大勝し月桂冠を握る。

第十二回 來賓 直航

赤 東林組 二コース
 青 寺島組 第一着 三分三一秒 一コース

來賓レースのメンバー(來賓少なき故來賓と職員とに分けてなせり)

來賓組(青) 寺島 藤田 満島 藤谷 中村
 中川 藤下
 職員組(赤) 東林 池田 本多 室谷 森下

は確かに勝つたと思つてゐたと云つて居られた。

第七回

赤 福永組 第一着 六分一〇秒 二コース
 青 岩根組 第二着 六分一二秒 一コース
 白 三橋組 三コース

三艇共に猛者連孰れが勝つともわからず愉快極まるラストに至り審判官をして煩はしむ青二秒の差にて勝をゆづれりとは云へ其努力賞するに餘りあり。

第八回

赤 松本組 第二着 七分一一秒²/₅
 青 治部組
 白 棕田組 第一着 七分六秒

七分はあまりのタイムなり白赤共猛者連なるに、多分六分の誤ならん時正に午天太陽赫々として輝き渡り見物人は益々雲集す。

第九回

赤 成宮組 第一着 六分五秒 一コース
 白 山崎組 第二着 六分十八秒 二コース

第十回 特選レース

松永 眞野

本日大會中最大の見物且つ無敵團とも名づくべき奉公團と我選手との試合なり我等は感極つて必ず敵を挫かん事を祈る暫くして奉公團の練習あり武徳會の優者だけに悠々たる中にも垢抜したる所あり約二時間待ちし後彼れは何の不平ありてか突然歸れり。池田先生に直航にしてくれと頼みし故コースを延ばしに行かれた其間にせぬと言ふ我選手は試合の爲向ふ迄漕ぎ出せり。實に無禮千萬嗚呼我等は此二時間は何の見る物も無く只退屈して呆然たるのみ見物人もぼつ／＼歸る日頃此強者と雌雄を争はんとして熱烈なる練習をなし我等も傍觀して感動に値ひせり。愈試合に裏切られし選手諸君無念なりけん嗚呼一體奉公團は何故に遠路態來て歸つたのであらう。

第十三回 年級レース

五年 大庭組 第一着 五分五五秒 二コース
 四年 堀口組 第二着 一コース
 三年 力石組 三コース

各年級を代表せる選手此時年級の應援の聲四方に

起る年級順となる時に四時半校長の訓辭ありて解散せり。(UO生記)

メ モ リ ー

端艇部 後 援 團

時是大正九年六月我校應援團の組織なるや野球部後援團は炎々下に其の活躍を開始し、水上部には選手の猛練と共に我等は校友の誠意を繼ぎて之を後援すべく立てり。是よりは鏡の如き琵琶の湖上には常に三艇の赤旗を摩すを見たり。長會根埠頭より千二百米のコースを日々浪を蹴つて幕進しぬ。炎熱直下白砂焦ぐるの日も暗雲ひく、巨浪岩頭を咬むの日も斯くて汗と血を絞るを忘れざりき。時には竹生島に南無妙法蓮華經を訪ひ怨敵復讐の誓を爲し或は長濱に遠漕艦砲のマニーに窮し、斯くして八月四日は次第に近づきぬ。選手の腕は月と共に牙へ色いよ／＼黒し、實に「彦中健兒はお濱で育つ色は眞黒けで目はキヨロリ」なる哉。臥薪嘗膽の辛酸此處に九旬三伏の炎下に火

ぬ。はるか沖に目を轉すれば三個の赤きブイは波に隠し之に續いて決勝線まで數本の竿立てられたり。モータボート小蒸汽は警笛囂々その間を驅馳す。海内を擧げてのボートの猛者連は彼方の岩間、此方の樹隠に陣取り今しもスタートを切らんとする練習艇にひとしく目を注ぐ。或は望遠鏡を具へ或は双眼鏡を手にするもあり。漕法タイムの研究ピッチ等は一々之をはかり可來決戦に於ける作戦の資と爲さんとなり。戦機いよ／＼迫れる此の戦場、正に山雨の來たらんと欲するの感あり。今日は最後の練習日なれば我等後援團は赤鬼俱樂部と名乗り初めてのコースをひく事となれり。此の物々しき監視の中に初陣の若武者は先づ武者ぶるひを禁じ得ず。

三 日 晴

今日は競漕艇修繕の爲使用を禁せらる。各自艇によりて練習するもあり、宿に氣焰を吐くもあり。作戦をめぐらすもあり。かゝる程に抽籤に出でし舵手も歸り來たる。報に依れば、

の如き猛練は遂に選手の腕に鐵筋を貫き鐵腕は孕みて自信いよ／＼生れぬ。噫八月四日よ！我年來の怨敵必ず敗るべし。米子來れ。奉公團來れ。我意氣已に三軍を呑むの概あり。第一選手は七月二十日此の自信と此の意氣の下に校友の熱誠に送られて萬歲聲裡波止場を離れぬ。周湖の遠征萬里の戦場に向ふ雄々しさよ。第二選手は後れて三十日出陣す。

石 場 日 記

大正九年八月二日 晴

石場ヶ濱に着きは午前八時なり。一天雲去つて湖上拭ふが如し。蜿蜒西江洲の連山を前に控へ右手には高く三上山此處ぞ我校選手の四度來襲し而て四度慘敗せしところなり。

近く脚下に打ち寄する藻と戯るゝ小波も幾度か此處に注がれし我先輩選手の恨と血涙を交ふるかと思へば胸を絞る無念さに握りし拳を思はず震せ

第一 彦根第一 彦根赤鬼 第三 愛知一中 第七 彦根二
回戦 膳所第一 回戦 四日市商 回戦 膳所二
長濱農學

すでに我敵定るや元氣前日に百倍し、松の木の下でつけられし記録帳を引張出し、敵のタイムをしらべるやら、ピッチを計るやら大騒となれり。相手の短所をばかり發き出し悪口雑談にふけり、自惚のみ強くして明日こそ彦中の全捷と獨りきめて

四 日 雨

夜半よりの雨未だ晴れず、今日は中止さるべしとは思へどさすが心安からず。雨中を石場まで短艇を乗り出し先生に叱らる。雨又降り出す。大會は明日になれりと。

五 日 晴

明くれば五日 今日こそ晴れの決戦の日なれ。先づ心身を清めて各々天孫宮(佃亭前之神社)に詣す。

朝食を終れば正に七時開會の期は迫りぬ。斯くて金龜城下の健兒此處に二十一騎「勝たずば生き

しめよ！月桂冠を持ち歸れよ！とさも心あり氣に耳語するを神の使者と喜び校友諸君の我等が爲に熱叫せらる萬歳の聲に吹き送られてなつかしき彦根を出發しぬ。湖面油の如く艇足なめらかに這りオール軽く水を蹴る。部長池田先生同乗せらる。降らず照らすの好日和。風も無し。唯我が日足の進むがまゝに朝氣の攪亂せられて動搖するのみ。あのなつかしき鐘の音の七時を湖上に知らし來る頃は早や長濱を右手に多景島を左手に控へたり。校友諸君の我等に寄する望に報ひざるべからざるを思ひては一本々々正確に力漕に力漕を重ね九時に餘す僅かにして竹生島に着す。道程七里とか。島に上陸して中食を終へしはしの午睡を取り、午前十一時本日にも目的地鹽津に向ふ。此よりは湖水の狭灣を進むなり。兩岸左右にあつて連山高く岸本に迫り一刻々々兩岸の景更まる。灣は一曲して外海の竹生島はかくれぬ。暫しする間もなく又一曲して鹽津の埠頭現れぬ。近づけば遙々遠路の處を態々横關君富永君等出迎へられて宿に着し一日の辛苦を語る。九時就寢。

くして池田先生舵手の看護の下に漸く我に復すと思へば又もや二番不覺の境に陥りたりしが日頃鍛へし鐵身何ぞ崩れんや！暫時の看護に回復しぬ。二人も倒れたるに尙他の四本のオールは赤銅子の鐵腕に力強く殊にバウ、四番の力漕只ならず。嗚呼爰に快ならずや！東に昇る數條の黒煙金龜城の聳立せる彼岸を望んでは今は西岸に近く路を取るども豈校友諸君の熱情を忘るゝを得んや、漸く大日頭上を過ぐる頃をよ／＼吹きて我等が元氣を復し程なくして大溝に着す。夕刻入浴するに各漕手の「シリ」猿のその如し。

夜月空に牙え一點の雲だにもなし。湖岸を歩いて波止場に出づる一老車夫ありて彼が競争の經驗を語つて最後に曰く競走の要訣は最後の五分時にありと我等は之を天使と拜受し宿に歸つて天に勝利を誓つてぞ寝ぬ。

二十九日翌朝早く元氣層一倍して愛艇に身を投じて堅田をさしてぞ急ぐ行く。白鬚神社近江舞子の名所を訪ふに右岸は緑松連々と打ち續き白砂と相映して尙一層の美を増す背面には高山聳立して

二十八日昨日の景色一變して雨となりたるを以て一同何することもなく唯雨の霽れるをのみ待つ。九時頃怪雲残りなく霽れたるを以て我等一行は他日喜を以て會せんことを期して鹽津を後にして狭灣を出でぬ波靜かに風をよ／＼吹き我等の辛苦を除す。午日前よりはたと風全く失せ天日も我に當る者は皆焦げよとばかりに照り付けるを意とせず五分十分の二人漕に互に漕法の研究をなしつゝ竹生島の西岸を掠めて過る。時正に午日。一葉上の八勇士（池田先生をも含む）は心よく梅干も中食す。程なくして大湖汽船の黒船〇〇丸竹生島の陰より現れたれば我等は其れと三十分間のロングコースを試みんとせしも彼我を恐れてか暫し並行して後右に折れてコース外に出で去りぬ。時に船中に一士ありて彦中萬歳を絶叫せらる。我等は彼に感謝しつゝ尙も同一方向の下にコースを進みぬ。

嗚呼彼果して誰なるか？今も尙よく其の聲の耳底に叫ぶを覺ゆ。炎熱燻くが如くなるも意とせず尙も續くるコースの中我は我知らず倒れぬ。程な

箱庭の築山たり長汀の白砂の所々にエンヤ／＼の聲大網を引く數十人の漁人體は斜に傾きて網は砂上に横はる等大バノラマたり。左は東江州彼岸に白壁數點きらめく又校友諸君を思ひ力漕十五分間。近江舞子を過ぐる頃はひ天一變して西天黒雲交々湧き雷ゴ／＼雷光ピカ／＼盆を覆す雨ザ／＼我等は全身に雨を浴びぬれ鼠の如く頭髮立ち艇内に雨溜る。暫時に波起る。波艇を超へて入り込み艇内艇外皆齊しく水、水中に坐してオール取る漕手。どなる舵手又水中に坐して雨を茶積に晝食して平然たる七士。嗚呼勇ならずや又後世の思ひ出でならずや此くすること半時ばかりにして雨止みたれど風益々加はり艇も七士も藻屑となれよとばかり吹き荒ぶを熱練せる舵手の兩手に巧みに操つらる。嗚呼頼もしきや我が三橋舵手！斯くして堅田に！勞を癒すべく定泊す。

三十日いよ／＼遠漕の最終日なり三日間の疲勞を何のそのとばかりに勇を鼓してぞ出艇す。悠々とオール取るに何なく目的地の大津に着し周湖の擧を此に無事に終へぬ、此れより愈々會場本場に

我が勇を我が腕を揮ふ時は來ぬ。果して周湖の擧の益する所ありしや否や？

武徳短艇大會に出演する記

澤田辰次郎記

七月三十日本日は琵琶湖周湖の擧を終へし日なり。我等は四日間の疲勞を物ともせず夕刻自艇を以て大津に於ける否會場本場に於ける本年度の第一回のコースを引きしに會場特有なる比叡嵐吹き荒れて波高かりしも初陣の割には好成績を揚げたり。

七月三十一日本日より愈々大學艇に乗り込み我等の實力を表すべきなり。午前の部は風なく實に好節なりしかば第一回の試としては好成績。午後の部は午後によく吹き荒れる又あの比叡嵐にリダー少しく負く然れど略好成绩。タイムは中學部第一番なり。但し艇たるや三校艇と大學艇とにして共にアフトラッチに非ず又共に重量は軽くしてアフトラッチと同日の談に非ざれば我が漕

中握る。

正午より旅館にて番組の發表及び艇コースの抽籤あり。池田先生舵手三橋事務所に出席せらる。我が沈着なる舵手の報告によれば我等第一の敵は長濱農學と膳中第一、艇は蓬萊號なり而かも第一回なりと、我等の心中や如何？長農は初陣とは云々、身體、力量、漕法共に勝り膳中とても湖上に覇を稱へし者なり。然れども敵小なりと云へども侮るべからず敵大なりと云へども何ぞ恐るゝに足らんや我勇を呼して戦はんかな！赤鬼俱樂部は第三回にして受知一中四日市商業にして之亦好敵なり。而して我が第二は第四回に膳中第二と組みすなり。嗚呼果して明日の勝敗や如何？因みに本年度の番組を記さん。

- 一コース 二コース 三コース
- 第一回 長 農 彦中第一 膳中第一
- 第二回 奉公第一 奉公第二
- 第三回 愛知一中 彦中赤鬼 四市日商
- 第四回 京都一商 八幡商
- 第五回 德島中 米子中 九龜中
- 第六回 大津互教會 滋賀縣警察部

雜 葉

法は全く裏切られたり嗚呼惜しむらくは我が思の此に至らざるを！

八月一日天候昨日に比して稍惡傾。タイムは依然として中學部の首位。然れども此に一曲者あり。曰く米子中學なり。周湖の途に居りし時早や我が敵米中なるを新聞紙上に云ひ居たりしに果して然り。彼常に我が次位に控ふ。

本日午前八時〇〇分の列車にて我が第二來る。宿一層賑はふ。第二午後より練習開始するに相應の成績たり。

八月二日風模様あつて午後の練習目茶苦茶。奉公第一五分 秒第二 分 秒本校第一 分 秒 米子中 分 秒。依然として奉公第一首位我第二位、嗚呼口惜しいかな本校の奉公に一步を譲りたるを……

本日午前の列車にて我が赤鬼俱樂部なる者來津す。

午前午後共に成績相應。八月三日大會の前日の故なるを以て練習は中止されたり。故に自艇にて手習しの爲オールを午前

第七回

膳中第二 彦中第二

第八回

大津活人俱樂部 伏見城南俱樂部 (不参)

而して艇は中學部は三校艇にして他は皆大學艇なり。

八月四日愈々待ちに待ちし日は來りぬ。然れども天何を思考するならんや？東雲ほのしらむ頃はひ已におそく東風強く。湖上に白波立つ。白波岸に崩れて飛沫飛ぶ。曉を報する隣の雞の音すらも聞き分くる能はずして湖上に荒るゝ波浪の怒號のみあはたしい時計は正しく 時 時に正に怒號や酣なり。「如何程風はあらくとも如何程波は高くとも何ぞ左程に懼れんや。來らば來たれ驚かし吹かば吹けよや懼れんや日頃鍛へし此の腕をいざや示さん諸共にいざや示さん我が勇を」とばかりに會場に出陣するに漸く愛知一中のみぞ、我が後に列する。沈着と云はんか？憶病と云はんか？程なくするに吏員方二三名出會せられ又水上警察巡查も會合せられる。暫し湖の荒れ狂ふを打ち見やりて揭示に何かしたゝめられたり。見れば「本日競走中止」と、我等一行は詮なく、宿に歸り天に武運

長久を祈り専ら體力休養にのみ務む。安河内校長我等を宿に訪はる。

八月五日早朝朝日にこやかに東山に出で今日のレースを親しくみそなはさんとするものゝ如し。我等の勇氣や昨日に倍して盛なり、時、愈レースの幕は開かれたり。

第一回 我等一行は蓬萊號(二校艇)上に身を遷し校友諸兄諸君の聲援に且奏樂に吹き送られてスタートに向ふ。號聲一發。長農、膳中第一及び我等の都合三艇は我先にと迂り出す。三百のボールを過ぐる頃ほひ最早膳中を後に見る。然れども長農我に並ぶ。八百九百のボールに進めば長農の足少しく鈍る。又もや號聲一發、天に響くに我長農に先んづる事一艇身半膳中とは見るに尙悠然とコースを引く。

第二回 奉公第一第二兄弟相争ふ兄者兄二弟者弟二遂に兄勝つ。

第三回 我が赤鬼俱樂部の初陣なり。三艇共に先になり後になりして共にノノ大差なくして進み最後に於て四日市商業愛知一中に先だつ約三分

第十回 長濱農、徳中を制す長農益々有望なり。

第十一回 名譽競漕(師範部)奉公第一には如何な八商もとても叶はじと初より一步退く。

第十二回 愈中學部の名譽レースとはなりぬ。

位置	着順	分	艇名
彦中第一	三	四分四十三秒 $\frac{4}{5}$	方丈
米子中	二	四分四十三秒	蓬萊
四日市商	一	四分四十三秒	瀛洲

本日の最終のレースにして而かも最も人心を惹くレースなり。我等の案に違はず我が敵は米子中とは定まりぬ。最早や艦装して蒸汽船に曳かれ行く時の我等の心中や如何?心を冷静に保ち丹田に込め沈黙の業を爲す。敵も沈黙。我も沈黙。あたりは「シン」として唯汽船の水進器の音と我等の乗するボートの水を分けて曳かれ行く音のみぞあはたらしい。嗚呼此の戦たるや實に天下分け目の戦我等の責任や重且大なりと云ふべし。戦には必ず敗くるあり勝つあり。彼が勝つか我が彼に勝るか二つの中の一つと思へば全身に勇氣隈なく満ちぬ。校友諸君の御聲援下さるゝ聲の漸く薄ら

のシート我が赤鬼に先だつ事約一艇身ばかりにして決勝線に入る。嗚呼惜しいかな小差を以て我が赤鬼最早破れたり。我等奮戦したれども彼尙奮戦せり我破れたりとも何ぞ悲しまんや。只此の恨!此の耻辱!正に來たらん日に雪か

第四回 滋賀縣は短艇の本場。八商悠然と京一商を抜く。兄弟内に相戦ぐも外海を防ぐとか八商の勝を喜ぶ。

第五回 米子、徳島相接近し丸龜獨り「ノロクモ」の後へに控ふ。

第六回 大津市互救會小差を以て警察部に勝つ。

第七回 膳第二兄の復讐せんとかかりに出で來たりしも彦中第一には一步を譲り而して第二を打つて仆す。何たる卑怯者ならんや!此の怨何時の世にかは忘るべき!

第八回 城南俱樂部不參の爲大津活人俱樂部一人進んで。一人勝つ悠然たるかな!

第九回 愈々特選起る。愛知一中病人出來したため棄權故に春公第二平調に進む。

へば蒸汽船強く一聲ビート鳴らし、各艇各、スタートに着く。名譽の旗を握らざれば再び生きては歸らじとオールを堅く握りしむ。天の彼方より用意の聲のかゝるを今や晩しと待ちかまへし三艇はスハとスタートの綱を切つて落し漕ぐは今ぞ正味の戦は今なるぞと急調を以て進む。我等も彼に負けじと力漕す。百、三百、五百七百、常に我二艇に勝る。九百のボール近くになれば米中あの得意の今一層の急調を以て我に並ぶ。我も彼に劣らじと進むに今一本と思ふ間もなく二艇並んでゴールに迂り入りぬ。彼も必死我も必死。思はず艇中に倒れたる時あたり「シン」と人々顔を見合すのみ。暫しするに審番船に一信號旗掲げられたり。舵手の曰く「」と。嗚呼此の戦途に：：：ないう!

最早我が事既に畢りぬ。何の面目あつてか我が校友諸兄諸君に見ゆるを得んや、日頃の練習も周湖の擧も最早何の功をも奏せずして逝きぬ。此の怨!!此の恥!!何時の世いうは忘るべき。嗚呼此の怨!!將來有望の後輩の諸君何卒我等の耻辱を雪がれんことを。終りに本年度武徳短艇大會に出漕せ

られし赤鬼俱樂部の諸輩に一言せざるを得ず。嗚呼赤鬼俱樂部の諸輩よ長き暑きあの夏の日に學期試験とも云はずして我等短艇部の爲御後援下されし有難さ而かも是に何の報ゆるなくして再び諸兄に見えんことは。涙にむせんで言はんと欲して語る能はず嗚呼千々の思……！

乍末筆在津中御厚情に預りし伊夫岐 兄、辻傳次郎兄に厚く御禮申して止まざる次第なり。

本年度の武徳短艇大會は中學部と師範部とに區別せられたり因みに其の各部に屬する校身を記さん、中學部、米子中、徳島中、膳中第一、第二。彦中第一、第二、赤鬼俱樂部(彦中)四日市商、長濱農、愛知一中、丸龜中師範部、滋賀師範第一、第二、八幡商、京一商
本校出漕者左の如し。

- | | |
|-----------|-----------|
| 第一B 成宮 秀夫 | 第二B 原田 政藏 |
| 2、池田 暢夫 | 2、野 寺 勇 |
| 3、三原寅三郎 | 3、藤村助三郎 |
| 4、伊夫岐直三 | 4、川添助二郎 |
| 5、澤田辰次郎 | 5、堤 英三郎 |

隅田川出漕之記

神戸に於ての敗。必勝を期した八月の武徳會競漕にも再び敗衄の涙にむせんだ我部選手は武運の拙さ、無念やる方なく、東都の一高主催競漕は毎年十月上旬に開催の由で毎年愛知一中之に参加し旗を取つて歸るとの事を聞き、今年は必ず之に参加し年來の望みである旗を取らうと一同ひそかに誓を立てたのであつた。第二學期はしまりてより或はバク臺に、或は湖上に艇を浮べてしまりに練習をなすより一部の者は不審を抱いた様であつたが企圖については堅く秘して云はなかつた。然れども事遂に應援團長の知るところとなり、修學旅行を兼ねて東都に遠征する事となつた。爾來朝はタンフに放課後は湖上に夕晚くまで技を磨き、六日朝に至つては大數コースを五分二秒で飛ばし大凡自信らしきものを得た。聞けば敵は愛知一中と慶應普通部との事なれども、慶應などは恐るゝに足らず只愛知は例年の事故川になれたるが恐ろしいのみである。

- | | |
|---------|---------|
| L、富田 延壽 | 6、難波 考夫 |
| C、三橋 勝彦 | C、堀口 兵次 |

赤鬼俱樂部に付いて、抑々赤鬼俱樂部なる者は全部在學生より成る一團にして其の目的たるや本校水上部の武徳短艇大會に出漕する爲の練習の應援なり。抑々我が水上部の西津に破れし凶報至るや之を雪がため水上部に一段の進歩をなさしめんがために有志會合して作りし者にして固よりオールになじみある者のみの團結なり學期末に學期試験の目前に迫るも厭はず日々還手等と共に定時刻には揃つて本校艇庫に集合し、水に浴するを厭ひ食欲を忍び且互に戒め合ふ等規則正しく尙嚴格なる事選手と共にして實に誠心誠意我が部の爲に御盡力下されし一團なり。而して後遂に部長池田先生の認められる事となり遂に其の勧めにより此の度武徳短艇大會に出演せらるゝに至りしなり。因みにメンバー左の如し。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| B、藤田 宗七 | 2、林 茂 雄 | 3、北村 勝 |
| 4、伊豆川作平 | 5、杉本 英三 | L、内方 孔三 |
| C、治部 藤吉 | | |

大正九年十月六日午後五時十五分彦根發列車にて熱烈なる校友會員諸君の應援を受け勝たずばの覺悟を定めて旅行兼應援の五年生と共に彦根の地を離れ征途に上つた。夕陽方に西山に没せんとし、あかあかと天に映ね、雲を染め、恰も吾々の前途、今日の門出を祝福するものゝやうであつた。

七日朝七時廿分東京驛に到着す、多數先輩の出迎を受け神田小柳町の宿に至る。雨天の爲め道はぬかるみ大閉口、小降りとなるを待ち兎も角も川の模様を見やうとて一同川に出掛けた。ぬかるみの中を一高のK氏より贈られたコースの地圖と目標とを照り合はしながら一高の艇庫まで行つた。細雨がしきりに降りしきるので、目近にレースを控えた事故、今日は艇を借りる事は止めて、その儘宿に歸つた。飛報來り九日のつもりだつたレースは十日の由を告げた。

明くれば八日昨日の雨は名残なく晴れて上天氣なり。部長も共に一高艇庫に艇を借りに行く。朝は艇になれる程度にゆるく引いた午後は四時頃か

ら練習。コンデイションは非常によかつたが下げ潮の時だつたので時間は相當多く要した。

九日朝練習の時、

愛知も出で、練習をして居つた。聞くところによれば彼等は自分等の到着前一日早く來り、此の近邊に陣取つて練習を重ね居るとの事なり。慶普も時折影を見せして恐るゝ敵にはあらず同夕六時より一高寮内に於て懇親會開かれ一同出席した午後の練習を終ふるや直ちに先輩の小西君に伴はれて一高の寮に至る。そこにてはからずも去年の夏も、今夏も長曾根で色々御



世話を受けた松岡氏に逢ふ。非常に喜んで下さつて、ホールで色々話された。小西君にはそこで夕飯を御馳走になつた。懇親會といふのは、明日の敵を前にしての茶話會だので頗る痛快であつた。九時宿に歸る。應援團は今日午後當地に着いたとの事であつた。

前列
池田暢夫(補欠)
後列
伊夫伎直三(四番)
三橋勝彦(艇軸)
伊豆川作平(二番)
池田部長

十日愈々最後の唯雄を決す可き日は來た。朝今一度最後の練習をすまして後向島の梅芳亭に於て休息した。橋本。原。林等の諸先輩がしきりに御世話下さつた。松岡氏も來て下さつて「ビータ」を飲ました。

オールを流せし爲め慶普二着となる。

斯くして年來の望なりし旗は遂に吾々の手に收められ桂冠は吾々の頭上に降つた。此の時の喜悅此の時のうれしさ。迎も筆も言も及び難いのである。皆相擁してうれし泣きに聲を上げて泣いた。あゝ思へば幾度か敗駟の涙もて汚されし吾々の歴史も今此の勝つた此の涙を以て洗はれてしまつた。旗を團長に渡して後梅芳に戻つて休息し漸くにしてこゝを出でた。同夜九時上野發の列車で多くの先輩の御送りのもとに東京を去つたのであつた。

五年ぶりで旗が金龜の城下に翻つた。それ元より校友諸君の熱誠なる應援後援の然らしむるところであるので、吾人は諸君の御熱心なる應援後援に對して満腔の謝意を表し、又應援後援に報ゆるを得たるを嬉ぶと共に尙將來も奮つて一校を代表する選手なるもの、應援に力をそゝがれん事を希ふものである。

終りにのぞみ、東京滞留中色々御面道を見て下さつた先輩諸君に謝意を表する次第でありま

りなんかして勢をつけて下さる。愈々時は通りレースの時となる。三艇はランチに引かれてスタートにつく。岸には應援團の諸君手に手に旗を振り聲をからして應援し水には「彦中」と大書せる大旗を立てしボート一隻我等を應援さる。その應援のすさまじさに他の二艇は皆度膽を抜かれし態であつた。選手は皆HMSのユニフォームに身を堅め鎌倉大佛守護符をたゝみ込みし手拭にて鉢巻し發艇の相圖今や遅しと待ちうける。時は五時半過ぎ水上はの暗く敵艇定かならざる程なりき、一發の號砲は發艇を告ぐ。三艇は弦を離れし矢の如く、一齊に漕ぎ出す、一コースは予等。二コースは愛知、三コースは慶普といふ順序也。スタートに於ては吾愛知に遅るゝ事一本なり。スタートへビー十本の後には彼我並行となりそのまゝミッドルに入る。慶普は初より問題外なり。ミッドルへビーをかけるや一本一本敵を抜き八百米程の所にては完全に愛知を抜き二コースに入り五六艇身の後に愛知をのこして決勝線に入る號砲一發予等の勝利を告げ本日の競漕を終る。愛知は途中にて斷念し

す。

因に出漕選手左の如し。

- C 大庭 唯市
- L 横 關 虎三
- 5 澤 田 辰次郎
- 4 伊 夫 岐直三
- 3 三 原 寅三郎
- 2 伊 豆 川 作平
- B 三 橋 勝彦
- 補 富 田 延壽

二番の池田暢夫君は病魔のをかす所となつた爲出漕する事能はず伊豆川君之にかわつて出漕した。

祝勝端艇競漕大會の記

大正九年十月二十三日去んる十月十日一高主催端艇競漕大會に出場し、努力奮闘遂によく優勝の月桂冠を得たる我が端艇祝勝の大會は開かれぬ。此の日や昨一昨低迷せし暗雲隔なく晴れて、

て如何ともすべからざりしは致し方なし。

第四回

居川組 一着 六分三十七秒

大橋組 二着 六分四十七秒

上田組 二着 六分四十七秒

第五回

宮成組 二着 六分四十一秒

下村組 一着 六分四十秒

押谷組 一着 六分四十秒

第六回

平川組 二着 六分五十五秒

三橋組 一着 六分四十四秒

治部組 一着 六分四十四秒

第七回

池田組 一着 六分四十八秒

澤田組 二着 六分五十五秒

鹿取組 二着 六分五十三秒

第八回

仙波組 二着 六分四十四秒 $1\frac{1}{2}$

伊夫岐組 一着 六分四十二秒

雜 乘

近來稀に見る好端艇日和、湖面は紺青に澄みて静かなること鏡の如し。さても榮ある優勝旗、金色燦たる柏の葉は輝然として旭日に誇り、色褪せて幾多の戦跡を偲ばしむる紫色飄然として快風と語る。左に優勝選手の芳名を留め他はタイム、着順の記録に止めむ。

第一回優勝選手獨漕

大庭唯市、横關虎三、澤田辰次郎、伊夫岐直三、三原寅三郎、伊豆川作平、三橋勝彦。

ストツプ不完全の爲タイム計るを得ざりき。

第二回

松本組 一着 六分三十四秒 $4\frac{1}{5}$

東野組 二着 六分五十九秒

辻組

第三回

宮内組 一着 六分二十七秒 $2\frac{1}{5}$

富田組 二着 六分四十五秒

大庭組 二着 六分四十五秒

富田組漕手五名を以て奮闘せしも他の二艇共に夫々特選及名譽に出漕せる程の猛者揃ひに

第九回

藤田組 一着 六分五十一秒

横關組 二着 七分

第十回一年クラスレース(直航)

甲組 二着 二分五十六秒

乙組 一着 二分五十三秒

丙組

一年生としてはタイム速き方と云ふべし。

第十一回俱樂部レース

神崎 一着 六分四十秒

芳香 二着 六分五十五秒

第十二回俱樂部レース

S P 二着 七分〇九秒

少年

凸凹 一着 六分四十八秒

第十三回俱樂部レース

拳骨 一着 六分二十五秒

タンク

拳骨 二着 六分四十二秒

第十四回俱樂部レース

S.Y.C. 二着 六分三十秒
 赤鬼 一着 六分十秒
 明星

第十五回對部レース

庭球部 二着 六分四十二秒
 武術部 一着 六分十八秒
 徒歩部

第十六回特選レース

大庭組 二着 六分四十七秒
 下村組 一着 六分四十五秒
 上田組

第十七回名譽レース

宮田組 一着 六分四十七秒
 松本組 二着 六分五十一秒
 居川組

第十八回來賓レース(直航)

來賓組 一着 二分十三秒
 來賓組 二着 二分二十秒
 先生組

前の天幕の中には諸先生の顔もにこ／＼してゐる、土俵のまわりは黒々と人の輪をなして町人の観客もかなり多い、こうして角力ははじまつて一年の一番勝負となる、あまりにあつけない。

此の中で私等是一个の面白い皮肉を見た、大兵西澤、誰もよく知つてゐやう其の大兵が小兵の山田にうまくまけたのだ。西澤には自信があつたらうとして油断もあつたらう、何にしても大兵に勝つた山田はえらいに違ないが然し、「ぐにやり」と土俵ぎわで二三度バウンドしてやられたのには私等はかなりあんぐりした。どつと云ふ笑聲が起つたをしてかなり長かつた。勿論負けれた西澤を悲しむ心はみんなにあつた。西澤は後に三本抜にうまく前の味噌をぬぐつた、然し其の勝方はあまりにあつけないものだつた、其の爲か何かは知らんが三本抜は二回くりかへされた。

二年は何事もなう平凡だつた。
 三番勝負ではあつたが大抵は一人が續けさまに二本とつてしまつたのが多かつた、五本抜も腕を握らす程でもなかつた。三年三番勝負はかなり充

何れも嘗て腕に覺えの來賓揃ひ先生組の振はざる亦宜なる哉と爾云

第十九回俱樂部名譽レース

赤鬼 一着 六分三十二秒
 武術 二着 六分四十秒

かくて祝勝大會は了りぬ。記録者の怠慢本日の各回に對する適切の批評と狀況陳述とを略せるを乞ふ諒とせよ。

角力大會

時日大正九年十月一日午後一時より、
 校庭土俵

今年の角力大會は午後からだとか云ふ話が我々の間にしばらく聞いてゐた、あかんなど誰かい云ふ、そして角力大會は十月一日の國勢調査の日に其の通り午後から開かれた。其して誰も何とも云はない、秋は清い天は高い涼しい風が来る。土俵

實してゐたやうに覺える、やはり三年だ君等は本校の中堅である。自重すべきものであらねばならぬ。其の意味に於て吾人は元氣あつた五人抜もまだ／＼満足すべきでない云ふ、五本抜は勇壯といつてよいものだつた。川村、杉本もよく戦つた、宮川は天晴れた。此の時大分角力氣分になつて來た、わつ／＼と云ふ聲も起つて來た凡てに充實が必要だ角力組む者も見る者もそしてはじめて、面白い角力が出るのだすべてが其うだと我は諸君に云ふ、觀衆も熱して來た、行司の音もさえた。呼出しの親爺も仲々愛嬌を振りまく。

「四年級の三番組でござります」と行司の爺がよばわる、土俵まわりの頭數もかなり増した。しつかりやれと私等は應援するのだ。

四年の三番勝負、其れは餘程張りつめたものだつた、其してあらゆる新機角力と思はしめるまでもに噴飯の角力があつた。私等は幾度となく腹の皮をよらされた。

五本抜との間に室谷先生の模範五人勝負があつた、地平まづ組むや地平どつと組んで足まきつけ

土儀際にためらひてどつとたはす、拍手、どつと起る、ついで牧野組む、ピッチャー〜と援呼する、須天倒室屋先生の負けだつた。奥山美事にまき倒されて退く、山本どつと組めば「どすん」と投げらる、が、悲しい事には、室谷先生の足が出た。誰も惜しいと思つた。其して何ともなしに、どつと歡呼した。

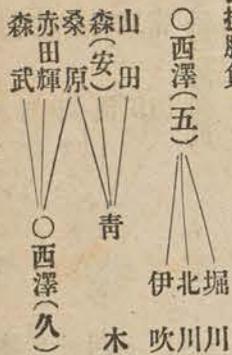
四年級五本抜は後だ四本抜となつた、其して直に勇ましいと云ふ感じのするものだつた、高橋よく戦つた、牧野も勇敢だつた、最後の勝者は富江だつた。四本抜と曰つたとか云はぬとか一寸どたつた様だつた、が其處は、行司の腕前でうまく治まつた、然し豪傑連中は一寸鷹に油揚げをさらはれたと云ふ体だつた。すべて四年の角力は、通じて手に汗を握らすと云ふよりもうんとやれそれやれと云はしめる、体のものだつた。學生角力として青年の角力として賀すべきものかも知れないをして私はこうあつてほしいと嬉しく感じたのである。君等はこれから正に突進すべき者だから慕直に進むべき者だから。

時に城山からゴーンと四つ響いて來た、横雲のかなた夕雲はかすかに赤かつた。

一年級一番勝負

- 1 (西澤久) ○ 2 (小林) ○
- 3 (中山) ○
- 4 (重森) ○ 5 (岩佐) ○
- 6 (三和) ○
- 7 (梅本) ○ 8 (青木) ○
- 9 (西澤五) ○
- 10 (山中) ○

三番抜勝負



二年級三番勝負

- 1 (若松) ○ ○ 2 (吉川(英)) ○ ○
- 3 (若松) ○ ○

雜 録

五年の三番勝負實はたつた六組である、これには一寸「おや」と口あんぐりせしめられた。

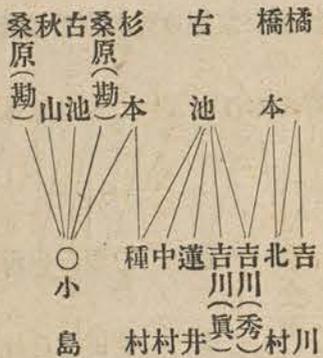
我には其の小數なのは悲しまない、たゞ其れが立派に徹底してゐる方が多くのだらけたものよりも何程か望ましい事であらう。數十人の凡人よりも一人の天才が社會としては望ましいかも知れない、賀すべきかも知れない、が、然し天才教育は結構だが其れを主張する者が履き違へては大變だ諸君が角力に鮮かでないならばやられない方がよいかも知れぬ。然し他方面に於て諸君の天稟に突貫せらるゝ所は勿論なくてはならないと思はざるを得ない。實際六つの取組は立派な、徹底してあつたと私は思つたこれは私のみではなかつたに違ない。

五年の三人抜六人の三人抜もいさましく、意氣あつて終つた、椋田モシヤモシヤ山勇者の名をなした、數は少ない、然し意義ある者だつた貫徹する所あるものだつた。

こうして恙なく、意氣あつて來つたのが千秋樂である。

五番勝負

- 4 (桂田) ○ ○ 5 (古池) ○ ○
- 6 (北村) ○ ○
- 7 (青木) ○ ○ 8 (秋山) ○ ○
- 9 (種村) ○ ○

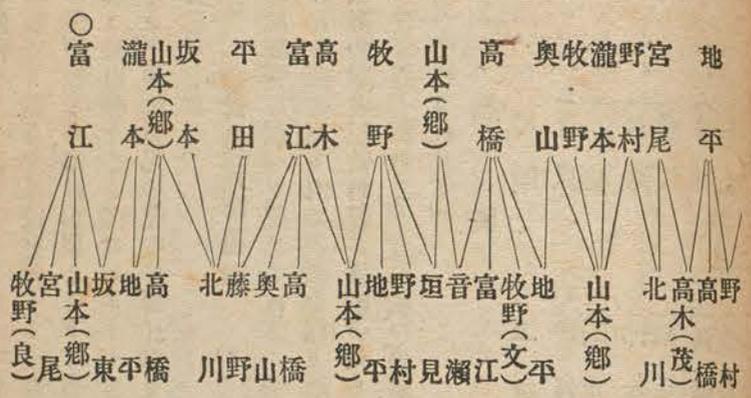


三年級三番勝負

- 1 (千菊) ○ ○ 2 (西野) ○ ○
- 3 (箕浦) ○ ○
- 4 (西依) ○ ○ 5 (須藤) ○ ○
- 6 (山本) ○ ○
- 7 (野寺) ○ ○ 8 (平川) ○ ○
- 9 (富川) ○ ○

五人抜勝負

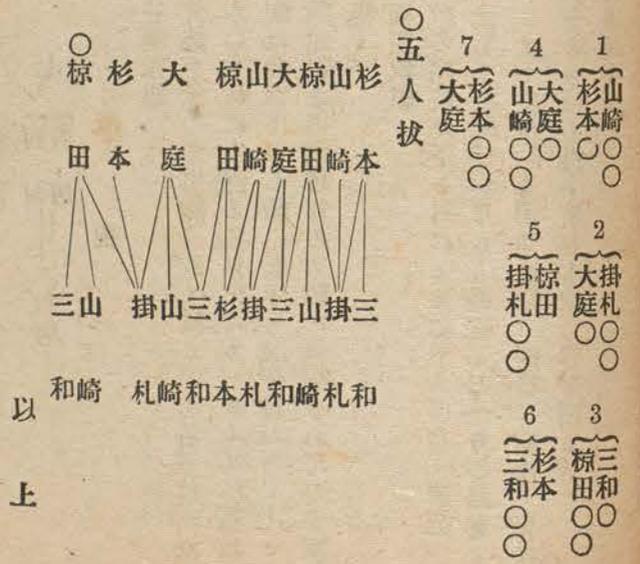
五年級三番勝負



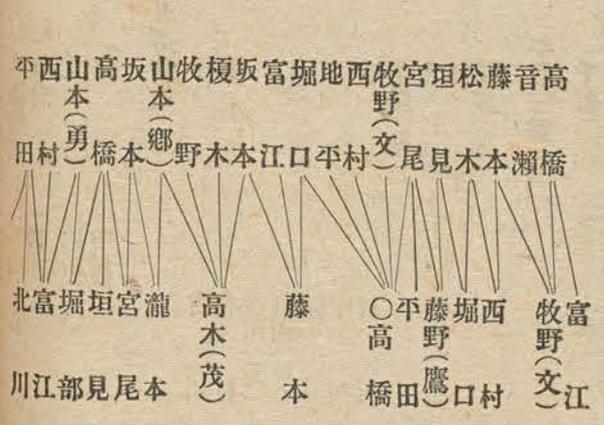
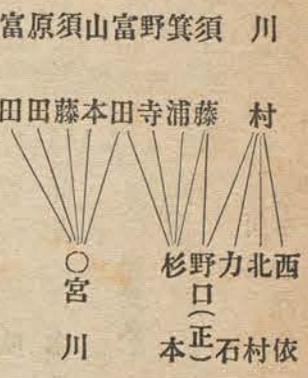
昨冬重填園白髭猪田を失ひたる我部は伊吹の殘

大正九年度庭球部報

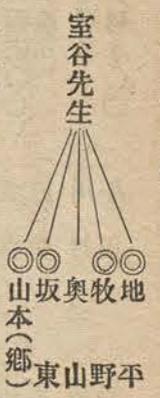
◎春 期 練 習



四年級三番勝負



四年級五番勝負



四年級對室谷先生

雪未だ鹿の子の如く残る四月一日といふに春期練習を開始したり檄によりて集まる選手拾餘名天候の不順にも關らず母校を愛する一念は嵩じて強大なる忍耐となり或は膽頂より下す烈風に砂をまく日或は陰雨紗々としてユニホームを濕す日をも物ともせず先輩諸兄の叱咤の聲に勵まされ猛烈なる練習をなしたり。

◎對滋賀師範戰

春期練習に鍛へし腕あらはさんものと選手一同但々たる眼を以て四方の敵を探り居たり時こそあれ湖南の猛者滋賀師範の挑戦いたる雀躍直ちに應戦に決す乃ち四月二十五日戦ひの暮は金城下に於て切つて落されたり。

戰 蹟

- 滋師 本校
- 一、齊輪 一—三 押谷 永
- 二、大澤 〇—三 福永 谷
- 三、竹上 三—一 鹿取 橋

勝に乗じて迫る敵軍を難なく挫きて退かず續く大將參謀を打たれたる残念色にはあらはさず、大將の一騎打となりぬスコアの示す如く戦は電光石火正に之龍攘相打つの光景に似たり然れ共一中スピリットは遂に敵を屈服せしめぬ。

澤田西川組

大將打たれて殘兵全からず左利きの澤田新進の西川に翻弄せられて退く。

かくて本年度に於ける初頭の戦鬪に優退二組不戦一組を残して名譽ある月の桂を戴きぬ。

於縣中縣下中等學校庭球大會參加之記

五月三十日彦根驛頭歡呼の聲に送られて死しても敗けて歸らじと心に誓ひたる十名の戦士は目的地指して發車いたしました。朝來天氣晴朗絶好の庭球日和。

戰 蹟

◎第一回戰

- 一、彦中 澤田 三—一 膳中
- 二、彦中 高橋 一—三 八商

- 四、竹上 一—三 山本 平
- 五、中野 二—三 地山 平
- 六、駒井 一—三 澤田 河
- 七、河村 不戰勝

概 況

押谷福永組 先鋒を承つて出陣し敵先鋒との功名争は梶原佐々木のそれにも勝ると見えたり、かくて激戦數合軍配は我軍に舉る續く新手も又押谷のスピートある熱球福永の老巧なる活動に封鎖されてなす所なく退く。

高橋鹿取組

敵の副將部下を討れて無念やる所なく決死の形相凄しく出陣慍惇なるも高橋も亦一方の曲者よく戦ひよく攻めしも前衛鹿取、病後日向淺く充分手腕をあらはし得ず惜しも敵に勝を讓る。

山本地平組

- 三、彦中 毛森 三—一 比中
- 四、彦中 福押 永三—一 滋師
- 五、彦中 山平 三—二 八商

◎第二回戰

- 一、彦中 澤田 一—三 膳中 川邊 村
- 二、彦中 毛鹿 取利 一—三 八商 福井 部
- 三、彦中 福押 永谷 一—三 八商 西河 瀨 川
- 四、彦中 山平 三—〇 八商 前村 川

◎第三回戰

- 一、彦中 山平 不戰勝者

◎第四回戰

- 一、彦中 山地 平本 三—〇 八商 西川 瀨
- 最優勝戰
- 一、彦中 山地 平本 〇—三 膳中 木池 松 戶

スコリアの示す如く第二回より殆ど八商と對抗試合の状態になりましたが良く之を退けました優勝戦に於て膳中に三〇〇と云ふ惨な敗をしましてのは深い、事情があるのです紅涙を流して敗を取つた戦士の辛い辛い當時の胸中に秘められて居る或物がそれであります而し地平の上り氣味あるのを擁して善く強敵八商を薙ぎ倒した山本の凄さは敵をして顔色なからしめ全く入神の技でありました、而し敗者は敗者です潔く屈服して捲土重來以て秋期の大會を待ち校友會員諸君の期待に充さん決心寛大なる諸君希くは御寛恕を。

◎神戸主催全國中等學校庭球大會

参加之記

時は五月二十二三の兩日神戸高商に開かる、庭球大會に参加するため山本、地平は川島部長代理に引率せられて二十二日、午前九時目的地指して發車せぬ而して校友會員諸君の絶大なる期待を双肩に荷ひて其日午後二時會場に着せり、左に概要を示す。

第一回戦(二十一日)

部長と共に西下したる山本、地平之を吾部を代表し吾校を背負ひて濱寺の檜舞臺に雌雄を決せんとする戦士なりき。

孤軍敵地に侵入したる兩人善く奮闘せしも連日の試験の疲勞は彼等をして充分なる活動を妨げ相擁して大松樹の下に憤死せり。

戦 蹟

徳島商業〔乾〕
松本三十一彦根中學〔山本〕
地平

◎夏 期 練 習

苦しい、一學期の試験もすんで諸君がなつかしい父母の膝下に思ひのまゝの日を送つて居らるゝ七月二十六日より我部選手は旅館西澤に合宿して毎日夕泥に塗れたユニホームを身に固め猛烈なる練習をいたしました、早稻田大學から請川澤二氏がコーチチャーとして日々叱咤されるので選手之苦勞も一入流汗は淋漓として瀧の如く宿に歸れば身體綿の如く夕飯も取るか取らずに横になる位かくて朝は八時より夕は七時までボールに親しむ事數日こゝに絶大なる自信を得て八日一日に解散

大阪府立今宮中學〔米井〕
堤二二三彦根中學〔山本〕
地平

第二回戦(二十三日)

兵庫縣立御影師範〔松村〕
山口三十一彦根中學〔山本〕
地平

かくて第一回戦に於て年來の仇敵今宮中學を屠り安堵の胸を撫づる暇もなく二回戦に於て御影師範と見ゆる事となれり彼御影師範は斯界の霸王我々昨日今宮中學を粉砕したる意氣衝天の士、この試合如何と観客肩唾を呑んで待つ戦ひは御影のサーブに始まりぬ。激戦數合我先づ一ゲームを先んづ。されど彼もさるもの猛然として奮ひ繰り出す熱球目に止まらず我も又よく守りよく攻めこゝに一大快戦を演出せり然れ共武運は遂に我に幸ならずして残る三ゲームを與へて涙をのむ。

◎大阪毎日主催全國中等學校庭球大會

参加

金鐵も溶かさん許りの三伏の暑氣と連日の試験とに戦ひて苦しき練習をなす事數旬技成り試験終り日來りて七月二十四日彦根驛頭歡呼の聲に送られて勝たずば生きて歸らじと深く心に銘じて遠山

し各々二學期の活動を約して家路に就きました。

◎名古屋醫科大學主催全國中等學校庭球大會

参加之記

三伏の暑氣に苦心慘澹研究を重ねたる我部は押谷、福永をして醫科大學庭球大會に出征せしめたり、九月十八日彦根驛頭に於て雄壯なる激勵辭は兩人に浴びせられ彼等又一學期の我部の不運を恢復せんす大なる抱負を以て中京へと駒を進めたり戦闘は再び吾に不利なりき然れ共彼等兩人の活動奮闘は唯々讚辭を呈するのみ。

横濱商業三一二彦根中學〔押谷〕
福永

◎對岐阜中學校戦

時維れ天高くして馬肥ゆるの候九月十二日なりき、このおだやかな静かなる日金龜城下に於ては未曾有の激戦行はれ而して結果吾校の大勝に期せしとは相手は誰？之を東海に於て名聲噴々たる岐阜中學なりしなり。
左に戦蹟を掲げて讀者と共に嬉ばん。

岐中 本校 岐中 本校

1 安田二二三 毛利鹿取 2 飯沼一三三 毛利鹿取

3 伊庭三〇〇 河村吉居 4 伊庭三〇〇 押谷福永

5 山北一三三 高橋西河 6 日比野 戸谷二二三 高橋西河

7 伊庭三〇〇 山本地平 8 伊庭二二三 毛利鹿取

かくて優退二組を以て吾軍凱歌を擧げたり、此時の我が戦士の喜びや萬戸富者と雖も能はずとや云はん。

此戦闘に於て吾軍山本地平組、押谷、福永組の敵副將組のため憤死せしは残念なりしと雖も高橋西川組の若手が敵老將と正々堂々の陣を張り遂に其の首級を擧げしは大いに稱讚すべく毛利鹿取組の味方の讐を報せしは多とすべし、最後に校友會員諸兄の熱烈なる應援を厚く感謝す

◎大阪主催全國中等學校庭球大會 參加之記

山本組押谷組の惨敗は新進毛利組をして立たし

戰 蹟

第一回戰

東山中學〇―三彦根中學〔高橋地平

第二回戰

京都工業二―三彦根中學〔高橋地平

第三回戰

京都一商三―一彦根中學〔高橋地平

かくて新銳の高橋、地平の刀先凄く劈頭先づ東山を零敗せしめ次いで來る京都工業も激戰數合遂に屈服せしめぬ。併して最後に洛陽の霸王京都一商と見ゆる事となりたり、敵軍同郷の士を二度まで破られて復讐の形相凄まじく我に迫る、されど吾又返り討にいたしてくれんとの決意あり此處に一大快戰は切つて落されたり。

然るに悲しいかな後衛高橋第一回に於て對東山戰に當り奮闘の餘り足指先を破りたる爲痛苦甚だしく流血は淋漓として歩行の自由を奪はれ且吾作戦を誤りしたため絶好のチャンス逃したり。實に血涙共に下るとはこの事ならん。

めたり即ち九月二十日瀧口部長代理に引率せられ西下したりされど武運はあくまで我に與せず亦々黒煙都市に於て憤死したり。

戰 蹟

大阪府立瀧野中學三―二彦根中學〔毛利鹿取

◎三高全國中等學校庭球大會

本年最後の大會に是非とも月桂冠を得て今日までの敗辱の汚名を雪がんと出征したる押谷白髭は遠山部長の引率の下に目的地に達したり。

噫々残念運命は如何程我部に對して酷なるか。あはれ出征戦士は平和に誇る洛陽の地に於て無慘なる戰死を遂げたり。

戰 蹟

御影師範〔山口三―〇彦根中學〔押谷白髭

◎京都高靈主催全國中等學校庭球大會

時は十月十一日京都高等蠶業學校の招待に應じて出征したる高橋地平組は明日の本校大旅行を前にしつゝ、孤劍を抱いて敵地に入れり。

◎於八高縣下中等學校庭球大會 參加之記

春期に於て膳中のために名をなさしめたるを以て秋期にこそはと各戦士は私かに時期の到來を待ち居たり招待狀は來れり曰く十月十七日午前八時よりと。

當日午前六時彦根驛頭に集りたる選手の眉宇には昨日までの大旅行の疲勞は歴然と顯はれ居たり。

然れ共倒れて後止むの決心なしたる戦士は多數の應援者に擁せられ意氣陽々と敵地に乗り込みたり。

戰 蹟

◎第一回戰

一、彦中〔堀川〕 不戰勝

二、彦中〔高橋地平〕 三―〇膳中

三、彦中〔毛利福永〕 三―一滋師

- 四、彦中 押谷三ー一長農
- 五、彦中 山本二ー三膳中

◎第二回戰

- 一、彦中 堀江二ー三膳中
- 二、彦中 高橋三ー一膳中
- 三、彦中 毛利二ー三商
- 四、彦中 押谷二ー三膳中

◎第三回戰

- 一、彦中 高橋二ー三商 前川

噫又何事か云はん唯旅行中の疲勞を醫すべき日のなかりし事を恨むのみ。敗後に當りて諸兄の熱誠なる應援を感謝するのみ。

秋期庭球例會記事

十月二十六日より四日間秋期庭球例會が催され

- 15 速水 加納 不戰勝者

四年

- 1 瀧本 二ー一 中江
- 2 青木 一ー二 澤田
- 3 高木 二ー〇 目方
- 4 高山 〇ー二 西川
- 5 大澤 〇ー二 大橋
- 6 難波 二ー〇 上田
- 7 牧野 二ー一 桐畑
- 8 高橋 〇ー二 藤宮
- 9 石島 二ー〇 中居
- 10 湯本 一ー二 小泉
- 11 新井 一ー二 大橋
- 12 富江 〇ー二 山田
- 13 安井 二ー一 垣見
- 14 伏木 二ー〇 藤本
- 15 川添 二ー〇 森純 (力)

三年

- 1 伊藤 二ー〇 竹中
- 2 原田 〇ー二 成宮
- 3 久保 〇ー二 西依
- 4 佐々木 〇ー二 辻郷

雜 葉

ました秋晴の高い空廣い運動場で軽くラケットに打たる、球の響なんと好い對照であつたでしよう。

二百人餘りもあつた應募者が各々獨特の妙技を揮つて下さつたので會は異常の盛況を示しました當時の速記録から勝敗を示します。

第一回戰

- 1 山澤 二ー一 吉田
- 2 藤野 二ー〇 八田
- 3 吉村 二ー〇 東野
- 4 野口 〇ー二 池田
- 5 西村 二ー二 居川
- 6 藤澤 一ー二 大橋
- 7 三橋 二ー〇 杉本
- 8 山崎 二ー〇 辻忠
- 9 漢見 二ー二 宮内
- 10 花房 二ー〇 伊吹
- 11 川那邊 〇ー二 上田
- 12 三和 二ー〇 岩根
- 13 猪田 二ー〇 瀧口
- 14 辻正 二ー〇 下村

二年

- 1 野口 〇ー二 瀧方
- 2 宮川 一 不戰勝者
- 3 中田 二ー〇 門野
- 4 草野 一ー二 渡邊
- 5 松尾 一ー二 小川
- 6 寺村 二ー〇 西野
- 7 關谷 〇ー二 木村
- 8 藤井 二ー〇 岩崎
- 9 中川 二ー〇 藤本
- 10 藤本 一ー二 坂井
- 11 青木 二ー一 井上
- 12 橋本 一 不戰勝者
- 1 堀川 二ー一 島津
- 2 大西 二ー〇 北川
- 3 小島 二ー一 赤井
- 4 吉川 一 不戰勝者
- 5 野瀨 二ー〇 吉岡
- 6 村上 一ー二 望田
- 7 堤 二ー〇 小梶
- 8 野寺 〇ー二 杉本
- 9 竹原 二ー〇 山本
- 10 疋谷 一ー二 村上
- 11 朝比奈 林 不戰勝者

三年
 1 藤本 〇—二 塚本
 2 田中 〇—二 西川
 3 青木 二—一 脇坂
 4 近藤 二—一 村田
 5 西澤 二—一 有本

五年

第二回戰

1 山澤 二—一 居川
 2 速水 二—二 幸嶋
 3 藤野 二—一 大橋
 4 松居 〇—一 不戰勝
 5 平川 二—一 池田
 6 三橋 二—一 漢見
 7 猪田 二—一 三和
 8 上田 〇—一 不戰勝

四年

1 北川 二—二 高木
 2 山田 二—一 小泉
 3 松井 二—一 大橋
 4 藤澤 〇—一 堀野
 5 安居 二—一 川添
 6 藤宮 二—一 夏川
 7 伏木 〇—一 不戰勝
 8 藤村 二—一 大橋

三年
 1 伊藤 二—一 大橋
 2 柘植 〇—二 澤依
 3 成宮 二—一 瀧方
 4 朝比奈 〇—二 辻郷
 5 竹原 二—一 杉本

二年

1 小島 二—二 中田
 2 渡邊 二—一 小川
 3 藤井 二—二 木村
 4 橋村 〇—三 阪尾
 5 西村 二—一 青木
 6 中川 〇—一 不戰勝

一年

1 西澤 二—一 近藤
 2 堀川 二—一 大西
 3 塚本 〇—二 藤村
 4 服部 二—一 細江

五年 第三回戰

1 山澤 二—一 藤野
 2 幸嶋 〇—二 辻(忠)居
 3 西川 〇—二 吉田

四年

1 高木 〇—二 山田
 2 堀口 二—二 前川
 3 石島 〇—二 野村
 4 牧野 二—一 西川
 5 澤田 二—一 安居
 6 野瀬 二—一 藤宮
 7 猪田 〇—二 藤井
 8 三橋 〇—二 平川

三年

1 成宮 〇—二 伊藤
 2 澤 二—一 辻郷
 3 箕原 〇—二 竹原

二年

1 中田 二—二 渡邊
 2 中川 二—一 木村
 3 坂井 二—一 西村
 4 圓城 二—一 藤谷

一年

1 西澤 二—一 堀川
 2 藤村 〇—一 不戰勝
 3 青木 二—一 服部

五年 第四回戰

1 松居 〇—二 藤野
 2 上田 二—一 平川
 3 辻(正) 〇—二 奧田
 4 藤井 二—一 山崎

四年

1 山田 〇—二 伏木
 2 澤田 二—一 前川
 3 野村 〇—二 野瀬
 4 松居 二—一 西川
 5 伏木 二—一 松居
 6 澤田 二—一 澤田

三年

1 竹原 〇—二 伊藤
 2 澤 二—一 不戰勝
 3 伊藤 二—一 西澤
 4 西依 〇—一 不戰勝

二年

1 渡邊 〇—二 中川
 2 阪井 二—一 不戰勝
 3 望田 〇—二 圓城
 4 古川 二—一 圓城

五年級

1 藤井 〇—三 藤野
 2 伏木 二—三 伊藤
 3 上田 〇—三 奧田
 4 野瀬 二—一 小森

二、一年級

1 阪井 二—三 西澤
 2 吉川 二—一 青木

四、三年級

期成績により證認する事に決せり。

同年五月當時選手と寄宿舎生との試合をなし辛じて選手の勝ちに歸す、これ全然昔日の感なく漸く守成時代に入らんとするの徴候たり。

同年九月八商主催縣下大會に林、谷村の二氏、坂本佛中の大將を破り、最後の我が校大將中西平岩組八商の大將に當り能く戦ひしも遂に破らる。

同年十月第三高等學校主催の大會に出演し、東山中學を零敗せしめしも遂に京二中の爲め破られ、同月二十三日滋賀師範よりの挑戦に應じ、優退二組を残して大捷す、これ同年度に於ける勝利を得し始めにして終りなり。

同四十四年六月岐阜中學と本校々庭に於て試合し、大將組善戦し敵の大、副兩將を倒し、残る唯一の優退のため破らる。

同年六月十八日本校庭に於て縣下大會開催す。参加校及び當日の成績左の如し。

第一膳中、第二彦中、第三水農、第四坂本中、第五師範、第六八商、

當時當日豫定の時間九時に始め第三膳戦頃より

折柄の強風のため不慮の大敗を醸し恨を呑み歸途大垣中學に立寄り、我大將新庄、藤腹善戦よく努め敵の總軍を塵殺し凱歌を奏し旗幟を立て、悠々として引上ぐ。

越えて大正四年八月一日飯田中學校庭球場より長途遠征し來る、時に我中堅組坂東、久米組よく戦ひ優退せしも敵大將の爲め破らる。最後に於ける優退組の戦ひの時等の如きも敵將の悠々迫らざる態度と沈靜輕卒ならざる襟度とは何人も賞讃を博さざるを得ざりきとぞ。

同八月三十一日岡崎二中遠征來襲す。

同九月我が校に於て縣下大會を開催し當日の成績八商第一位我第二位……

大正五年!!

實に本年こそ我部の活動期に入らんとするの第一年なれ、即ち昨年より遠山部長の發議に因り、從來三四年の生徒中より優秀なる者を選手となせしを廢し斷然一年級より之を選び以つて基礎より選手の養成に努む、方針を取れり、故に今年も一年級より二組の選手を取る。

我が校の應援漸く猛烈なるものあり、即ち膳中生泣いて中止を申し出で漸く調停し會を閉づ、これによりて當時生徒の膳中に對視する競争心の強かりし一端を見るを得べし。

明治四十五年五月膳所中學主催縣下大會に出演せしも成績佳良なるもの僅かに一組に過ぎざりき。

翌大正二年五月廿九日我が部最初の試みたる地方小學校教師の庭球試合をなす。而して會する者十有餘人本校教諭との對抗試合を開けり、此日や天氣晴朗にして瑞氣滿溢たり。回の進行と共に愈々益々佳境より妙境に入り遂に名譽の月桂冠は小學校教師の手に歸せり。

大正三年五月新學期早々水口農林學校より五組の陣容を整へ遠征し來る。これ水口農林より遠征し來りし初めなり。

我之に應じ見事彼等を一撃のもとで蹴破りぬ。當日の光榮ある我大將組の働や見る可きものありき。

同年十月此の年掉尾の遠征をなし岐阜中學にて

同七月三十一日より向ふ一週間、早大選手寺内森の二氏を聘し、下級選手の基礎養成に努め並に第二學期の活躍原動力に資す。九月八日第二學期最初の小手験べとして米原長濱方面の俱樂部と試合をなし全勝し、來る可き岐阜大垣地方遠征を夢見て切齒扼腕選手の意氣天に冲せり。然るに恨む可く惡む可し、この絶好の遠征期を無意に終らしめんとは!!

之同方面に於ける惡疫流行のため校規の束縛により意遂行する能はざりしなり。

茲の如き周圍の事情によりて同年は辛き籠城主義を探り遠征に出づる事なく過ぎたり。

翌大正六年は昨年の籠城により鍛へし腕を世に示さんと選手の意氣旺盛にして四月新學期早々早大選手道盛氏の指導を受け猛練習に加ふるに猛練習を以つてし大いに其の技を磨けり。

然るに同五月八日八幡商業來る可き縣下大會に於ける我が手腕を探らんとして挑戦し來る。我之に應じ優退二組不戦一組を以つて大勝す。

同五月二十三日水口農林に開かる、縣下大會に

出演參加し當日我軍遠路車中の疲勞も無く殆ど全軍優勝戦に入りしも午後二時頃より細雨降り出しコート全く用に供する能はざるを以て次回の日曜に延期中止となれり。我軍三勝戦に勝ちたるもの二組、四勝戦に勝ちたるもの一組なりき。

同廿七日岐阜大垣遠征を試みしも選手多く對校マツチ最初の者のみにて敗れたり。而して技に劣れるに非ず氣後れせし者ならん。

同年六月生徒中より後援團を組織し以て選手激勵及び生徒の庭球思想の涵養に努む、即ち練習日を各日曜と定め各年級より一組づつを取ること、なす、此の如く本年は選手及び一般生徒中運動に熱心なるもの多く頼もしき傾向を示し來れり。

大正七年第一學期は平穩無事に終り、第二學期の準備として一週間炎熱焼燻するが如き夏、天下の霸王、早大選手三上、竹下の二氏のコーチを受け大いに其技の上達に孜々として努めたり。

時に九月初旬京都遠征を計劃せしも暴風雨の爲め再三成らず焦思して遂に止むなきに至る。曩者頻々として岐阜遠征は部史に見るも京都遠

征の部誌に現るは今年が初めなり、之によりて見るも我が部の隆盛に趣き、關西の猛者を網羅せる京津地方に遠征するも毫も遜色なく、彼等を一掃せんとするの熾熾たる意氣ありしを知るべし。大正七年十月嗚呼!!我が部に取りて何たる光輝ある榮煌ある且つ特筆大書以て記念す可き月ならずや。

麒麟兒猪田は名古屋第八高等學校主催東海聯合大會に出演し前年の優勝校愛知一中を一蹴し遂に數多き中にも群を抜き類を絶して優勝せり。

當日の戦況を示さんに第一回戦に於ては可成の苦心の跡歴然たり。然りと雖も猪田の熱球よく功を奏し遂に敵をして成す術なからしめたりき。即ち

第一回戦 岡崎師範二〇三彦根中學(猪田)

第二回戦 大垣中學一〇三彦根中學(地平)

第三回戦 岡崎中學〇〇三彦根中學

最優勝戦 愛知一中一〇三彦根中學

最後の愛知一中との優勝戦に於てはゲームは三對一なるも敵も當時運動と云へば直ちに愛知一中を思ひ起さしむる程の剛の者!! 敵軍防戦よく努

めジュースを重ねること數回なりしかど猪田の猛烈なる攻撃と且つ前衛地平の金城鐵壁然たる堅實なる守備力に敵し難く遂に涙を吞んで胃を脱げり。噫!!かくして名譽の優勝の二字は永に光榮ある選を受けて、金龜城頭が高く、輝灼として我が彦中を飾潤せり。當日我校出身の八高生仙波、石田、長尾、吉田の諸氏の招邀款待實に至らざるなく目出度く喝采の裡に凱歌を奏しつゝ引上げた

り。茲に謹んで先輩並に諸兄に謝意を表す。彦根停車場に折柄之を歓迎するもの無慮二百人、當時生徒間に如何に優勝にあこがれしかを見るべし。此の榮ある優勝を記念すべく同二十六日盛大なる祝勝庭球大會は本校庭に於て開催され會長春日校長以下職員及び全生徒出演しコート三ツを使用し近年蓋し稀に見る盛會なりき。出演者總數三百八十八にして當日各年級優勝者左の如し。

- 五年(藤井(登)島津) 四年(藤井(健)富田) 三年(今堀、鹿取) 二年(成宮、垣見) 一年(安藤、山田)

同十一月三日大阪高商主催庭球大會に藤澤白髭

出陣し第一回和歌山中學を破り次に八尾中學を全敗せしめ第三回に於て惜しくも中國の勇岡山師範に破られたり。此の如く我部の名譽日に月に盛にして各地方大會及び新聞社會等より續々として出演狀の多きを加ふ。

大正八年昨年の猪田組大將となり行く所敵なく恰も無人の境を行くが如し。

先づ新春早々膳中に六組を以つて遠征し、優退二組、不戦一組を以て大捷せしを、ふり出しとす尙ほ當日佛中と戦ふ可き筈なりしも佛中方言を左右にして敢て應せず空しく終りぬ。之蓋し我軍と膳中の午前の試合を見て遂過せしならん。

此に於てか我部は新に部歌を作製し、一般生徒も亦之に和し高唱するに至れり、而して選手は練習前に一同之を唱するを常とせり。

今左に部歌を記載せん。(ハドソン灣の譜)

一、金龜の御城を仰ぎつゝ、

鐵腕きたへし赤鬼の

彦中健兒の血はほどばしり

此處に立ちたるテニス團

二、金龜城下の関聲

天下の粹ぞと仰がれて

琵琶の湖上に秋月高く

輝く選手のそのいさは

同四月廿七日大垣中學より五組にて遠征し來る。即ち本校庭に於て之を受け優退二組、不戦一組を以て大勝す。

同五月十一日日本校々庭に於て縣下大會開催され天候や、險惡なりしを以つて二コートを使用し、豫期の如く我軍最初より優勢にして應援の熱極度に達し將に佳境に入らんとせし折、惡むべし、降雨の爲め中止のやむなきに至れり、時に後れる者僅に八商の三組と我校の五組のみ、他校（長濱農學、水口農林、膳所中學、滋賀師範、比叡山中學）は已に敗北して去れり、即ち八商と六月一日の再會を期して終りぬ。六月一日我校コートに於て八商と戦ひ武運拙なく恨を吞んで彼に月桂冠を與へぬ。

同二十五日神戸高等商業學校主催の全國優勝大會に出演し第一回到和歌山中學を破り、次に市岡

さを兼ね全校舉つて盛大なる祝勝庭球大會は新城山コートに於て開かれ之によりて我部大會は二回を數ふるに至れり。尙當日の各年級優勝者左の如し。

五年

同十月五日三高主催の大會に出演し第一回到京都三中を仆し第三回戦に於て神戸高商に於ける仇敵今宮のため再び敗北す。

十一月我部多年の懸案たる洛陽遠征を試み曩に四高に於ける怨敵京一商に再敗し、京二中とは敵人員不在の爲め中止し、平安に大勝す。然れども京一商との敗後選手一同、協力一致大いに鍊磨に努め來る可き新學期の大活動を私に期しつゝ、かくして活動の大正八年も終りを告げ多年我部の重鎮として輝灼たる好漢猪田白髭は部を去る事となり。噫獅子兒！永に祈れ、我部の益々多幸隆盛ならん事を。備考大正九年度部史は之を部報によりて知らるべし。噫此く光輝ある我が庭球部史を終るに當り、一の感想をも記する所なく此の稿を脱するは予の如何にも残念に感ずる次第なれども

中學に勝ちしも第三回到於て當日の優勝校今宮中學に破らる。

七月廿五日庭球界の檜舞臺たる濱寺大會に出演せしも場所慣せざる爲めか一回戦に岡山中學に破らる。而し庭球部創立以來、本大會に出席せし嚆矢とす。

八月一日北陸關西大會、四高の主催にて同校コートに開かるや之に参加し、初日高田中學を破り同二日北陸の剛者、金澤師範を三組共零敗せしめ優勝戦に入り、大いに意氣を擧ぐ。同三日本會の優勝校京一商と初優勝戦を行ひ彼に先んじ山本、伏木（中堅）優退せしも遂に敵大將戸羽市田のため惜しくも破らる。當日選手中病人ありしかば蓋し振はざりしならん。因に出演者左の如し。

猪田、白髭、伏木、園、押谷、地平、山本（補）
九月廿四日我部正選手五組奉公團に於ける縣下大會に出演し副將猪田伏木組優勝す之大正五年以來の立派なる成績にして、實に空前の事とす。

同廿九日縣下大會優勝祝賀大會と彦根町丹下氏の寄附により城山御殿跡に竣工したる新コート開

如何せん病魔の爲め且締切も過ぐるの故を以てこゝに一言諸君に謝す。 大急行押谷七郎記

敦賀商業對本校

（第一回）椋田竹中三振、川崎左翼飛球▽川上四球原田三振、原田四球杉森一飛山本一飛。

（第二回）下村大橋三振原四球に出で二壘盜奪に刺さる▽魚野二越安打木下遊撃に安打し石倉三振後木下二壘を盗む時魚野生還澤田三遊間安打川上右飛に止む。

（第三回）前川三振、若林中堅安打し松本三振、後盜みしが計られて刺さる▽原田投匍原田三匍杉森三振。

（第四回）椋田一壘失に二壘を奪ひ竹中の投匍後盜壘し川崎四球に盜壘、下村犠打して椋田川崎生還、大橋三振に殪る▽山本四球魚野右飛山本盜壘に刺され木下四球に出でしも石倉二匍。

（第五回）原三振、前川三匍、若林中堅安打に出でしも盜壘成らず▽澤田三振、川上投匍、原田凡退す。

（第六回）松本三振椋田三振竹中投匍▽原田四球

を制し盗まんとして殺され、杉森投捕失に出で盗み山本の安打に還り、魚野死球木下投捕に山本生還、石倉遊捕。

(第七回) 川崎三失に盗壘せしも下村遊捕大橋遊飛に空し▽澤田遊捕川上遊捕原田三振。

(第八回) 原、前川、若林三振▽原田二遊間安打し二壘にさゝる杉森三失山本遊失に出でしも魚野木下投捕に退く。

(第九回) 松本三振椋三捕失に出で盗壘して刺され弁中三振萬事休し四A對三の接戦に破る。嗚呼無念!!

打數廿八	上弟兄森本野下倉田田中崎村橋	川林本	打數廿六
安打	三川原原杉山魚木石澤	椋竹川下大原前若松	安打
三振	五球審弁中氏壘審村井氏	三壘打山本	三振十四
犠打	遊一投捕中三二左右	捕左投遊一三二右中	犠打
四死球五			四死球二

岐阜師範と戦ふ

時は正にウラ暑い五月三十日、日曜を幸ひ岐阜に向つて遠征の途に上つた岐阜師範の校庭に於て戦ふ事になつた岐中とも戦はんとせんが都合に依り試合はす去る日の庭球部の怨晴さんとの勢は淡

業生の野次團はブン／＼怒り出した。

(第三回)表 川崎の空打して退き大橋ゴフライに死し原三振して交代(得点〇)。裏 松永三ゴロに死す、青谷死球を得、山本の三ゴロの安打に三ゴロに進む坂井三ゴロに満塁となり野次團一しきり騒ぎ出す、林ゴロにせしも青谷の投球に觸れて花と散る満塁なるに哀れや堀口のゴフライを取られて残壘(得点〇)。

(第四回)表 前川三振若林續いて三振し清水の三ゴロの軟打に死して止む(得点〇)。裏 加藤小野相並んで三振武藤四球松永死球に出でたるも青谷の三振に退く(得点〇)。

(第五回)表 松本三振椋田三ゴロフライ失に生き三ゴロを盗みしも竹中川崎の三振に止む(得点〇)。裏 山本三振坂井三ゴロに倒れ林の三振に休す(得点〇)。

(第六回)表 大橋ゴロして三ゴロに死し原三ゴロフライのカーブして安打となり三ゴロに至る前川續三ゴロに出でたるも三ゴロ手よく之を取りて三ゴロに送りダブルブレイとなりて交代(得点〇)。裏 堀

ら曇りの好野球天氣の午前十一時十分戦の火蓋は強く切つて放された戦況の概略を記さん我軍先攻。

(第一回)表 劈頭椋田脆く三振して倒れたるに發憤し竹中三ゴロ間に安打して難なく三ゴロを踏む續いて強打者川崎の三ゴロの熱球には三ゴロの手之を損じ三ゴロに送りしも遅し、大橋の三ゴロフライ失に生き満塁となる原のバンドに竹中生還、原生きてまた満塁折柄捕手の逸球に川崎生還前川のバンドに大橋生還して前川残る原本壘を盗まんと焦りて投手に刺され若林の三振に交代(得点三)。裏、我選手元氣旺盛各位置を蟻も通さぬ守り方山本投手の軟球せしを得たり三ゴロに三ゴロに散り坂井ゴロフライに倒れ林三ゴロに續いて死す(得点〇)。

(第二回)表 敵目覺めたるにや清水ゴロに退き、松本四球を得たるも椋田竹中の三振に残壘(得点〇)。裏 堀口ゴロに三ゴロに出でたるも三ゴロに倒る加藤四球を得て三ゴロを踏みしも小野武藤の凡打に止む(得点〇)観覽席に商人風の男、大聲を擧げて「昨年大垣の恥を忘れたか」と野次られて岐師卒

口ゴロフライに死す、加藤ゴロ失に生き投手の暴球を三ゴロ失して三ゴロに進み三ゴロを盗壘す、小野三振して後武藤の三ゴロフライオーバに加藤漸く生還して一點を擧ぐれど松永の三振に武藤残壘(得点一)。

(第七回)表 若林三ゴロに出で三ゴロに倒れ清水三ゴロ失に生き三ゴロを得たるも松本ゴロフライを三ゴロに送られて死す(得点〇)。裏 青谷三振、山本強打したるも三ゴロに送られて死し坂井ゴロして凡退(得点〇)。

(第八回)表 椋田三振して退き竹中三ゴロフライに倒れ川崎の三振に無爲(得点〇)。裏 林ゴロに死し堀口加藤續いて同じく凡打して退く(得点〇)。

(第九回)最後の戦いで兩軍共に非常に緊張して來た然し共に無爲であつたのは残念なり。表 大橋足下に打落して三ゴロに消ゆ、原三振し前川死球に出でたるも若林の三ゴロにて三ゴロに花と散り此處に戦途は盡きぬ、裏小野ゴロ失に出で其の焦球の逸して三ゴロに至る武藤松永三振し青谷四球に立ちしも山本の三ゴロに之又三ゴロに朝の露と消え去

つて日比の犠打等に依つて生還日比斃れ後藤四球に出でもIIBに刺されて終る(得点五) 投手棕田の妙なモーションは期待せし観衆にラーフィンストックを深く與へた試合はドロンゲームとす。(十二對一)

當日のメンバーは左の如し。

愛知一中	間宅	大岩	日藤	置山	下尾	杉山
CF	RF	SS	P	C	IB	IIIB
						LF
本 校	棕田	松川	竹原	前大	清水	若林
	CF	P	RF	SS	IIIB	IB
						RF
						CF
						C

午後二時半より同校庭に於て明倫中學と戦ふ本校先攻。

(第一回)表 棕田ゴロ一壘失に生きをIIBを盗らんとし捕手の送球に斃る松本三振竹中ゴロに死(得点〇)裏 此の時投手川崎は病氣にて出場せず牛田ゴロフライに死す小笠原四球に出でたるも投手の牽制球に觸れて一壘に退く菅ゴロフライに止む(得点〇)

(第二回)表 前川IIBグラウンダーして其の暴球

(第四回)表 竹中前川軟打して去り原四球に出で二壘を盗まんとして死す(得点〇)裏菅安藤加賀凡退(得点〇)

(第五回)表大橋IIBゴロに清水の三振に若林の凡打に交代(得点〇)裏松山IIBゴロに死し佐藤三振永坂ゴロ失に生安藤IIBを取り若山のPゴロに生還、牛田IIBゴロ失にIIB出でIIB取らんとし投手の送球を二壘手逸したるとP手の失に若林牛田共に生還小笠原四球したると菅のPフライに止む(得点三)

(第六回)表川崎IIB間ライナヒットしたると棕田のフライと松本のバンド失と竹中のPフライに斃る(得点〇)裏安藤三振加賀Pライナヒットして松山の犠打に生還し松山生きてIIBを取り佐藤のPゴロにIIBを得捕手の逸球に生還せしも永坂四球を取りて二壘に進まんとし捕手の送球に斃る(得点二)

(第七回)表前川ゴロ失に生きIIBを取り若林ゴロの球がIIBに逸したるに生還其の間原四球してIIB IIBを得たりしも清水の打球にて投手に殺さる 若林Pフライにて清水スタンディング(得

に二壘に至りIIBを盗り本壘に入らんと焦りて挾撃せられ本壘に刺さる原バンドに生きIIBを取りてIIBを盗まんとし挾撃せられ三壘手に斃さる大橋三振して交代(得点〇)裏 安藤四球に出で後継打者に依つて生還加賀バンドに生き松山のバンドにIIBを得IIBを得んとし捕手に刺さる松山牽制球のパスにIIBを得IIBを取りて佐藤のPゴロの球にてIIBに刺さる、佐藤永坂の四球に送られ若山の犠打に三壘に進み牛田の四球に送られて生還せしも小笠原の凡打に止む(得点二)

(第三回)表 清水四球に出でたるも若林のIIBゴロにフォースアウトさを若林P手の暴球にIIBを得三宅のヒットに三壘に進み牽制球の逸に生還、棕田四球を得たるも松本の三振に交代(得点一)裏川崎投手に交代菅四球を得IIBに進みをIIB盗む、折柄加藤のゴロ失に生還其の間安藤四球に出でたるも本壘を盗まんとし刺さる、松山四球に生きて永坂三振し若林のゴロ失とIIB手の逸球に加賀松山生還牛田四球に小笠原Pフライ失に出でたるも佐藤本壘に死して終る(得点三)

点一)裏若林IIBバンド失して捕手の暴球にIIBを得三壘を盗る進んで本壘を取らんとしIIBよりの送球に斃る牛田PゴロIIBに去り小笠原バンドに生きたると菅のIIBフライに止む(得点〇)

(第八回)表川崎三振棕田四球に出で松本バンドして死し竹中のIIBバンドに棕田生還、前川IIBゴロ失に生き原四球したると大橋の三振に止む(得点二)裏 安藤IIBゴロの一壘手失に残れるもIIBに散る加賀Pフライに松山Pフライに交代(得点〇)

(第九回)表 清水四球に出で若林のゴロ失にIIBを得たるも川崎のPフライを取られてダブルプレーとなる棕田三振して萬事此處に休す、時正に四時五十分(得点〇)A

左に其の戦績を記さん。メンバー

明倫中學	牛小	菅安	加松	佐永	若
	田原	藤賀	山藤	坂山	
	SS	CF	IB	C	P
					RF
					IB
					IIIB
					LF
本 校	棕松	竹前	原大	清水	若林
	田本	中川	橋水	林若	川三
	CF	LF	P	SS	IIIB
					IB
					RF
					C
					SS
					IB

明中	打	數	點	安	打	機	打	盜	壘	三	振	四	死	球
本	校	二	八	一	〇	六	四	二	三	五	三	一	〇	
		二	四	二	二	二	三	七	六					

今回中京遠征は應援團諸兄には多大なる期待を持つて居られたにも拘はらず其れを水泡に歸せしめたるは謝すに其の言葉を知らず唯々部員一同涙を流して謝すのみ、また前日は遠路わざ／＼大垣迄應援下されし諸兄には熱誠なる愛部心の迷りと深く／＼感謝して已まざる次第なり(〇〇生)

京津大會參加之記

京津大會の第一日第四回勝中と戦ふ事は數日前に解つた早くから先輩の諸兄に大なる期待を以て迎へられた、愈々七月二十八日は來れり此の日午後四時十三分球審小林壘審和田の兩氏の審判の下に本校先攻にて忽ち戦端は開かれた。

(第一回)表 椋田三振に竹中三B甸に退き川崎cFフライは敵の手に取られて交代。裏 左投手横田BIBを抜いて悠々一壘を獲得しBを盗み捕手のハンブルに三壘を得たるも牽制球にて刺さる本城cFフライに近藤の凡打に止む(兩軍無爲)

刺さる。兩軍〇)

(第五回)表 若林三振清水凡退藤宮ヒットして一塁IBを得んとして死す裏望月四球し青木の四球に進み横田の凡打に生還青木IBに横田IBに刺され本城cFゴロして捕手の失にIBを得IBを盗みたるも近藤のcFフライに止む。(得點一一)

(第六回)表 椋田三振竹中四球に出で川崎のcFフライにIBを得IBを盗まんとして捕手の送球斃る大橋凡退裏饗庭IBゴロ失に生きIBを盗み投手ポークにIBを得坂口IBcFに出でIBを得、北村捕手フライに退き松原三振す望月cFゴロ失に饗庭坂口牛還青木四球せしも横田のcFフライに止む。(〇一一)此頃觀衆の罵る聲はいたく聞え中に次第に歸る者さへ見え出した。

(第七回)表 哀れや前川の三振と若林の三振は原のヒットも功なく焦りてIBを得んとして斃れ此處に休す、裏本城cFオーバは三壘打となり近藤のヒットに生還IB牽制球は逸してIBを得たるも饗庭のIBcFに死す饗庭捕手の暴球にIBに生坂口cFゴロのIB失して生還し規定に依りコール

(第二回)表 大橋凡退前川IBゴロ失に出で原のcFフライ安打にIBを得若林の死球にIBに送られ清水の機打に生還せしも原IBより本壘を盗まんとして挾撃せられイレガリブレーとなつて交代裏饗庭三振したるは遺憾なり捕手の失策に生けり、IBを盗み坂口のcFゴロの死に生還北村BIBゴロヒットに出でIBIBを易く得て本壘をも續いて盗る松原四球して之れまた易々と無人の境を行くが如く生還望月また／＼四球に出で同じくIBを得んとして挾撃せられて死す、青木IBcFヒットに出で挾撃を失に免れIBにまた挾撃せられcF手に依つて刺殺さる。(得點一一三)

(第三回)表 藤宮四球に出でIBに急ぎて死し椋田竹中の三振に早くも交代裏 横田本城の死後近藤ヒットして捕手のミスにIB又IBを得たるも饗庭の三振に止む。(得點〇)

(第四回)表 川崎死球に出でIBにcF手の失に生きた大橋のIBゴロの死にIBを得たるも前川原の三振に無爲裏坂口ヒットして北村cFライナに死し松原三振す坂口其後IBを得んとして捕手の送球に

ドゲームとさる。我が選手一同及部員は涙の出づるを知らず。(得點〇一一)

當時のメンバー成績は左に

得點表		勝中		勝中		勝中	
回数	本	回数	本	回数	本	回数	本
1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8
1 : 8		1 : 8		1 : 8		1 : 8	

中 産		中 膳	
打	安	打	安
得	打	得	打
點	點	點	點
數	數	數	數
0	0	0	0
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
4 9 0 0 4 1 1 2		2 2 8 6 0 8 4 5	

當日應援團諸兄及先輩諸兄の熱烈なる聲援は骨隨に徹し申候唯々感謝するに餘り有之候敗因に就

いては改めて申すまでも有之まじく候はん前記事
を御精讀ありて部員選手一同御叱咤被下候は、難
有謹んで御受け仕る次第に御座候 敬白

(〇〇生)

八幡商業と戦ふ

前夜の夕立は裏切られて期待された上天氣とな
つた。敗れちやならない怨敵八商軍だ挑戦の元氣
で八商軍は我がグラウンドに現れた我が軍も應援
團の激勵に敗げんぞ是非勝つと球審竹中、壘審村
井の許に午後二時半より兩虎が戦ふやうになつた
體育俱樂部大會前と土曜日の故稀なる應援團に圍
まれて嗚呼英雄が——にグラウンドは緊張した八
商先攻。

(第一回)表 澁谷右翼飛球をまどはし二壘打と
なし神野のバンドに生き盜壘して二三に據る時福
島遊匍に澁谷生還辻の投匍に神野歸り長谷川遊匍
(裏)川崎もろくもたほれ竹中外野に大飛球を揚げ
しも中堅手危くも握る、下村左翼安打に出で牧野
撰球四球を得しも大橋三振に終る。
(第二回)表 中野左翼失に三壘打となり村上の

川三振に無爲。

(第七回)表 中野中堅安打に出で村上の三匍に
送られしも辻投手バンドに死し走者三壘にありし
も勝見の遊匍、裏清水原共にあはれ三振し河崎の
右翼フライに無爲。

(第八回)表 澁谷右翼安打に出で二壘を盗み神
野三振し福島三壘右安打に出でし時俄然辻三越安
打して澁谷生還し長谷川二匍して我軍愁眉を開く
(裏)竹中三左安打し直ちに盜壘下村三振せし時猛
然三壘を盗む長谷川三壘に高投して球は觀覽席に
入り悠々本壘に向ひたるに勝見左翼手球を捕手に
送りタツチンアフトセーフの暴聲盛んなりしも球
審セーフを宣し八商方自心なきが憤氣し棄權して
歸り九對〇を以て勝つ。
メンバー左の如し

本校	川竹中野橋林川水原	IF	PF	SS	cF	IB	C	IB	RF	IBB
	壘審 村井氏									
	球審 竹中氏									
	三壘打 中野									
	二壘打 澁谷									

遊匍に歸し辻頑張りしも三振し勝見中飛失に生き
しが澁谷三振(裏)若林遊匍に殞れ前川四球に出で
しも清水の遊匍に封殺原死球に出でしも川崎無
爲。

(第三回)表 神野遊匍福島死球辻中飛失長谷川
三振後中野三越安打に二死滿壘なりしも村上遊匍
裏竹中遊匍下村三匍牧野三振に止む。

(第四回)表 辻三振勝見左壘安打澁谷左直失に
出でしも神野遊匍福島投匍(裏)大橋遊匍に一壘に
消え若林三匍暴投に二壘を占めしも盜壘に刺され
前川三振に未だ機至らず。

(第五回)表 辻四球長谷川一飛中野遊匍に辻封
殺中野二三壘を連盜して村上の遊匍に生還せしが
辻右翼飛球(裏)清水四球に出でしが原の遊匍に封
殺河崎四球に盜壘し竹中のバンドに原生還し下村
の三振に終る。

(第六回)表 勝見三振に殞れ澁谷四球に出でし
が神野投匍後福島三壘安打辻四球に出でしも長谷
川三振し我軍危機を脱す(裏)牧野三匍に惜しくも
一壘に花と散り大橋投匍に若林三失に出でしも前

八商	谷野	神島	福辻	長谷	中野	村上	辻勝
	cF	IB	IB	P	G	SS	IBB
							F
							RF
本校	二五	二	九	二	四	五	一〇
八商	三六	四	零	九	四	五	六

敦賀商業對本校

北陸の豪雄敦賀商業と廣々茫々たる敦賀練兵場
にて戦ふ我軍先攻。

(第一回)表 竹中脆くも三振し原三匍川崎三振
裏川上四球に出るや否盜みて二壘に進みしも澤田
三振杉森投飛川上三盜して刺れて終る。

(第二回)表 下村牧野相並んで空振した、適應援團
及投手は元氣づいた見るや大橋遊撃に直球を飛ば
せしもうまく捕ふ(裏)牧野奮然として投手板に立
ち原田山本を凡打に終はらし魚野を三振せしむ。

(第三回)表 前川三振清水一匍若林遊に終る(裏)木
下脆くも三振石倉續きて三振原田三振なして捕手
の失に出で盜壘せしも川上二壘に直飛してやむ。

(第四回)表 竹中四球に出で原投匍失に出で川崎左

翼三壘打によりて竹中原生還、下村牧野死後大橋左中間二壘打に川崎生還、大橋三盗なして刺さる(裏)澤田二失に出で盗壘なし杉森中飛ばせしも原田三振山本左飛にやむ。

(第五回)前川清水三匍若林三振(裏)魚野中飛木下一匍石倉二直に終る。

(第六回)竹中三匍原三失に出でしも川崎下村三振。(裏)原田中飛川上左中間二壘打澤田又二失に川上生還杉森右翼安打に澤田生還杉森二壘を盗まんとせしが○の好投に刺されたり此の時壘審アウト球審セーフを唱へしより紛擾起りおさまらず我が軍不公平を憤り已むなく棄權して歸彦せり。

敦 商	川澤杉原(兄)山魚木石原(弟)	上田森田本野下倉田	遊右捕一中三二左投
本 校	竹原川下牧大前清若	中崎村野橋川水林	左三中遊技一二右捕
敦 校	打撃數	得點	安打
本 校	二二	二二	二二
	二二	三	二二
			一
			一
			三
			振
			六
			七

彦根體育俱樂部主催岐滋聯合野球大會
 京津大會後晝夜猛練習に猛練習を重ね校友會諸君先輩諸兄の喜顔に報ひんと死なばかりに練習をなした時は來たりけり、九月廿三日絶好の野球天氣だ本校校庭の賑やかさあ野球でなくちやこれだけは賑はしくないでしやう應援團は日々準備に忙はしく萬般の整理をして今年こそわ旗を取つてくれと泣かんばかりに激勵さる選手は立つても座はつても居られない必勝を神に祈つて居つた意氣天に冲する程だつた。

戦はんかな時は來ぬ第一回戦は恨み深き水上界の覇者滋師だ選手はこれからだど定刻を待ち居るにも滋師現はれず一方應援團はこれからだど待ち遠しく思ひしに滋師も赤鬼と聞いてか金棒無くてか遂に棄權した満場に意外の驚きをあたへた。

愈衆人渴仰の優勝戦は本縣の龍攘虎搏の大活劇は恨適八商軍と相見ゆることになつたいざ名譽の月桂冠はいづれにか山の如き観客は此の試合こそ見落すまじと十重廿重に人垣を築き場内いやが上

に緊張した兩軍の應援隊は殺氣立つて一壘側と三壘側に別れ口も破れんばかりに熱誠なる應援をさる突然小一高對三高戦の如く選手は必勝と敗けては恥だと戦は終初熱球的昂奮を以つて球審三高選手山根壘審京大生内藤兩氏のもとに一時半より火蓋は開かれた、然し勝負には一寸とも拘泥しない所は一高と三高の如く思はれて堪らない。

(第一回)本校先攻下村バットを固く握つてポツクスに入るすると我が應援團は戦かはんから時來たれりと云ふ、敵軍八商の應援は成算我にしかどありと互に頑張る見るや下村外野に大飛球をあげしに外野手うまく捕ふ竹中遊匍に二死となり川崎憤然と起ち得意の猛打を振りしや左翼越二壘打を打ちしも牧野中堅飛球に無爲となる(裏)中野三振澁谷遊匍長谷川三振を潔す。

(第二回)先鋒大橋二壘打をはなち若林投手を失せしめ二三壘を陥しる時前川バンドに大橋最初の生還をなす、清水四球を制し盗壘し又もや二三壘に好機を作る時原巧くバンドして若林生還下村三振に終る(裏)中野先づ二壘越安打に投手牽制暴投

に二壘に進み辻の投匍後三壘を盗み福島の一匍大橋本壘に悪投して生還をあたへ福島二壘に達せしも村上投匍勝長三振に殘壘この時我が應援團は大鼓を打鳴らして痛快ドン／＼とやると敵は日の丸の扇を揚げて互に喜ぶ。

(第三回)竹中左翼にライナーを飛ばせしも捕らはれ川崎三振後牧野三壘安打せしも大橋一匍に止む(裏)辻二壘後の安打に出で神野三振後盗壘せしが澁谷遊匍長谷川三壘に立往生。

(第四回)若林遊匍前川三振清水三匍に振はず(裏)中野遊匍失に出で辻の三振後盗壘して殺され福島投失村上二越安打に好望なりしも勝見振はず投匍に空し。

(第五回)原遊匍下村三匍竹中左翼飛球、裏辻左飛神野澁谷三振す、層を重ねることに白熱的になりぬ。

(第六回)川崎遊失に出でしも牧野一匍に併殺さる、大橋中堅安打し得點を期待せしも若林前川内野凡打に空し、裏長谷川四球を選び盗壘成りしも中野一匍辻匍福島三振して止む。

(第七回) 清水原三振せし故我がベンチは憂色におはれた、然し下村四球に出で二、三壘を連盗してチャンスと見し時竹中三壘に猛打して一壘に向つて死力を盡してスチールした、その巧みさ驚くべきや壘審球セーフを宣す、すると下村生還す我がベンチは活氣横溢す猛打者喜面をおびバツタを持つて立つたかと思へば中堅に大飛球を飛ばして三壘打と待ちしが澁谷外野の花形好捕す(裏)村上二失勝見投捕に死せし時村上二三壘間に狭殺され辻四球を利せしも神野遊飛して止む。

(第八回) 八商軍は得點を競ひせきたつ妖雲暗澹として八商ベンチを罩めて光景悲絶を極む辻投手奮然として頑張る牧野遊捕大橋遊撃失に出でしも若林外飛二死となりしも前川清水の選球に満壘となり好機を逸すまじと原切齒して三壘上を抜く絶好のヒットと思ひしも運なく球はカプーしてフアウルラインより二、三寸のところ落ちてツイウストライク三ボールとなりし時投手辻今こそはと妙技を盡して三振さす原悄然としてバットを引づも歸へるさま誠に可愛想だ。(裏) 八商軍牧野

ツプで三振さす前川左翼失に出で清水の遊捕に封殺されて二死となる、原最後のボールまで待ちしが辻驚くばかりのインドロップを出して又もや原を三振に終らす。(裏)澁谷遊捕長谷川二失に出で盗壘中野四球辻右翼安打に一死満壘に殺氣漲る福島バンドを失せしも二振後再度のバンドを敢行して長谷川入壘して決勝の一點をしむるどグラウンドに涙と共に斃る選手を同情に厚き應援團はあゝ天下は一人の天下にあらずと雖も人事を盡して天命を待つは吾人の採らざる處なりと涙の内から湧れた聲で選手を圍んで團長東野君が云ふと原主將は泣くばかりで濟みませんと云ふ聲が涙でさへざられて出てこない、いかにして諸君に報いやうやらと泣いて斃れてしまふ金龜城下は彼方よりよせきたる妖雲にとざされて空吹く風の音いと淋しく雑然裡に夜の幕は次第々と垂れて行くおつとして居れないから死體同様の選手は應援團の方々に負はれて道場にかつこまれて泣きふすぶ突然道場は雷の如く選手は死體の如くになつてしまつた中には氣絶してしまふし選手の哀れさよ、遂に期

の球になれたるにや澁谷長谷川安打し中野の投捕に神野三壘に死し辻三壘飛球に本軍愁眉を開くものありしも福島タイムリーを飛ばす長谷川生還川崎本壘に好投せしも若林此を逸し中野生還す、適軍應援今迄はもう駄目と涙にくすばりしがこの時は躍り立つて喜ぶ村上遊捕に死せしも雀躍して守につく。

(第九回) 我が軍憤激やる方なく最後の自重をなす、應援團からはラツキーセブン、ラツキーセブンと渴らした聲で熱誠なる應援をさる、中には泣いてまでもどなつて居る一番打者からだ然し先攻はこうなると一寸心配だ然し下村竹中自重に自重して四球を選びしも川崎三振牧野左翼飛球大橋遊飛に無爲となる。(裏)牧野投手腕が折れるまでもと奮ひしや勝負見投捕辻神野三振に退く愈々試合は緊張の度を増したが補回にうつるとすると両方の應援は必死となつて勝つて呉れとせきたつ選手や死んでもと憂飛ばして是非得點をとバットを固く握りすぎることか凡打や三振が大い若林最後まで球を選びしも辻元氣ついてか得意のインドロ

待された大會も悲劇と化した。然し當日の戦は終始緊張の度をどほりこし悲壯を極めた今迄に見た事の無い戦ひであつた。あゝ我が部の武運つたなきを大息すること多時を熱誠なる校友會員先輩諸兄にいかにして報ひやうか許して下さい是非明年は此の恩を返へす積りですから、末筆ながら應援團諸君に深く、厚く御禮申し上げます。

膳中遠征の記

本日下村選手病氣の爲不參伊藤補缺を代用竹中遊撃を伊藤左翼を守り攻撃に於ては實力を發揮して十分に打撃を振ひ悠々大勝し石山に凱歌を擧げ痛快の極みなりき而して伊藤出陣の爲記録十分ならず此に概略を記さん勝中先攻四回に二點五回に一點を占め本校一回に三點三回に一點四回に三點七八回に各一點宛計八點を得たり。

- 崎 中野橋水川藤林 田原城村藤木村條田
- 原 竹牧大清前伊若 豊松本北近青南西横
- 中三遊投一右二左捕 三四投捕左一右中遊

膳所中學と戦ふ

我軍は七月の京津大會に脆くも破れ今亦體育大會に於て八商に名譽ある月桂冠を奪はれ鬱憤遣る方なく膳中に挑戦状を飛ばし十月一日膳中遠征の途につく。膳中先攻

(第一回)表 阪口三遊間安打横田一匍し近藤のバンドに阪口還り近藤二盗に刺され饗庭投匍(裏)竹中遊撃安打捕手の牽制暴投に球は點々と轉がり右翼手逸して一學生還下村四球に出でしが計られて死し川崎四球二盗に刺され牧野投匍。

(第二回)表 北村左飛失に一壘に生き青木の匍後西村中堅越三壘打世森内野安打本城の投失阪口の遊匍に一擧三點を得しも横田四球近藤三振(裏)前川内野安打清水四球原の三匍に封殺大橋中堅安打に清水輕擧本壘に向ひて刺され竹中二匍に好機を逸す。

(第三回)表 饗庭遊匍北村三振青木の右飛に無爲(裏)下村四球河崎二匍に封殺を喫し牧野の中飛若林の二飛に無爲。

(第四回)表 西村世森三振本城遊失連盜して生

還阪口二匍(裏)前川三越安打清水二匍失に前川生還原左飛大橋三匍竹中三振に無爲。

(第五回)表 横田近藤共に四球に出で饗庭の捕飛後北村三振し青木の三匍失に横田還り西村三振す(裏)下村三振に殫れ川崎牧野中飛に終る。

(第六回)表 世森本城投匍坂口三匍失に出で盜壘捕手の高投に還り横田四球近藤三匍(裏)若林遊匍前川投飛後清水原四球を利せしも大橋二匍。

(第七回)表 北村長棍一振中堅越本壘打す青木投匍西村三振世森遊匍(裏)竹中左飛下村中飛川崎中堅飛球。

時に降雨至りて中止し七回迄のスコアーにて八對二我が軍大敗す。

口田 藤庭 村木 村森 城	盜球	四五
坂横 近響 北青 西世 本	安打	四五
中投 左二 捕三 一遊 右	打數	二五
中村 崎野 林川 水原 橋	安打	二四
竹下 川牧 若前 浩原 大	三振	二二
遊右 左投 捕二	盜球	二六

大正九年度野球部戦績

一 滋賀師範學校對本校	無勝	三回ゲーム
二 膳所中學校 對本校	十對八本校勝	八回ゲーム
三 敦賀商業學校對本校	三對二本校負	九回ゲーム
四 岐阜師範學校對本校	三對一本校勝	九回ゲーム
五 愛知第一中學對本校	十二對一本校負	五回ゲーム
六 明倫中學校 對本校	十對四本校負	九回ゲーム
七 膳所中學校 對本校	八對一本校負	七回ゲーム
八 八幡商業學校對本校	九對零本校勝	(來權)
九 敦賀商業學校對本校	九對零本校負	同
十 八幡商業學校對本校	四對三本校負	十回ゲーム
十一 膳所中學校 對本校	八對二本校勝	九回ゲーム
十二 膳所中學校 對本校	八對二本校負	七回ゲーム

此の内て技倆變り無く負けた試合は六十等で此等は實に運無きと云ふべく女神の作用したものである又敵に技倆が劣つてゐた場合でも五、七、十二等は點數の差は如何にも荒い實力はスコアーの示すよりも以上の接近したものである。而して我が軍の勝ち得たものは當然のものである要するにもう少し勝ち星を得たいものである。

四勝七敗一無勝負は本年の成績としては妥當であらう唯年來の仇敵大垣中學岐阜中學を屠る機無く過しあまつさへ恨ある八幡商業を加へた此に於て大正十年度差當り征すべきは此の三校で又膳中にも報ひなければならんよろしく十年度選手諸君よ奮勵努力一層の猛練習を重ねて恨みを雪ぎ我が球史を輝かせ給へ。(M生)

回顧すれば陽春花の候より晚秋霜の季まで風吹く夕も霜降る朝も炎天酷熱の日も、或はコーチャードとして或はマネージャーとして一意専心我部の爲多大の努力を賜はりつゝある藤谷先生を初めとし體育俱樂部の各位には陰に陽に選手一同を指導激勵せられ又一方には後援會の諸兄には財政上甚大の援助を賜はりし事並びにボール防禦網完成其の他種々の事業に一宮、大日方、竹中、宮村、文泉堂山田の諸氏より少なからざる援助を受けし事は誠に感謝の至りに堪へざる所なり。

斯く卒業生其の他各位の援助及び學校當局は勿論、或は秩序ある應援團を組織して熱誠なる聲援を以て激勵し我部隆盛の爲に又本校名譽發揚のた

めに盡力せられし校友六百の活動により今や單なる一部の事業にあらずして校全體の事業として愈々發展の機運に向ひつゝあるは選手部員一同の深く感激して止む能はざる所なり。

過る體育俱樂部の主催大會には無慘にも再び榮冠を逸し、洛陽に出でては不幸敗北の憂き目に會ひ、中京遠征には失敗し、斯く失敗に失敗を重ね只管卒業生諸彦及び校友諸君に謝しても尙餘りあるのみ。

茲に不肖選手一同は諸兄の御努力に報ひん爲、來るべき春季練習には身を捧げて専心練習に技を練りて以て好敵膳中の堅壘に突入し或は濃尾の強敵を撃破し、年來の宿敵八商を屠り、進んでは京津に榮冠を得て往時其の名を東海近畿に謳はれし光輝ある歴史を復し得ずんば止まざる覺悟なり。

希くは卒業生諸兄並びに校友六百の健兒よ、選手部員一同の意氣を諒とせられ倍舊の御指導と熱烈なる應援を賜ひ、以つて我部の隆盛を計らるゝと共に本校の名聲を揚げられん事を。

附言 我部野球技奨勵の爲めメダル原型を寄贈

一新せんと専ら努めたが、概して悲慘なローマンを留めたのみであつた。併し一方に於ては我部の礎は愈々硬まつて行つたのである。

而して幾多受けし耻辱を雪ぎ、面目を一掃し我雄霸を天下に呼號せんものと、臥薪嘗膽酷暑の日も嚴冬の日も練りに練つた鐵腕を證すべしと迎へたる大正九年も哀れや又無念の歴史の中に去つてしまつたのである。蓋し昨年は例になくマツチの数は十一の多き上つたが、是れを以て見ればその發展の程は窺はれると思ふ。然雖戰績は四勝七敗と云ふ未だ到底満足すべきでない事を示して居るのであるから、諸君の自覺が肝要である。

京津大會殊に秋の體育大會の敗辱は決して忘れて貰へる事である。思へば實に無念千萬な次第であつた。あれ程までに敵を威壓し、好機會を得ながらも、むざ／＼敵をして名を成さしめ、連年の宿志を拒止された事は、假令運の盡きとは申せ大耻辱である。而して其の敗因を熟考する必要がないと言へるであらうか。否か。予は有りと呼ぶ者である。

せられし先輩藤田孝四郎、廣野規矩三兩氏に謹んで謝意を表す。(東林生)

予の感想と選手諸君への希望
多事なりし我球部も色々な歴史を遺して又一歳を加へた。過ぎし我球界を顧みれば實に感無量である。今や去らんとするに當り諸君の爲に聊か述べて置きたいと思ふ。

久しく其名を上げざりし我球部も數年前より遽かに頭を上げて來た。毎年元氣な選手が出て球部を興し、我部の爲にと努力して來たので現今では漸くその存在を認められる様にまで進歩して來たのである。絶えて出演せなかつた京津にも參加し縣下は勿論、遠く岐阜愛知までも遠征し出し漸時隆盛の傾向を呈しつゝあるのである。

四年前京津大會に大敗したが、八商校庭に敵と干戒を交へて降らしめたのを始めに努めて我部名の發揚に勵み爾後幾年幾多の辛酸を嘗めて今日に及んだのである。其間或は二縣聯合大會に參加して二回までも優勝決戦を演じて失敗し、或は京津に覇を稱へんとして却つて破られ、從來の不振を

然るに如何にして伊吹より高く、琵琶の湖より深き恨みを晴らすべきか。諸君の各自自覺と奮勵とに依るべき事論を待たずともチーム全體をも考慮すべきものだと思ふ。一般に我部の弱點として狡猾の點に於て他より劣り、場馴れがないのと(昨年まで)粘り氣が足りないのと所謂あつかましくやると云ふ事に缺けてゐたと思ふ。

猶他に折角握つたグッドチャンスは決して逃がさぬ最も重大視して自重すると云ふ點に於て粘り氣が足らぬかとも思はれた。故に時々否殆んど優勝決戦の場合、ラツキーセブンの時によく長蛇を逸して大恥を蒙つた事があつたのである。諸君は各自の腕を磨き上げると共に、どうしても此點に注意して立派にチームワークをとり後悔のない様に努力して貰ひ度いと思ふのである。

噫！我球部に身を置いてより年を閱すれば茲に四指、其間別に大なる効もなく去るのは實に羞愧に堪へぬ次第であるけれ共矢張り球部選手は可愛い。球部は懐しい。どうかして勝てばいゝと去つた後でも必ず思ふだらう。思はぬ者は愛校心の無

い人間だから勿論然うである。

以前は東海の覇岐中を屠り、八商は脚下に敷き大いに我橋城下の健兒の氣焰を吐き腕を鳴らしたものだ。今や我仇を報すべき怨敵四方にあり。虎視眈々孰れも機をねらつて居るのである。是の如き愈々多事ならんとする時に當り去らむとする。我胸中感無量又敢て言ふべからずである。残念ある哉、八商を屠らで去るとは怨敵を破らず去るとはあゝ無念なる哉。

今や意味ある大正十年は弛緩せるナインの心を引緊め直す可く、果た年來の大宿望を見ん事晴らせよとばかりに到來して來たのだ。是の我球史を背に然も輝ける前途を前に控へたる青壯有爲頑健なる彦中球選手諸君よ、我部の興廢も又諸君が双肩に在るのだ。須く今年は猛省して飽くまで頑張つてくれ給へ新鋭怪投手牧野君を加へたる其の勢で獅子奮迅以て近縣は愚か近畿の霸王たらん事を期してくれ給へ。

毎年の先輩諸兄將た又吾人等の宿望鬱憤に酬ふべく從來の不振時代をして黄金時代に轉換せしめ給ふな。
最後の我部の隆盛と諸君の多幸健在を祈つて筆を擱く。
(一九二一年一月 R S 生)

陸上運動大會記録

大正九年十月三十一日 天長の佳節を卜して例年の如く陸上運動大會が開催された。天高秋肥の秋、絶好な運動日和であつた。競技出場者も多くあつたし、観覽者も場にみち／＼てゐた。今年は來賓席ばかりでなく父兄席をも東側と北側とに作られたのは幸甚の至りである。
ストツプ、ウオッチが二個のみであつたし、又その一個が不完全なので、大抵一、二着は計つたが三着は計れなかつた。二着のも計れなかつたのが出來た。

【午前之部】

第一回 二百米突

- 一着 細田 宗次 二十九秒
- 二着 木村平次郎 三十秒五四分
- 三着 橋本久二男

の爲に大發展を期して貰ひたいと希ふのである。此點は諸君殊に主將と成る人の充分熱慮努力を要する事だからよく自重して貰ひ度い。非常の現今主將たる原君に特に望む次第である。終りを慎む事始めの如くなれば必ず破る事なしの一言は諸君の決して忘れて貰へぬものである。服膺して貰ひたい。

其他言ひ度き事は海山と積れどそは茲に省き要之するに上下一致、野球の生命に逆はぬ様我野球部の名を辱しめない様一入の奮勵を望む次第である。

諸君よ察せよ、かくして胸に残る無念を抱へながらも止むなく去つて行くべき數多の吾人ある事を!!

敢て再び言ふ。群がる怨敵を天晴れ討滅ぼし盡して我彦中赤鬼健兒の眞の意氣手腕を天下に證せよと。

嗚呼 感憶無量奈何すべき乎

親愛の少壯球友諸君!!

美しく而して清く我彦中野球部史を汚してくれ

第二回 二百米突

- 一着 幸嶋 道介 二十五秒
- 二着 正村達次郎 二十六秒五分二
- 三着 成嶋 修

第三回 四百米突

- 一着 川添 桂藏 一分五分一
- 二着 西村英二郎 一分十秒
- 三着 橘 明德

第四回 四百米突

- 一着 押谷 七郎 二十四秒五分四
- 二着 新井 泰榮 二十五秒
- 三着 宮川 英二

第五回 二人三脚

- 一着 岩噲、林 四十秒
- 二着 谷、天方 四十三秒五分一
- 三着 淺岡、岩佐

第六回 二人三脚

- 一着 上野、中川 三十八秒五分二
- 二着 伊藤、前田 三十八秒五分四
- 三着 西村、廣田

第七回 六百米突

- 一着 吉田久次郎
- 二着 奥田勝之助
- 三着 安部 外雄

第八回 一分間

- 一着 小島 繁 約二周
- 二着 角田 清
- 三着 岩崎由太郎

第九回 一分間

- 一着 椋田真次郎 二周四分一
- 二着 磯崎 吟八 約五米許遅る
- 三着 安居恒三郎

第十回 二百米突

- 一着 川崎 捨雄 二十二秒二分一
- 二着 野寺 勇 二十四秒
- 三着 西澤藤次郎

第十一回 二百米突

- 一着 橋本 義雄 二十四秒五分一
- 二着 大崎彌太郎 二十七秒
- 三着 高橋富三郎

第十二回 二百米突

- 一着 西澤久一郎 二十二秒
- 二着 竹腰 昇 二十二秒五分四
- 三着 宮田徳太郎

第十三回 二百米突

- 一着 猪田 孝三 二十三秒五分一
- 二着 澤村 武雄 二十四秒
- 三着 桂卷 喜一

第十四回 戴囊

- 一着 赤田 盛夫 二十八秒五分一
- 二着 三原 秀雄 二十九秒
- 三着 近藤 徳三

エツチラ、オツチラ、頭の上に後生大事と頂いて走る姿の面白さ。

第十五回 戴囊

- 一着 吉田 諦成 二十六秒
- 二着 岩崎 廣一 二十七秒五分二
- 三着 辻 富三

第十六回 戴囊

- 一着 北川佐一郎 二十五秒五分一

第十七回 八百米突

- 一着 富田 義山 二十七秒五分三
- 二着 佐々木 馨
- 三着 木下 長保 二分二十四秒五分一

第十八回 一人一脚

- 一着 吉田久次郎 二分二十五秒五分三
- 二着 奥田勝之助
- 三着 岩崎 源三 五十一秒五分一

第十九回 一人一脚

- 一着 河口 源三 五十三秒五分三
- 二着 岩崎 源三
- 三着 供田 友嘉

第二十回 四百米突

- 一着 岩木 義男 四十五秒
- 二着 西村 省三 四十六秒
- 三着 村上巳代治

第二十一回 マラソン

- 一着 水谷 久威 一分二秒五分一
- 二着 桑原勘兵衛 一分三秒
- 三着 吉田孝三郎

この時「彦陽」ボンチ發行さる。

愈々競技の花たるマラソン、レースは来れり、スタートラインに整列し、藤谷審判員よりの説明をきき、午前十時十三分二秒號砲の合圖に、總員四十名出發す場内を一周す、北村、高橋先登をさる。女學校前を通り犬上川に向ふ、藤澤先登たり。第一關所にて、藤澤おくれ、毛利、富永、松井の順序たり。

十時五十秒街の方よりどよめき傳はり、校門の外に旌旗運く。すわマラソンの勇者は歸り來れるぞ榮えある今日の月桂冠果して誰が頭に落ちんとするか。

歡呼喝采裡に、先づ勇姿を現はせるは毛利なり、トラック一周、高く兩手を上げて決勝戦を動かす約一周おくれ、富永歸り來る。時に十時五十二分(第一着)なり、事終る!!今は唯芳しの名を永へに留めて止まんのみ。

- 第一着 毛利常次郎 十時五十三分六秒
- 二着 富永 貢 十時五十三分五十五秒
- 三着 松井 勝吾 十時五十四分二十三秒
- 四着 新井 泰榮 十時五十四分四十秒

- 五着 藤澤 昇圓 十時五十四分五十秒
- 六着 北村 勝
- 七着 成宮 義夫
- 八着 速水佐一郎
- 九着 垣見 庸三 十時五十六分三十五秒
- 十着 伊豆川作平
- 十一着 白髭 英露
- 十二着 川會恭一郎
- 十三着 山本 精太
- 十四着 宮尾源太郎
- 十五着 高橋 勉
- 十六着 川那邊海隆
- 十七着 高橋桂太郎
- 第二十二回 重荷競争
 - 一着 平川 開次 二十七秒
 - 二着 三橋 勝彦 二十七秒五分三
 - 三着 山崎 愛三
- 第二十三回 兎競走
 - 一着 奥村 益高 五十四秒五分一
 - 二着 中居 忠一 五十五秒五分三

三世に於て居眠りしてあの遅い〜近畿よりも未だ遅い龜公に名を成さしめてより怨は積り〜二十六億七千萬年臥新嘗膽功を奏し遂に一分以内にて決勝線を突破した。

第二十四回 兎競走

- 一着 岩木 義勇 五十三秒
- 二着 河村 庄次 五十三秒五分四
- 三着 小島 芳三

第二十五回 リレー競走(一、二年)

- 第一周 二年一年速力伯仲
- 第二周 二年級漸く勝越す
- 第三周 一年二年を追越す
- 第四周 矢張り一年先に在り
- 第五周

第六周(決勝)大勢遂に動かすべからず、一年級勝利を得 タイム二分五十九秒四分一

第二十六回 二百米突競走

- 一着 藤田 鷹鷹 二十三秒五分二
- 二着 安居恒三郎 二十三秒五分四
- 三着 宮川 英二

第二十七回 二百米突競走

- 一着 小森 一 二十三秒
- 二着 野寺 勇 二十三秒五分一
- 三着 野口 正三

第二十八回 二百米突競走

- 一着 澤井政兵衛 二十四秒五分四
- 二着 桑原勘兵衛 二十五秒
- 三着 西村英一郎

第二十九回 二百米突競走

- 一着 安居喜三郎 二十四秒五分二
- 二着 辻 富三 二十四秒五分四
- 三着 桑原 利夫

第三十回 二百米突競走

- 一着 富田 忠之 二十四秒五分三
- 二着 藤井源三郎 二十五秒五分二
- 三着 中田 三郎

第三十一回 一千米突競走

- 一着 宮内光三郎 三分四十二秒五分二
- 二着 吉田久二郎
- 三着 奥田勝之助

第一着の宮内選手歩をよく延いて始終先頭に立ち約半周の差にて二着決勝線に入る。

第三十二回 母衣引競走

- 一着 成宮 秀夫 二十三秒五分四
- 二着 安部 外雄 二十四秒五分四
- 三着 吉田 寛

五色の美しい天女の羽衣の様な母衣を漂はし、風の無い日に風を起す勇ましき。

第三十三回 母衣引競走

- 一着 藤田 義藏 二十五秒五分二
- 二着 瀧本 賢睡 二十六秒五分二
- 三着 西邦 省三

第三十四回 抜刀擬戦(一年)

陣太鼓否一發の號砲と共に勇ましく紅白二軍に黨を分ちチャアソレの聲勇まし。

戦歎む。

白、赤の順に整列。白勝つ、死者總數 生者の三分一。

第三十五回 盲馬三脚競走

- 一着 北川 佐一郎 三十五秒
- 二着 加藤 新一郎 三十七秒
- 三着 岡内 精一

此の時裝甲車動き出す。こは今回歐洲大戰亂西部戦線に於て最も功を奏し、〇〇中佐引率の下に我國に歸りし者なりと。運動場の中央にて發火。一大偉觀を呈せり。

第三十六回 盲馬三脚競走

- 一着 小堀 武夫 四十五秒
- 二着 谷澤 二郎 四十五秒五分四

第三十七回 倒立競走

- 一着 松木 幹一 四十五秒
- 二着 田中 義雄 四十七秒
- 三着 横關 虎三

松木君は例年の通り第一着、感服々々。

【午後之部】

此の日は彦根商工學校校庭に於て彦根町の運動會が催されてあるにも關らず、煙火の音にそゝのかされて、立派に飾られた四年級作の大アーチをくゞりて來る者續々、正午頃にはさしも廣い運動場も立錐の餘地もない様になつた。午後零時拾分再び戦端は開かれた。

第三十八回 源平野試合

ドン／＼と打出す太鼓の音に靜々進んで來た紅白二隊は東西に分れ一禮して會戦せしが白軍は總大將漢見良英を始め紅軍のため散々な目に合つた。

第三十九回 綱 引 (二年)

第四十回 障害物競走

- 一着 澤田 辰二郎 五十二秒五分二
- 二着 高橋 勉
- 三着 大庭 唯市

第四十一回 障害物競走

- 一着 小野 與惣次 四十七秒五分四
- 二着 小川 千代丸
- 三着 湯本 行爾

第四十二回 二分間競走

- 一着 成宮 秀夫 三周半
- 二着 安部 外雄 殆ど同時
- 三着 東野 太一郎

東野最初より先頭にありしが四周目に安部に追越され最後に成宮安部を抜きて砲鳴る。

第四十三回 武裝競走

- 一着 加納 均一 一分三十三秒五分四
- 二着 北川 佐一郎
- 三着 三和 一夫

川北君周章過ぎて第一着に來たがベク。

第四十四回 武裝競走

- 一着 野田 淨意 一分四十三秒五分の四
- 二着 茂森 徳二郎 一分四十四秒
- 三着 瀧本 賢睡

第四十五回 二千米競走

- 一着 宮内 光三郎 七分
- 二着 毛利 常次郎 七分五秒
- 三着 山本 壽彦
- 四着 磯崎 吟八

第四十六回 パン食ひ競走

- 一着 三橋 勝彦
- 二着 猪田 英三
- 三着 横關 虎三

人手が少いたためタイムが取れなかつたのは遺憾だ
パンを喰はへて来た者があつたがはね。

見物席(一般の)前でパンを食ふので高い所から吊
したパン故ナカノ、脚まえられず他人のどまつは
つて困るものもあり見物者はお臍の宿がへまです
て笑つて居たパンが喉へつまつて涙をこぼして友
達からひやかされて更に數を増して目を白黒もあ
る。

第四十七回 パン食ひ

- 一着 漢見 良英
- 二着 村岸寅之助
- 三着 雨森 正良

漢見君の食ひ振り中々見事

第四十八回 パン食ひ

- 一着 樋上 亮一
- 二着 北村 保

三着 垣見 庸三
樋上君中々早し。

第四十九回 パン食ひ

- 一着 細江 省三
- 二着 牧野 文治
- 三着 竹原 正之

四十八秒五分の一

一着圖抜けたり。

第五十回 二人三脚

- 一着 (谷) 小林喜八郎
- 二着 (若林) 孝三郎
- 三着 (大西) 俊一

第五十一回 二人三脚

- 一着 (渡邊) 彦太郎
- 二着 (澤井) 浩三
- 三着 (若松) 文太郎

第五十二回 二人三脚

- 一着 (佐々木) 馨
- 二着 (大橋) 武雄
- 三着 (藤田) 義雄

第五十三回 二人三脚

- 一着 (藤澤) 昇圓
- 二着 (山本) 壽彦
- 三着 (速水) 佐一郎

寄宿舎の作りものチャピン出で来りしも墜落して
失敗。

此の時タンク再び出て猛烈に射撃す。

第五十四回 四百米

- 一着 西澤藤治郎
- 二着 富永 保
- 三着 正村達治郎

第五十五回 戴囊競走

後生大事と頭に囊ユルリくと大急ぎ。

第五十六回 二百米

- 一着 三原寅三郎
- 二着 藤野 鷹鷹
- 三着 山本 精太

第五十七回 二百米

- 一着 安居喜三郎
- 二着 橋本 義雄
- 三着 藤井源三郎

寄宿舎の大龜現はる。

第五十八回 リレー競走(五、四、三年)

終始五、四、三年の順で遂に五年生勝ちタイムは二
分と四十五秒、四年はそれより五秒後れ三年は更
に七秒後る、此の時午後二時十四分。
五年生の應援振り中々見事也。

第五十九回 小學校生徒

- 一着 北村 秀和

- 二着 富田
- 三着 (北川) 忠雄
- 四着 安部

北川さんと加藤さんの間に三の字の旗を置いて坊ちやんとあらしひあり二人に賞品を授けて事済。

第六十回 小學校生徒

- 一着 丸山富士高 二十六秒
- 二着 深尾 捨雄
- 三着 藤本 敏郎

第六十一回 小學校生徒(二百米突)

- 一着 栗橋 二十六秒五分四
- 二着 脇坂
- 三着 辻 孫四郎
- 四着 森 文吉

第六十二回 商業學校生徒(四百米)

- 一着 上森 五十八秒
- 二着 柴田
- 三着 田原
- 四着 松居

第六十三回 工業學校生徒(四百米)

- 一着 岡 五十八秒五分三
- 二着 横井
- 三着 北川
- 四着 中村

第六十四回 棒 倒

中々元氣があつて出場者も多かつたがヤハリ勝負が早すぎて變な心持がした。

第六十五回 來賓競走(二百米)

- 一着 岡本氏 二十四秒五分一
- 二着 中村氏 二十五秒
- 三着 瀧口先生
- 四着 大日方氏

第六十六回 優勝者一公里競走

- 第一周 宮内光三郎先登 椋田、木下之に續く。
- 第二周 成宮秀雄先登 宮内椋田續く。
- 第三周 吉田先登となり 宮内二番、木下三番、椋田遙かに後る。
- 第四周 宮内、吉田、木下の順。

決勝

- 一着 宮内光三郎 三分八秒五分一
- 二着 吉田久二郎 三分十三秒
- 三着 木下 長保 三分十四秒五分二

第六十七回 職員競走

- 先生總出の大競走
- メンバー(赤) 藤谷先生 本多先生
- 淺井先生 寺島先生
- 世森書記 笹野助手
- 池田(健)先生 丹羽先生
- 谷口先生 久野書記
- 上松先生 田中先生
- 池田(街)先生 室谷先生

以上

- (白) 瀧口先生 上野先生
- 藤下先生 森下先生
- 白田先生 川島先生
- 東林先生 太田先生
- 藤田校醫 大和田會計係
- 山本先生 眞野先生

安河内校長 松永先生

極く少しの事で赤勝つ。

タイム (赤) 十二分五十二秒

(白) 十二分五十三秒五分の三

藤谷先生と瀧口先生の走り方中々早し。校長先生は悠々とし赤の爲に益する所甚だ多し。太田先生は近眼のため方角を誤られて白甚だ後る。森下先生姿勢甚だ宜し。池田街、松永、室谷先生は御商賣柄だけあつて敏速也。

第六十八回 合同體操(一、二、三年)

第六十九回 中隊教練(四、五年)

第七十回 分列式

分列式後校長の發聲で萬歳を三唱し後じまひをし解散時に夕陽今將に沈まんとし邊り一面輝色に彩色す。

本日の寄宿舎の作りもの中々の上出来にて傑作多し。

思ひ出せしものを記せば、飛行機孔雀茸、池田式ガンくび、チャピン、仁丹

1106

の商標、亀、飛行船、汽車、帽子、空中電車、達磨など、五年生のタンクは雄壯にしてよい思ひつき見物は大いに感心せり。百年生のアーチは、例年より立派にして骨折察すべし。

大正七年度校友會收入決算書

科目	豫算高	決算高	差引
短艇改造費積立	1,050,000	1,050,000	—
新入會金	131,000	133,000	2,000
預金利息	36,010	21,330	14,680
職員贖金	142,540	147,190	4,650
生徒贖金	181,500	193,210	11,710
前年度繰越	270,555	270,555	—
雑収入	—	5,070	5,070
計	3,445,075	3,598,115	153,040

大正七年度校友會支出決算書

科目	豫算高	決算高	差額
短艇改造費繰越	1,050,000	1,050,000	—
同本年度積立	150,000	150,000	—
記念文庫	150,000	150,000	—
學藝部	35,000	24,350	10,650
記文庫	330,000	330,010	10
同本年度積立	150,000	150,000	—
武術部	115,000	114,970	30
水上部	330,000	326,250	3,750
野球部	290,000	289,550	450
庭球部	175,000	175,000	—
角力部	85,000	85,000	—
水上大會	80,000	81,870	1,870
陸上大會	100,000	110,355	10,355
雜費	270,000	267,875	2,125
運動場均費	33,740	33,740	—
遠足及登山費	50,000	38,000	12,000
豫備費	201,335	168,900	32,435
臨時陸球祝勝大會	—	28,060	28,060
計	3,445,075	3,388,680	56,395

大正八年度校友會收入豫算書

科目	金額	備考
前年度繰越	259,455	(収入超過) 15,040
短艇改造費積立	1,100,000	(支出超過) 106,395
新入會金	130,000	—
預金利息	60,000	—
職員贖金	141,000	—
生徒贖金	240,000	—
計	4,211,435	前年額ニヨル五百五十人平均

大正八年度校友會費支出豫算書

科目	金額	備考
短艇改造費繰越	1,100,000	—
同本年度積立	100,000	—
記念文庫	160,000	—
學藝部	50,000	—
記文庫	50,000	—
武術部	150,000	—
水上部	330,000	—
野球部	290,000	—
庭球部	175,000	—
角力部	85,000	—
水上大會	80,000	—
陸上大會	100,000	—
艇庫擴張費	130,000	—
角力場屋根費	70,000	—
遠足登山費	50,000	—
臨時大會費	30,000	—
武術教師備聘費	104,000	—
地均費	50,000	—
雜費	110,000	—
豫備費	167,435	—
計	4,211,435	庭球大會

科目	金額
短艇改造費繰越	1,100,000
同本年度積立	100,000
記念文庫	160,000
學藝部	50,000
記文庫	50,000
武術部	150,000
水上部	330,000
野球部	290,000
庭球部	175,000
角力部	85,000
水上大會	80,000
陸上大會	100,000
艇庫擴張費	130,000
角力場屋根費	70,000
遠足登山費	50,000
臨時大會費	30,000
武術教師備聘費	104,000
地均費	50,000
雜費	110,000
豫備費	167,435
計	4,211,435

滋賀縣立彦根中學校 校友會 支會 支出決算書

二〇六

明治廿七年五月三十日內務省認可
大正十年三月一日印刷
大正十年三月五日發行

【非賣品】

發行所 滋賀縣立 彦根中學校 校友會

代表者 白田 紀 六
滋賀縣立彦根中學校內

印刷人 河田 貞次 郎
岐阜縣大垣市郭町百五十三番戶

印刷所 西濃印刷株式會社
岐阜縣大垣市郭町百五十三番戶

滋賀県愛知川町愛知川
田中二郎
電話(〇七四九四三三〇三五)

史料名	校友会雑誌 2-30
元所持者	田中二郎 (MOS 11年卒)
提供者名	同上 (愛知川市・町)
複写年月	H3年2月